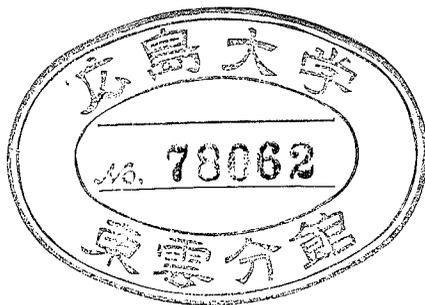


方言の山野

一ことばのさとをたすわてー



方言は山野に生きてつる

その地方語は山の奥野のはて  
島の浦々に息づいてつる

方言の山にわけ入り

方言の野に立つて

地方々々の生きてたことばの世界に  
ひたる時

ことばのはたらきとつうものが

ひしひしと身にせまってくるのをおぼえらる  
日本語とはこううつつものかとの実感が  
わいてくる

方言の山野を行って

ひたすらに日本語の生きてけたらく  
すがたをとりえらるることにつとめたい

# 目 次

## 「方言の山野」への出発 1

はじめのはじめ（「コトバ自覚」のたび）……………2

イヤタイ・3      イーヤ・4      ナニヤラカヤラ、イロイロカイロ・5      よそことは・6

方言自覚・7      話す楽しみ・8      私ども子どもは・10      ことを知ること      ことはの

部落差・12

くに出て……………13

伊予ことばの地方差・15      松山から広島へ・15      シェ・17      イエ・17      東條操先生・19

## 瀬戸内海地方を歩く 21

・大三島は方言の宝庫だ……………22

『方言採集手帳』・24

瀬戸内海方言の調査へ……………25

瀬戸内海地方を歩く……………27

「中国・四国・西近畿（兵庫県・大阪府）」の見かたへ……………29

「西日本」の見かたへ……………33

全国深部調査にかかると……………37

全国調査への志のめばえ……………38

西近畿・中国路の旅……………40

調査項目・40 丹後地方の踏査・43 文アクセントの調査・44 表現法の調査・44

旅の思い出・45 伯耆のおばさん・46 安来やすきの町で「キ」の発音を・49

広瀬町の夜・51 菊の葉のてんぷら・52 中国陰陽の旅・53

婚礼に招かれてのあいさつことば・54

出雲今昔……………58

## 九州方言の深みへ 61

調査の仕事	62
表現法調査要項(私案)	62
日向から大隅へ	70
あとの整理	75
文の形	76
私のつとめ	76
日向から大隅へ	77
青島の手まえへ	77
今の「日南市」へ	78
日向から大隅へ	80
大隅高山町へ	80
ウエンソン先生のところで	81
方言の宝庫	83
天草から薩摩へ	84
天草	84
佐伊津村	86
天草高等学校	90
天草西岸の高浜村	91
堀田さんのお宅で(本渡のことば)	93
牛深町	94
水俣行き	109
薩摩へ	112
笠沙町の村むら	115
五島列島	132

雪の峠	138
相手を見つけること	132
ナルバンバ	134
黒瀬という部落	136
大宝の子どもたち	136
話しの座	134
うわさと理解	135
北の国に分け入る	141
東北・関東・北陸	142
九州と東北	142
昭和十四年八月	142
はじめての経験	143
北陸路をたどって	144
奥羽の日本海がわ	160
金沢弁	144
能登へ	147
越中泊町	153
巡査さんと宿屋	156
庄内弁	160
船川港	162
津軽半島へ	163
なんぶ野辺地町	172
のちにふたたび野辺地町を訪ねて	176
十和田湖畔	177

雪の盛岡駅 ..... 182

小笠原リツさん・183  
つけそえて・184

四国二題 187

□ 四国のおもしろみをさぐる ..... 188

寒風山トンネルをぬけて ..... 189

西条から南へ・189  
桑瀬の夜・191  
日の浦・193  
田井へ・193  
「伊予東部」弁・195

徳島県の祖谷いづや ..... 196

□ 四国の深いおもしろみ ..... 200

近畿を歩く 203

紀州日高郡 ..... 204

片串へ・220  
片串から滝頭まで・222  
河原川まで・224  
河原川の夜・224  
有田郡へ・125  
兵次郎さん・227

十津川ひとり旅

吉野川をさかのぼって

上多古こうたこというところ

この地方のことばの特色

川口音吉翁

俳句と歌

吉野の禪僧さん

ボタンなべ

伊賀の子どもたち

先生、去ネー!

# 中部地方

## ——人生模様

249

夫婦の縁

二度目の出会い

男まえにほれぼれ

身のうえばなし

甲州の宿

229

232

235

238

240

243

244

250

252

253

254

257

# 関東点描

263

九十九里浜へ

関東の宿

栃木県の矢板で・269

埼玉県かすかべの春日部の宿・271

なになにしてツカラ

日本橋とうきよう弁

# 開拓の旅

— 研究開拓の旅、無限につづく旅 —

283

小さくてしかも広い国

北海道のはつ旅に思う

愛の方言学

あとがき

264

269

271

272

273

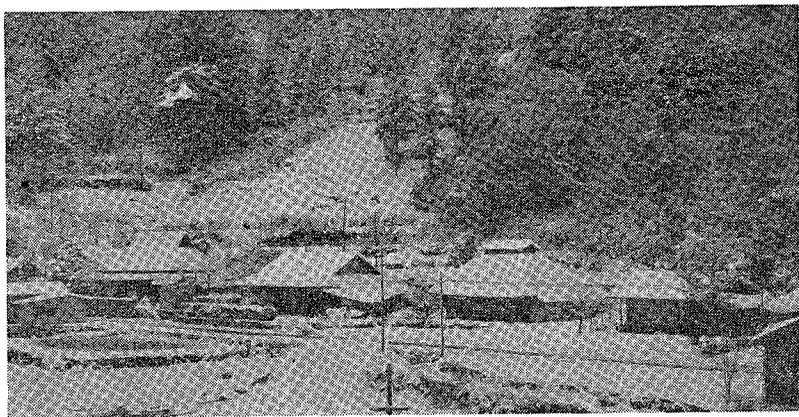
284

285

289

291

「方言の山野」  
への  
出発



広島県・湯来

## ○ はじめのはじめ（「コトバ自覚」のたび）

まだ小学校の低学年のころ、気づいてみると、私どものことばは、学校の先生のことばとは違っていました。

私のうまれた所は、瀬戸内海の中ほどにある島です。この島は、愛媛県に属しますが、広島県に近よった島です。芸予叢峰と言われる一群の中ほどにある島です。私は、この島の北端、肥海<sup>ひが</sup>という一寒村にうまれました。小学校は、この村の中ほどにあって、一、二年が一組、三、四年が一組、五、六年が一組という複式学級の学校でした。

島は、今、述べたように、広島県にくっついた島なので、昔、広島県への移管ばなしもおこったそうです。私がおのころついたところは、たまたま、父が村長をしていて、そのような話しを聞かせてくれました。元来、大三島が松山藩に所属したため、いきおい、この島が愛媛県下となったのです。

どうして、私が、かなり早くから、自分らのことばと学校先生のことばとの違いに気づいたかと言いますと、学校の女の先生が、私どもの部落に宿をとっていて、そういう先生が、私の家と、わりあい親しく交わったからでもあります。夕方になると、いたずら坊主の私が友だちを誘って、ふろをわかします。当時は、井戸からつるべで水を汲んで、ふろに運ぶのが、子どもにはたいへんな仕事でしたが、こればかりは、友だちと元氣よくやった覚えがあります。それというのも、先生にふろの案内に行くのがたのしみだったからです。さて、先生が見えると、家のものと、



「イタイ。」です。聞くほうの私どもは、なんとも異様なことばを聞く思いがしました。ことばのアクセントの違いが、私どものあたまたに大きくうつったのです。いかに鈍感な子どもたちにも、毎日のことばの、いちいちのアクセントの違いというものは、ことばの異様としてうつったのです。

たびたび、私どもは、先生のことが変わった。と思つたようです。また、変なことばだ。と、友だち同士が言いあつたりもしたようです。その、私どもの「変な」は、「イナゲナ」（異なげな）です。広島弁です。さて、「イナゲナ」と言うのを先生が聞かれると、「イヤタイことばだ。」と言われます。「イヤタイ」の「イヤ」は、「いや。」などと言う時の「いや」と同じものでしょうか。そういうことばを、形容詞につくりあげたのが、「イヤタイ」だと思えます。ところで「イヤタイ」がまた、私どもには、なんとも「イナゲナ」ことばだと思われるのでした。

「イヤ。」

このような地方ヅカの先生を、学校の先生にあおいで、私どもが、毎日の学校の生活をしたころ、先生への「いいえ。」の返事は、なぜか、「イヤ。」でした。この返事ことばは、私どもには、小学校の学校ことばとして、じつに特定のものだったのです。どういいういきさつで、これがうまれたものか、ともかくも、私どもが入学してみると、先輩たちは、先生への「いいえ。」の返事の時、みんな、「イヤ。」と言つていたのです。

小学校三、四年のころだつたと思えます。新しく赴任された男の先生が、このことばを聞きとがめられました。「イヤ。」というのは、よくないことばだ。「いいえ。」と言いなさい。「こう言つてしかるのです。私どもは、「イヤ。」がなぜわるいことばなのか、さっぱりわかりません。心して、とっておきのよいことばをつかっているつもりなのに、先生は、わるいことばだと言われるのですから、とまどうばかりです。

先生以外に對しては、「イーヤ。」をつかうことは、絶対にありませんでした。私など、「イーヤ。」は、学校の對先生用のいいことばだと思つていました。今から考えると、おかしいことばですけれども、当時の子どもの頭は、今、述べるようなものだったのです。考えてみますと、これをよくないことばだと言われたのも、まことに当然のことです。はじめて赴任された先生が、子どもたちの「イーヤ。」を聞いて、どんなに驚かれたことでしょうか。が、今なら、私は、こういうことも言つてみたいのです。先生が、「イーヤ。」ということばの心理を、そうつとらえてくださったらなあ。と。私もから言え、ば、「イーヤ。」の心情を、ぜひにとらえてもらいたいところでした。ことばをとがめられて、とまどう私ども、あるいは、ふしぎに思い、不服にも思う私ども。この、もどもの、その場の表情を、先生は見なかつたのでしょうか。

私どものことばをとがめた、その先生が、「早くしなさい。」と言うときは、「ハヨー オシナ。」と言われたものです。私どもは、それが、「するな。」「してはいけない。」ということなのか、「せよ。」「しなくてはいけない。」ということなのか、わからず、とまどつたことを覚えています。

#### ナニヤラカヤラ、イロイロカイロ

伊予本土、つまり地方から見えた先生のことばを、私がまねた最初の例は、これです。

自分のことばと先生のとが違ふことを知りはじめて、私は、だんだんに、「ことば自覚」の旅にのぼつたと、今、言えましょう。旅、これは、他を意識することでもありませんか。他とつながることでもありませんか。

小学校四年の時だつたと思います。ある朝、部落の港から渡海船に乗つて、山陽路の竹原に行きました。その船の中でのことです。自分の家の近所の人たちが、たくさん乗りあわせていた心やすさに甘えて、私は、ばかにはしゃい

だようです。そして、何の拍子でか、女先生のことばをまねました。その先生のことばをそっくりまねたのか、その調子にあやかっただのかが判然としませんが、要するに、「ナニヤラカヤラ イロイロカイロ。」と声色をつかって発言したのです。一座の人たちが、どっと笑いました。私は、はずかしいような、誇らしいような気もちになったことを覚えていきます。

考えてみますと、これは、私が、「よそことば」をまねた最初です。

「日本コトバの旅」に、一生をかけようとするようになった私の、「ことばへの旅」——記念すべき旅が、ここにあつたと言えましょう。

### よそことば

「よそことば」という意識は、村の人たちに、いつも、よく生きていたように思います。私の少年時代を通じて、私は、しばしば、村人の「よそことば」という意識に、気をとられた覚えがあります。

ことに老人たちが、男女とも、「よそことば」ということを、よく言つたように思います。大正の初年ごろ、私の部落では、いわゆる出かせぎがさかんでした。そういう人たちが、盆や正月に、旅のことばを持って帰れば帰るほど、村では、「よそことば」という意識がさかんになったように思います。これは、私のことですが、まだ、学校にあがる前、旅から時たま帰ってくる、ある年輩のおじさんを、「こんばんさん、こんばんさん。」と呼んでいました。その人は、きつと、私の家に、夜分、来るとき、「こんばんは。」と言つてはいつたのでしょうか。そのことばが、「よそことば」として、私の耳にひびいたようです。

一般に、大阪へんで働いて帰る人がよく、ことばじりに、「ナー」をつけました。「よそことば」というのは、「ナ

「をつけることばなのかなあ。」と思われたくらいです。やや長じて、私もよその学校に行くころになると、「ネー」というのも、「よそことば」の大きいしるしと、村びとたちに考えられていることがよくわかりました。私の親類の兄貴ぶんの人で、東京に遊学した青年がいましたが、最初の夏休みの一月あまり、はさみ将棋をして遊んでも、海あそびをしても、ひとことひとことに、「ネー」をつけるのを、私も、まあ、なんと。と思つたことでした。なにぶん、村では、ことばじりに、「ノー」をつけるのが、つよいしきたりですから、「ナー」や「ネー」を聞かされては、いかにも、「よそことば」との感を深くしたわけなのです。こういう、「よそことば」の自覚は、筆記具で言うとき、えんぴつと万年筆との違いを知ることにも相当しましょうか。また、旧の着物から新式の洋服へというのにも似ています。要は、いなかと都会との相違ということになります。当時、「ヒラケタ」とか、「ヒラケン」とかいう言いかたが、よくおこなわれましたが、その「ヒラケタ」のが都会です。「ヨノナカ」、あるいは「セケン」と言えば、これも、都会を頭においた言いかただったので、社会生活上の、そういう考えかたのもとで、「よそことば」の、「ナー」「ネー」といったような、耳だたいしことばのしるしを、私どもは、とらえたように思います。

### 方言自覚

「よそことば」――共通語の自覚は、方言自覚につながります。この方言自覚が、いわゆる方言コンプレックスとなります。

老人たちと子どもたちとはかなり違ったことばの生活をしていることも、だんだんわかるようになりました。子どもながらも、老人のことばを見聞きしていると、自分らのは違ふことが、わかつたのです。その老人たちが、いわゆる「よそことば」に対して、ある抵抗意識をもっていることも、感じられました。これは、いわゆる方言コンプレ

レックスの裏がわの気もち、すなわち、自分のことばを守ろうとする半意識的なものであったかもしれません。

中年、青年の人たちの、ことばの生活のことは、さっぱり覚えがありません。言ってみれば、私どもを刺激するだけの特徴がなかったのではないのでしょうか。——老年者たちのばあいほどには。

青年のことばで、ただ一つ、子ども心に、何のことかなあ。／＼と思ったことばがあります。それは、「ジュースンショ」というのでした。青年団の人たちが、「ジュースンショへ行く」と言うのが、何のことだか、ちっともわかりませんでした。のちに、中等学校の生徒になり、字が読めるようになって、その、青年団の人たちが寄った建物に行ってみますと、「縦覧所」と書いてあるではありませんか。中に、ほっぽり出してあるのが、新聞でした。／＼なるほど、青年の人たちは、以前も、夜分に、ここへ新聞を読みに来ていたのだなあ。／＼とさとしたことです。

今日、私は、方言の語い（語彙）の研究の一部として、民間漢語の研究を手がけていますが、その、民間漢語と私がいいますものが、この「縦覧所」のたぐい입니다。早くから、方言の世界に生息した漢語群を、なんとかしてほりだしたいと思ひます。そういう民間漢語の研究の手はじめが、じつは、この「縦覧所」ということばの聞きとりであったと、今は、言ってもみたいのです。

### 話す楽しみ

私の少年時の記憶で言っても、老人たちは、寄りあうと、たがいに話しあうことを、楽しみとしていたと言ひことができます。つまり、老人たちは、話す楽しみを、よく持ったのであります。これは、中年者たちのばあいも、そうです。（老年者、中年者について、今、思ひ出しますのは、その男性たちのばあいのことです。女性たちのばあいのことは、あまり記憶にありません。）

青年者たちは、老年者や中年者のように、当時、話す楽しみを持ったかどうか、これも、よくわかりません。話す楽しみを持たなかったはずはないのですが。とくに、老年者、中年者たちのばあいには、それが、青年者たちのばあいには見られない、ある、おちついた楽しみだったように、今、思いおこすのです。

老年者たちのばあいをとりあげてみましょう。私の家の近くに、鶴太さんというおじいさんがいました。冬分は、毎晩、そのうちのいろいろで、大きな木の株が燃やされて、老年者たちは、てんでにそこへ寄っていきます。私の祖父なども、夕食がすむと、寒い夜でも、祖母のふしぎがるのをあとに、毎夜のごとく、このいろいろのつどいへ出かけたのでした。ときに、祖父のおともをしたことがあります。行ってみると、みんなで、たき火にあたりながら、夜、遅くまで、話しあいを楽しんでいきます。それこそ、よもやまの話しで、あることないこと、話題はつきません。鶴太さんは、とくに、怪談が得手だったようです。古典落語の名作のくりかえし口演のように、鶴太さんが幾度でもくりかえしたのは、ある夜、狸に化かされて、隣村まで出かけて行った話でした。話題は何であるにもせよ、寄ってくる人たちが、いかにも静かに、また、いかにも楽しそうに、話す喜びを分かちあつたことが、私には、今も、印象ぶかく思い出されるのです。

ときには、このいろいろの席で、講談読みがおこなわれました。やや若い人で、本を読むことの好きな人がやってきて、たとえば、塙団右衛門の一席を読むといったあんばいでした。たまたま、そういう席に居あわせて、私は、その読みの、ある、きまった調子の、まったく機械的な反復を、いかにも変だと感じたことを、今、思いおこします。そういう読みのあとにも、また、ひとしきり、人びとの話す楽しみがつづいたことは、言うまでもありません。

もみすりとか田植えとかで、一軒の家の手つだいをした親類のものたちが、夕食後、火ばちを囲んで、夜、遅くま

で、話しあいを楽しんだことも、私どもの思い出の中の、特記すべきこととしなくてはなりません。老年者、中年者、ともどもに、こういう機会には、あい寄って、遅くまで話す楽しみを味わったようです。おとなたちのそばにすわって、聞くともなく、その話しあいに関き入った覚えが、私どもにもあります。

そういう、おとなたちの言語生活を見聞きして、子どもは、どのようにか、ことばの生活を自覚したと思うのです。このような経験もまた、「ことばへの旅」の、少年時代での大切な経験であったと言わなくてはなりません。

### 私ども子どもは

私ども子どもは、土地ことばの中で、どんな言語生活をしていたでしょうか。簡単な例から始めます。自分のことは、「ワシ」です。つぎの、わるいことばは、「ウラ」です。「ウラ」に対するわるいことばは、「ワレ」です。これで、相手呼びます。「ワレ」よりも、すこしよいことばは、「ヨイ」です。「キミ」というような気もちの時間も、「ヨイ」をつかいました。相手を誘って出かけようとするときは、「ヨイ、イコーヤー。」でした。「ヨイ」というのは、おそらく、「オイ」などと同じような呼びかけのことばでしょう。その呼びかけのことばが、対称の代名詞になったのだと思われます。対称の代名詞「ヨイ」に「コー」をつけた、「ヨイコ」というのもありました。

返事のことばは、「エー」です。これは、共通語の「ハイ」に相当します。今日、共通語で、「ハイ」の次ぎに位するものとして、「エー」がありますが、その「エー」とは違うのです。その「エー」よりは、いい「エー」なのです。

「きみ、来たまえ。」と言うときの、「来たまえ。」に相当するものとしては、「オジャレ。」というのがありました。また。「オジャレ。」とともに、「コジャレ。」というのもありました。元来、「オジャレ。」と言ってい

たはずです。(「オジャル」ことば)。その「オ」を「コ」(来)にかえたのが、「コジャール」です。

「ありがとう。」は、「ダンダン。」でした。「ください。」、「おくれ。」は、「ツカイ。」でした。

このような地方ことばの中にいて、さきほどから述べたような、おとなの話す生活を見聞きしたのでした。そして、子どもの生活を、しだいにひろげていったわけです。

子どものことばの生活をひろげなくてはならなかった特別の機会といえは、よその家に、ごちそうに招かれていった時です。そういうばあい、私どもは、「ヨバレテ キマヒタ。」と言いました。ふるまいの家へ出かけて、入り口のしきいをまたげると、むらがる人に向かつて、だれに言うともなく——じつは、その家の人に言うのが本意なのですが——、大きい声で、「ヨバレテ キマヒタ。」と言ったものです。その反応があるばあいには、救われるのですけれども、だれも、何とも答えてくれないというような時は、なんとも頼りなくて、さびしくて、来なきやよかったです。／＼と思つたものです。いったい、よそへよばれて行くときは、祖父母などからも、かようかようにあいさつするんだよと教えられたものです。それを忘れないようにと、口ずさんだりしながら、出かけて行って、そこへ到着すると、あたふたと、そのあいさつの口上を述べたものです。こんな時、おとなたちは、よくできたと言つては笑い、「おとなじみて、まあ。」などと言つては笑いましたものでしょう。

私は、この種の経験を重ねるうちに、よばれて行くのが、まったくおつくうになつたことを覚えています。うちのものにくつついて行こう、行こうとしました。

しかし、今にして思えば、その、なんだかつらかった経験も、自分のことばの生活をひろげるのによい機会だったと思えるのです。おとなたちに交わる中で、特殊な機会などに、私どもは、ことばを知つていったようです。

### ことばを知ること ことばの部落差

気づいてみると、自分の部落と隣の部落とで、ことばが違っていたのでした。小学校も三、四年になると、春や秋の遠足には、隣部落や隣村に出かけることがありました。そんなおり、たとえば隣村の小学校でお昼弁当にする時など、見も知らぬ多くの同輩から、その土地ことばの話しぶりを聞いて、変なことばだなあ。と感じたのでした。じじつ、今日でもそうですが、当時も、私どもの大三島では、村ごとのことばが違い、また、部落によってもことばの違うことが多かったのです。ちょうど、この大三島が、中国系のことばと四国系のことばとの衝突する所、出会う所であるためでもあります。まったく、ことばの村落差が著しいのであります。高等小学校の生徒となつて、自村の中央部落、大見おおみにある高等小学校に通うようになりますと、わが鏡村の三つの部落の子どもの寄りあい生活の中で、三部落相互間の言語差を、毎日、経験したのであります。今、思い出してもふしぎですが、海の満潮のことを、大見部落では、「ダンブツ」と言っていました。満ちきって、まだ引きもしない時点のさまを言うものだったようです。「ダンブツ」が強調されると、「オーダンブツ」でした。畑の中耕をしている人に、こちらから、ねぎらいのことばをかけるのには、中耕していらっしやいますか、という意味で、「ウチヨルンカ。」と言うのが私どもの肥海部落ですが、大見部落では、「ウチヨールンカ。」と、「チヨ」を引きのばします。私どもが引きのばさないところを引きのばすのが、なんとも異様に聞こえました。

ある時、大見の部落の人たち、幾人かが、私どもの部落に、山の竹を買いに来ました。竹ざおにしたりするためのものであったでしょうか、ひとりひとりが、十本ばかりをたばねて、山から、私の家の近くにかつぎ出してきました。その竹を見た、私どもの部落の老人が、

「セシヨーナ タケジャ。」

と言ったところ、大見部落の人たちは、どっと笑ったのです。つまり、大見では、そういうことばをつかわないのでした。「セシヨーナ」は、「異ナゲナ」というのに近いことばで、ろくでもない、よろしくない品物を評する形容語です。

ことばの部落差は、人情気風の部落差につながります。異様と感ずることばをつかう人びとに対しては、子どもながらも、なじみにくかった覚えがあります。

## ○ くに出る

満十五歳になりますと、私は、師範学校の生徒として、松山市の愛媛県師範学校に入学しました。全員入寮、寄宿舎生活です。さて、ここで、私は、ことばの異域に身を置くことになりました。先輩たちの日常会話を聞くと、「ゾーカナ。」というような言いかたをしています。私が郷里で、たえて聞かなかったことばづかいです。これから、自分も、「カナ」などと言わなくてはならないのかと思うと、まったく心ぐるしくなりました。あんなことが私に言えるだろうか、気をもんだのであります。「どうどう してもらいたい」時は、「…… シテーナ。」と言います。こ

の「シテ」ナ」が、なかなか言いにくいのでした。「カナ」とともに、「ガナ」もあります。いわゆる松山ことばで、漱石の『坊っちゃん』にも出てくることばづかいです。こういったことばづかいが、いちいち、まねるのに困難なことばづかいでした。それでいて、まねなくては、協同生活ができないことも明らかなのでした。それだけに、いわば、言語生活に対する苦悩が大きかったことを覚えています。

ひとくちに申しますと、私は、ことばの異域の中で、ひじょうにさびしい思いをしました。生活が、この、ことばゆえに、楽しくはなかったことがあります。一年生当時のことですけれども。

のちに、三年生、四年生と学年が進んでも、この異域のことばを、自分のものにしきることはできなくて、自分としては、一種の異和感を持ったのでした。ことばについて異和感を覚えるとともに、そのことばに生きる人びとに関しても、一種の異和感を覚えたのでした。おおぎように言えば、人間関係に悩まされることがありました。

私の郷里から来ていた、ひとりの先輩は、私どもの出身地の単語アクセントと、松山ことばの単語アクセントとが、いちいち違うのに着目して、ついに、図書室でアクセントの書物を借覧し、どちらが正しいか、と、くわしく調べようとしたのであります。ある時、その先輩は、図書室で、私に、『国語の発音とアクセント』という書物を見せられました。そして、先輩は、

「肥海のことばのほうが正しい。」

と断言したのであります。その本は、佐久間鼎博士の一著作でした。なるほど、語アクセントに関しては、松山の人たちが、空から降る雨を、「アメ」と言い、私どもは、大三島で、「アメ」と言うのですから、私どものことばのほうが、東京語（佐久間博士の記述）に近いわけです。先輩は、このようにすぐれた研究をしましたが、私には、そう

いう努力心もなくて、ただ、異域のことばになじみかねたばかりなのでした。

### 伊予ことばの地方差

私のなじめなかった伊予弁が、なお、伊予のそちこちで違っていたのですから、また、驚きです。(その、ことばの違いに応じて、人からも違うように思われました。)

伊予ことばは、だいたい、東予のことば、中予のことば、南予のことばというように、見わけることができます。私の松山生活当時も、まさに、このような地方差が感得されました。今治市を基点に東へたどることができたのが、東予のことばでした。松山市中心のことばが、中予のことばです。大洲市方面から南が、南予のことばでしたが、そのうち、大洲市を中心とする一郡のことばは、中予と南予との境めの、風変わりなことばとも言ってよいものでした。大洲市中心のことばは、とくに、節まわしが変わっているので、すぐに、その変わりなりに気がついたのです。

南予の人たちは、「そうですね。」と説明するときに、「ソーデス ライ。」などと言うので、私には、ことばづかいの特色が大きいように思われました。南予の、中東予からの方言差の大きさに比例して、人がらの違いも大きく、この南予の人には、いっそうの親近感を覚えたりもしました。

毎日の言語生活のうえで、ある種の孤独感やさびしさを覚えたことは、当時の私にとっては、深刻な事実でした。一方から言いますと、寄宿舎の一部屋にいても、県下のそちこちのことば、つまり、伊予ことばのそれこれ聞きとることができたのですから、のちの方言研究からすれば、よい経験をしたと言えます。私は、師範学校生活の中で、ともかくにも、ことばを知る旅の道歩んだこととなります。

松山から広島へ

松山での四か年の生活をおえて、昭和三年、広島の高師範学校に入学しますと、これはどうしたことでしょう、にわかに、ことばの同和感を味わうようになったのです。今、考えてみれば、当然のことで、広島ことばは、わが大三島のことばと、同系のことば、似よりの大きいことばです。ですから、言ってみれば、広島に来て、自分のうまれ故郷のことばの、親せき、(親戚)のことばの国に住むようになったわけです。この生活で、私の心がどんなにゆるんだことでしょうか。ゆるみ、かつ、なごんだ私の気持ちも、今もはっきりと思いおこすことができます。広島では、毎日のことばの生活に、のびのびとした気分で、ひたることができました。

松山時代の初期には、休暇あけに、寄宿舎に帰って行くのが、おっくうであったり、もの悲しかったりしましたが、広島での生活では、休暇あけに、寄宿舎に帰って行くのが、むしろ楽しかったのです。そこには、言うに言われない心やすさがあり、そこへはいれば、すぐに安定感を覚えることができました。重くるしさを感じるのと、ほっとした気分になるのとの違い！ことばの違いが、そのように気分を左右するものでしょうか。異和感と同和感との違いは、人間の生活にとって、まことに重大な違いと言わなくてはなりません。考えてみますと、松山では、とりあえず、ことばの抑揚が、私どもから言えば、風がわりのものであります。それに対して、広島ことばの抑揚は、私どもの生まれ故郷のことばの抑揚と同類型のものであります。このような抑揚の相違が、人間の心を、すぐに、どちらかへひっぱって行くものと思われまます。

広島の高師範学校の寄宿舎もまた、諸地方の人の寄り集まりで、いわば、方言の展示会場でした。おりしも、こちらはやや成長しているし、寄宿舎生活の楽しさはかくべつだったし、えたりかしこしと、私は、この展示会場をしきりにへ巡ることになったのです。広島での寄宿舎は、日本語の諸方言を知るのにつごうのよい場所でした。時がたち

ますと、松山で、一県下のことばの地方差を経験したことも、それを、客観的事実として、楽しく思いかえすことができるようになりました。

シ  
H

広島寄宿舎第一年めのはじめごろのこと、私どもの部屋で、私の「セ」の発音が問題になりました。兵庫県の摂津から来た同僚は、私の「セ」が、「シエ」だと言うのです。（——方言の展覧会を私が利用したように言いましたが、いや、じつは、私も、展覧会場に出品されたものひとりにほかならなかつたのでもあります。）私の「セ」が、「シエ」だとは、思いもかけなかつたことです。そこで、私は、

「いや、ぼくのは、普通の「セ」だ。」

とがんばりました。けれども、摂津の友だちは、だんじて自説を曲げません。やがては、部屋の他の同僚や先輩たちも、

「おまえのは、「シエ」だ。」

と言うのです。私は、不承不承に、相手が私たちの「セ」の発音をまねることに努めました。その努力の中で発見した方法が、「シエンシエイ」を「スエンスエイ」と言う、発音のしかたでした。この「スエ」を早めに言うのと、人びとの納得する「セ」になつたのです。

イ  
エ

もう一つ指摘された、私の方言発音に「イェ」というのがあります。これこそは、言われても言われても、気づくことができませんでした。のちに、帰省して、こんどは私が、老人たちの発音に注意してみますと、おばあさん連中

が、きわめて露骨な「イエ」の発音をしているではありませんか。たとえば、ノイエ。ノという時でも、老婆たちは、ノイエイエ。ノと言っています。このような露骨な現象にぶつかって、私も、自分の「エ」を内省してみると、なるほど、「英語」と言う時も、「イエーゴ」と言っています。これに気づいて、やがて、「イエ」の発音を「エ」になおすことに努力したのであります。広島生活の第一年め、すなわち昭和三年は、私には、このようにして、知らなかった自分のことばを、すこしずつ知りはじめ、よい機会になったのであります。郷土語を客観視する機会にも恵まれたわけでした。摂津の人に対しては、その音調、節まわし——つまり、文アクセント・語アクセント——のおもしろさを、こちらが指摘することもできるようになりました。

その摂津人のアクセントに興味を覚えたのもむりからぬと、今、思います。なんとすれば、松山で聞きなれた伊予弁のアクセント、それに通じるものを、摂津人が示してくれたからであります。広く四国人について、そのアクセントが、近畿の多くの人たちに類似することを知ったのも、この寄宿舎生活のころです。自分の（大三島の）アクセントが、中部地方以東の人たちのアクセントと一致することの多いのを知ったのも、このころです。

アクセントからではありませんけれども、私は、このころに、四国と近畿との関係、中国と中部地方以東との関係を感じるようになりました。日常の生活の中の、アクセントに関する、このような気づきの進展とともに、同窓の諸地方人に対する方言観察の目がこえていったようです。さいわいにして高等師範学校の寄宿舎には、ほぼ全国——北は北海道から南は沖縄にわたって——から、生徒諸君が来ていましたので、広い範囲にわたって、方言の地方差を経験することができたように思います。広島の寄宿舎では、スケールの大きい方言の旅をいとなむことができましたと言えます。

東條操先生

高等師範生活の二年め、新学期そうそうに、私どもは、東條操先生の新任をお迎えました。

# 瀬戸内海地方を歩く



大三島・宮浦港のあたり

## ○ “大三島は方言の宝庫だ。”

昭和四年の新学期、私どもは、新しく国語学という授業を受けます。そこに、はじめて、やや前ごごみのそうく（瘦軀）をお見せになったのが、新任の東條操先生でした。その最初の時間に、先生は、いわゆる「ハ行転呼音」の問題をとりあげられ、私どものつかっているハ行音は、もともと、フア行音であり、そのもう一段階まえは、パ行音であったと説かれたのです。私どもにとつての、国語の未知の世界を、あざやかに解きひろげられる先生のお話しに、ものどもは、まったく魅了されたのです。さてつぎの週のこと、先生は、

“前回の講義について、すこし質問してみる。”

とおっしゃったのです。

“だれにあてようかなあ。”

などとおっしゃりながら、出席簿の名列を見ていかれるうちに、ふと、藤原の姓にお目がとまったと見えて、

“おくげさんのようだ。”

とおっしゃりながら、私におあてになりました。これがもとになって、私は、後日、先生のお宅にお伺いすることになります。

ある夜、おずおずと先生のお宅に参上しました。私は、文法研究についておたずねしたかったです。ところが、先生は、いちばんに、

“郷里はどこか。”

とおたずねになりました。

“瀬戸内海の大三島です。”

とお答えすると、

“大三島は方言の宝庫だ。”

とおっしゃるではありませんか。この時、私は故郷で、村のことはをしきりに集めていられた、小学校恩師の多和義久先生のことを、すぐ思いかへました。ああ、それで、多和先生は、調べていらっしゃるのだな。と思ったことです。ともあれ、東條先生は、私のおたずねしたい心にはおかまいなく、しきりに、瀬戸内海大三島の話しをしていかれます。私は、自分の文法研究は、いったいどうなるのだろう。と心配しながら、先生のお話しについて、きます。ある段階までくると、私は、たまりかねて、

“方言の研究と文法の研究とは、一致しますか。”

とおたずねしたのでした。こんなあどけない質問をしたかとおもうと、今も、その時の自分のことが、おかしく思われるのですが、まことに、これが、私の真剣な問いであったのですから、あわれなことです。先生は、瀬戸内海方言の研究の必要や興味をお語りになるし、私は文法の研究のことを思うし、なんだか、わりきれない気もちが、その時、長くつづきました。くりかえし、

「方言の研究と文法の研究とは一致しますか。」

とおたずねしたのを覚えています。きつとおわりの段階であつたでしょう、はじめて、先生が、  
 「一致する。」

と、わかりやすくおっしゃってくださいました。それを機会においとましたように覚えています。下宿に帰ると、一  
 気に、「志決まるの日」という短い文章をつづりました。今も、それを持っています。

志が決まって、やがて、私は、瀬戸内海地方を歩きはじめました。

『方言採集手帖』

夏休みの直前、東條先生は、私に、二冊の『方言採集手帖』をくださいました。「一冊は多和義久先生へ。」との  
 おことばです。私は、この『方言採集手帖』をいただいた喜びにもえて、夏休みの帰省をしました。

多和先生は、私の、郷土語反省の恩師です。東條先生のおことばを伝えますと、先生は、ご自分のそれまでの調査  
 物をみんな、私に譲ってくださいました。そして、ご自分の研究結果について、かなり程度の高いお話しを、つぎつ  
 ぎにしてくださいったように思います。つまり、先生は、東條先生をいただいた私に、もはや、何かの望みを囁しはじ  
 めてくださいったのかと思います。

しかし、恵まれたものの過幸で、じつは、私には、そのころ、まだ、やる気がわき起こっていませんでした。多  
 和先生からも、ただ、お話しをうけたまわるばかりでした。東條先生からいただいた『方言採集手帖』にも、自身で  
 書きこむことはなくて、じつは、今日なお、その中では、おおかた無記録のままなのです。

ときどき思うことですが、人間、あまり恵まれ過ぎると、立ちあがる気力が、なかなかわきまません。右のころの、

恵まれすぎた私は、たとえてみると、親にふとんをかけられて寝ているようなものでした。かけてもらいながらも、時に、ふみぬいだりします。すると、親は、心をつかつて、また、やさしくふとんをかけてくれるのでした。

## ○ 瀬戸内海方言の調査へ

私の心は、いっこうにはずみませんでした。東條先生のご指導は、かなり積極的でした。たとえば、神保格著『国語音声学』の一冊をおわたしくださって、

“これを読め。そして、質問があつたら、何でも聞きに来い。”  
と言われたのです。私は、質問するために読まざるをえないことになりました。

そうこうするうちに、瀬戸内海方言研究の仕事に踏み出さざるをえなくなって、広島、愛媛両県の瀬戸内海諸島を歩くことになりました。学校の休暇に、調査の旅行をしました。

東條先生の、“大三島は方言の宝庫だ。”というおことばが、私には、一種不可思議な力のあるおことばに思われ、いわば、このおことばを頼りに、私は、瀬戸内海の島じまのことばの調査にとりかかったのです。高等師範学校三年生の夏休みのことだったと思いますが、一度、東條先生を、私の生まれ故郷、大三島の肥海にお迎えすることができました。一泊していただいて、翌日の朝のこと、先生をお送りして浜べに出ました。先生は、波しづかな内海を

ながめて立っていらっしやいます。ちようどその時、村人二、三の話し声が聞こえてきました。それをお聞きになりながら、先生は、

「うん。やっぱり、中国系のことばだね。」

とおっしゃいました。東條先生を瀬戸内海の島におつれたことも、私の瀬戸内海方言調査の、ひとふし、になったのです。

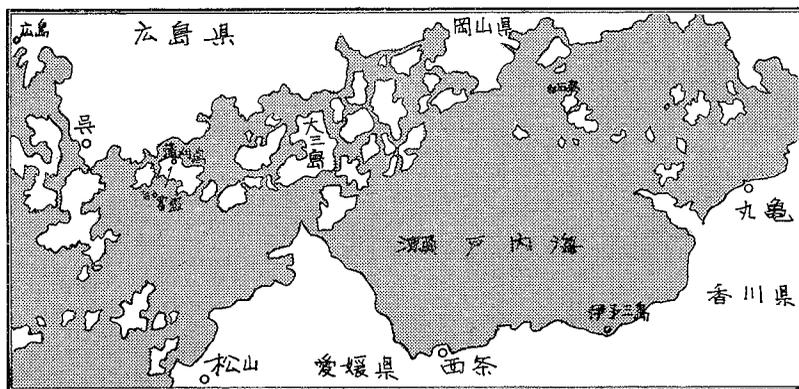
この仕事は、やがて、広島、愛媛両県方言の境界線の発見という研究に発展していきました。これのため、広島県と愛媛県の両県の小学校の先生ならびに師範学校生徒諸君に、調査を依頼することになります。これは、私の通信調査の、はじめての経験でした。両県を全般に調査し、かつ、隣接の県もすこしばかり調査して、やがて、その全体の結果を、三百数十枚の言語地図にまとめました。これが、私の、言語地図を作ったのはじめての経験です。言語地図にしてみますと、広島、愛媛両県の瀬戸内海の島じまが、明らかに、広島県がわのことばの島じまと、愛媛県がわのことばの島じまとに、見わけられたのであります。いわゆる境界線が、ここで帰納されました。のち、昭和七年、この言語地図の中の二十八枚が、広島方言学会年刊第一輯『広島愛媛両県方言分布図』として発刊されました。地方人の手に成る言語地図集が、いわば書物に近い形で世に出たのは、およそ、これが、わが国で、はじめのころのものであったかと思われれます。

## ○ 瀬戸内海地方を歩く

昭和八年の夏から秋に、広島県から岡山県にわたる島じまを歩きました。島びとの生活とことば、というような見かたで、島じまの部落をたずねて歩いたのです。民俗学的な興味の覚えはじめです。部落が港を持っていることも多いわけですから、漁業に関する問い聞きも、調査の中にふくめました。船をつくると、「船霊さん」を祭ります。その「船霊さん」に関するしきたりや言い伝えなども、そこそこで、なるべく綿密に聞いたりもしました。

この島じまの旅では、同時に、語アクセントの調査も試みました。この調査は、のちに、もうすこしひろげ、やがて全部のまとめを、「瀬戸内海島嶼のアクセント」として発表しました。（『方言』五ノ八）これもまた、全瀬戸内海の島じまが、アクセントのうえでは、どのように南北にふり分けられるかを見たものです。アクセント境界線の発見が主目標でした。

ここで、旅の余談をつけそえますと、広島県の蒲刈島を自転車で旅した時



のことです。上蒲刈島の泊という部落を出発して、つぎの宮盛という部落に行こうとしたのですが、時は、すでに夜になっていました。泊の調査を終えてからのことですから。村の雑貨屋で、自転車用のランプを買って、その光をたよりに、山越えをしました。松林のつづく山道をぬって行って、やがてのぼり道をのぼりきると、道が左に大きくカーブしました。そこをいせいよく走ったのですが、翌朝のこと、宮盛部落のほうから、その所を遠望しますと、なんとそこは高い絶壁の上です。私はゆうべ、あそこをどのようにして走ったのだろうと思ったとたんに、ぞっとしました。その記憶が、今もはっきりしています。

もう一つの思い出は、岡山県下の備中、白石島でのことです。日中、暑い盛りに、こちらがわの部落から、むこうがわの部落へ、峠を越しました。峠をといっても、畑みちを通って、ちよつとした山越えをするのです。そのおり、急いであがるうとすればするほど、脚が動かなくなつて、びっくりしました。どうしてだろうと思ひながら、しいて歩を運んだのですが、のちに、その時はもうすでにかっつけ（脚氣）であったことがわかりました。こののち、半年以上くらはいは、かっつけの養生をしなくてはなりませんでした。

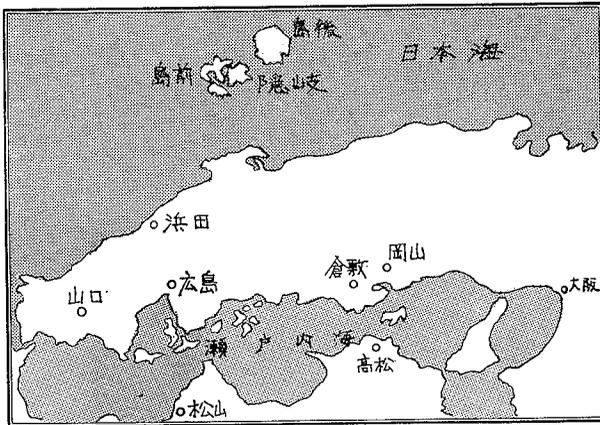
「中国・四国・西近畿（兵庫県・大阪府）  
の見かたへ」

東條操先生は、その『大日本方言地図 国語の方言区画』（育英書院 昭和二年）で、瀬戸「内海方言」という考えをうちだされました。それは、中国地方と四国地方とを、方言上、一元的に見ようとせられるものです。（山陰では雲伯方言を、四国では土佐方言を分別されましたが。）まさに、瀬戸内海という地域を中帯として、南北を統一的に見られたのであります。早いところに、このような方言区画を試みられたのは、一つのすぐれた見識であったと言わなくてはなりません。思えば、私は、この、瀬戸内海方言、の名の示すとおりに、自分の研究の関心を、瀬戸内海区域から、南北の中四国本土へとひろげていったのです。瀬戸内海は、東になると、近畿地方になりますので、いきおい、中国のつづきとして、西近畿（兵庫県、大阪府）も問題にすることになりました。

かえりみますと、昭和八年から昭和十年にかけてが、私の、中四国をしきりに問題とした時期です。たび重ねて、幾つもの旅行をしています。

四国一周の旅行もしました。岡山県から、兵庫県、大阪府へ行き、帰りは、兵庫県の播磨から岡山県の津山に出、さらに鳥取県に越えるという旅もしました。別に、兵庫、鳥取、島根、山口というようにまわったりもしました。岡山から、徳島、高知、香川とまわってきたこともあります。

この間にした仕事といえば、言語地理学的調査をめざしての調査依頼が、いちばん大きな仕事です。各県の女子師範学校の寄宿舎生のみなさんに、調査を依頼したのでした。相手がたを、このように限ることによって、資料の、ある種の純一を保とうとしたのです。調査を依頼したわけではありませんが、調査簿を相手がたのところまで持って行っ



て、お世話をしてくださる先生に、実際のとりあつかいをお願ひし、生徒諸君に面接することができたのは、なにより幸運でした。これで、私は、仕事を、ただの通信調査にはしなくていいです。一種の実地調査とも言えると考えております。

中国、四国、西近畿を旅行しておこなった、もう一つの大きい仕事に、語アセスメント調査があります。これも、各女子師範学校の寄宿舎の、そこそこの、舎生全部のかたについて調べました。面接調査です。つぎの仕事には、いわゆる、連母音同化現象、に関する調査があります。岡山県下と兵庫県但馬地方に関しては、とくに詳しい調査をしました。

この間の旅の思い出を一つ書きそえますと、こんなことがあります。当時は、どこの県へ行ってもですが、女生徒さんの寄宿舎へは男子禁制で、校長先生は、新聞記者といえどもはいらさないと、よく言われたものです。そういう時代に、そういう場所へ入れてもらえたことは、まったく、研究のゆえのしあわせだったと思います。島根県の浜田市の女子師範学校でのことでした。寄宿舎の消灯は、どことも九時半が定めだったと思いますが、浜田では、隠岐の島前・島後の出身者たちに、再度、ものを聞くことにもなったりしたので、舎監の先生が、とくに便

宜をはかってくださって、生徒の諸君に、寝ないで待っていてもらってくださいました。十一時も過ぎて、丹前をかぶったりしながら、二、三の生徒さんが、調査の部屋にはいつてきてくれたことなども、今、思い出します。

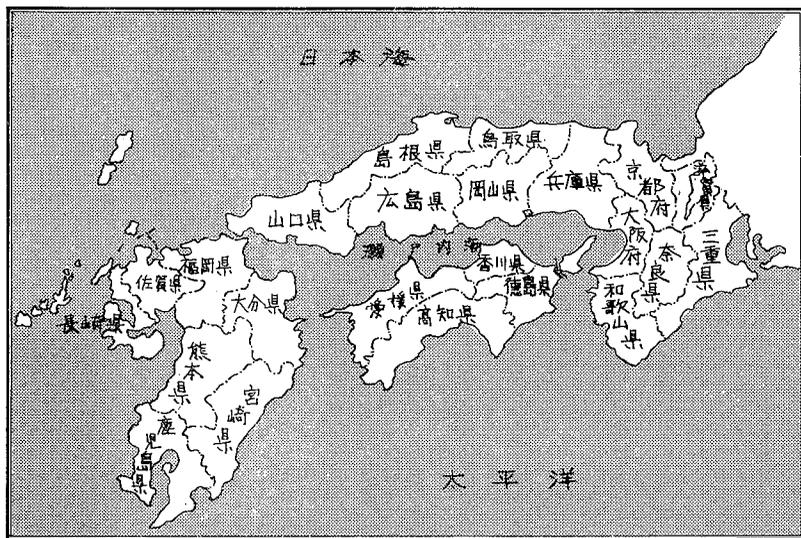
「西日本」の見かたへ

昭和十一年、私は、九州の福岡、大分、宮崎の三県に、それぞれの女子師範学校をたずねて、また、その寄宿舎の全生徒さんにつき、語アクセントの調査をします。(のち、昭和十四年、鹿児島県の女子師範生徒についての調査をしました。)九州についての、それだけの作業をおえると、同じ年、近畿地方の全県にわたって、そこそこの女子師範学校をたずね、寄宿舎の全生徒さんについて、同様の語アクセント調査を実施しました。(さきの、西近畿の調査の時は、語アクセントは、兵庫県下についてだけ調べたのでした。)語アクセント調査が、いわば近畿以西の広い範囲でしあがると、私の胸には、アクセントの見地からではありませんけれども、西日本という見かた、考えかたが、くつきりと浮かんたのであります。近畿・中国・四国を合わせて関西と呼ぶならば、関西諸方言というような観念もはつきりとしてき、これと九州諸方言とのかかわりあいも、だんだん見えてきたのであります。

語アクセント調査を主としての、九州三県の調査のさいに、私はまた、簡単な語法調査も試みました。これは、大判紙一枚に、多数の質問項目を刷りこんだ、一種の問い聞き調査です。敬語法関係の項目を中心としました。中国、四国については、そのような項目に関する、だいたいの見とおしができていましたので、この一枚刷りの刷り物による調査は省き、一方、近畿の全県下に関しては、この調査を実施しました。こうすることによって、私は、近畿以西(西日本)につき、語法の大筋のところを概観することができました。いわゆる西日本地域に関して、語い(語彙)関係の調査をすることはできませんでしたが、旅行の経験が、かなりの助けとなって、語彙方面のことも、やや見とおしがつきました。

九州の西がわは、私にとって未開拓のままでしたけれども、以上で、まず、わが国の関西以西の地域、いわゆる西日本地方をおさえたこちらになりました。考えてみますと、私の研究対象がここまでひろがってきたのは、まったくしぜんの勢いでした。もとはと言えば、瀬戸内海の芸予叢峰の中の一島、大三島について、その、中国系の方言であることを体験したのが、（四国本土側から見えた先生によって体験させられたのが）、事の始まりですが、それがもつともしぜんの動機となって、観察が拡大することになります。自分の故郷の島の生活語を反省すればするほど、観察が、しぜんに、南北の中、四国、その他へとひろがったのでした。

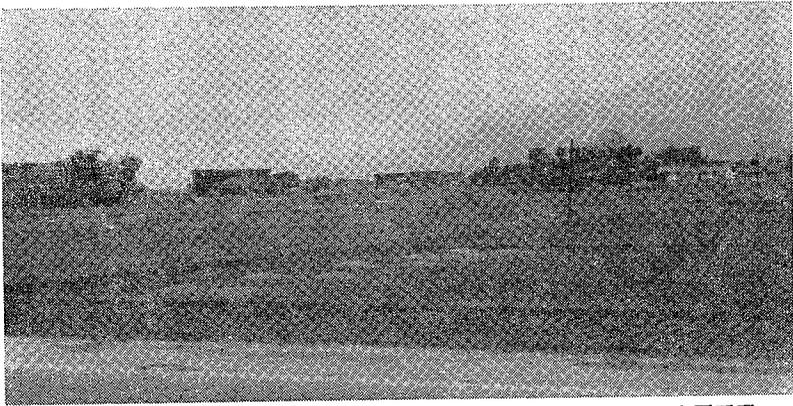
四国は、なにかと、近畿に似かよったものを見せています。ですから、中国と四国とを比べる時は、しぜんに、中国と四国・近畿とを比べることもなりました。九州の東北部は、中国地方とのつながりのよさを見せております。ですから、四国がわと中国とを比べようとすれば、しぜんに、中国



プラス九州と、比べることもなりました。このようにして盛りあがった関西以西を、まとめながめるながめかた、いわば、西日本の見かたは、あと一歩で、全国的な見かたへと高まつていきます。どういう一歩でしようか。

アクセントで言いますと、中国地方のアクセントは、但馬、丹後半島地方のようすをふくんで、じつに、近畿より東の、中部地方以東のアクセント状態と、よくつながりあいます。したがって、中国プラス九州、対、四国プラス近畿の見かたは、すぐに、四国・近畿、対、中国プラス九州プラス中部以東の見かたにひろがっていきます。こうなつて、私の観察の眼は、しぜんに、日本語方言の全国状態に向けられることになりました。昭和十四年一月、いよいよ本格的に、全国状態を対象とした、方言敬語法観点の特定調査が始められることとなります。

# 全国深部調査にかかると



出雲平野

全国について深部調査と言うことは、せん越（僭越）なのですが、敬語法観点の調査ですから、観点は、ぎりぎりの観点なのです。その限りに於いて、深部調査ということが言えると考えます。

## ○ 全国調査への志のめばえ

思いかえしてみますと、昭和四年に東條先生を広島にお迎えして、その年の秋くらいには、じつは、全国調査へのかすかな念願とでもいうものが、めばえたようです。実際に全国調査を始めたのは、昭和十四年からですけど、今は、はじめに、そのめばえのことを述べてみたいと思います。

昭和四年、秋のころの、国語学の教室であったと思います。東條先生は、色刷りの一枚ものの地図を黒板にピンでとめられて、方言の区画を説明されます。見れば、図は、日本の諸方言の区画を示した図でした。私は、これをしげしげとながめているうちに、ふしぎなことを思い出したのです。『おお、そうだ。これは、松山の師範学校の四年生のとき、石黒魯平という先生が、講堂で、一席のお話しをなさった、その時の地図と同じだ。』と、こういうことだったのです。そう気づきますと、当時の石黒先生のお話しもまた、思いおこされたのです。石黒先生は、『この図

は、だれさんという、自分の友人が作った図だ。だれさんは方言を熱心に研究している人だ。”というようなお話しをなさったと思います。なお、その石黒先生の講演のあとで、国漢の先生が、私どもから、「お日さまは何と申すか。」「三日月は何と申すか。」という調子で、方言の単語を聞きとられ、帳面に書きつけられたのを思いおこします。これも、きつと、東條先生の『方言採集手帖』に書きこまれたものと思われます。その先生は、”こうして、これを石黒先生にあげると、喜ぶから。”というようなことを言われました。

今や、高等師範の生徒として、当の東條先生から、その『大日本方言地図』に関するお話しをお聞きしているうちに、なぜか、むしろ、自分も、やがては、全国を歩いてみたいなあ。”と思うようになりました。ところで先生は、その時間に、こんなことをおっしゃったのです。

”自分は、人が方言の研究にはいることを、勧めたくはないのだ。”  
私は、たちまち困ってしまいました。先生のお話しはつづきます。

静岡高等学校で教えた学生に、望月誼三というのがあった。これが、東大にはいつて、今、方言をやると言っている。自分は、よっぽど止めたのだけれども、なかなか決心がたくくて、今、八丈島の方言を調べている。”  
こういうお話しでした。この望月さんについての、東條先生のお話しは、私にいろんなことを考えさせました。が、けつきよくは、その望月さんの弟分になりたいものだ。”と、私は、東條先生のおことばには反して、志をおこしたのであります。

## ○ 西近畿・中国路の旅

昭和十年八月、夏の盛りのこと、丹後地方の踏査を手はじめに、陰陽をぬって、西近畿・中国路の旅をしました。文字どおりの全国調査にかかったのは、昭和十四年からですけど、十年の、この西近畿・中国路の旅は、私としては、特別の深部調査をめざしたもので、まさに、全国深部調査の第一発だったのです。特別な深部調査をめざしたという点で、これはもはや、全国深部調査の精神にかなったものでした。陰陽をぬって、当時としては、かなり苦勞をしたのですが、この調査の仕事によって、私はじゅうぶんに、踏査の力づよさというものを覚えることができました。

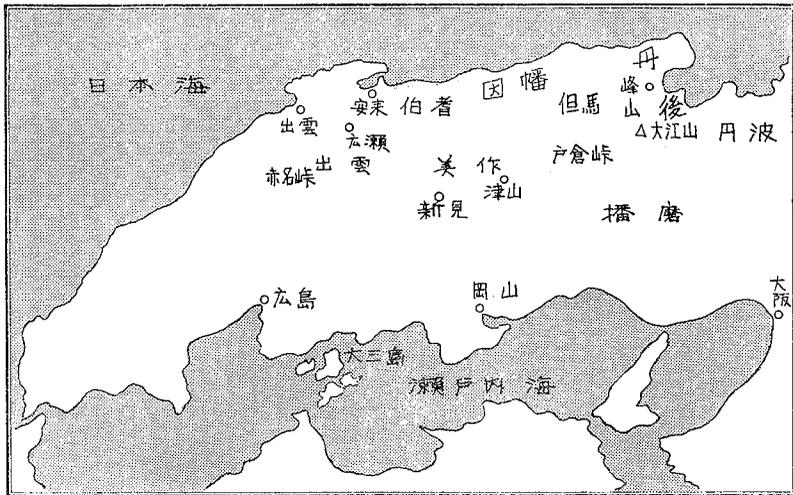
### 調査項目

このときの調査項目は、つぎのとおりです。（これももとになって、昭和十四年以降につかった、全国深部調査用の調査項目ができました。）

- 1 結婚式宴に招かれての、当家の主人に対するあいさつ。
- 2 座席を上かみへすすめることば。
- 3 たとえば、「山本ニ！」など、姓を呼ぶ敬語法。あるいは、それにかかわるもの。

- 4 「この手紙を読んでください。」
- 5 「誰もいなかったらう。」  
——これらに関する敬語法段階——
- 6 「あれを見よ。」「あれをもらなさい。」  
「あれを見ナイ（見ラレイ）（その他）。」「あれを見ナサイ（その他）。」
- 7 「来い。」の敬語法段階。
- 8 おまえ・きみ・あなた。
- 9 自称代名詞（単数、複数。謙称、誇称など。）
- 10 「暑いねえ。」「お暑うございますねえ。」  
「ナー」「ノー」の敬語法。
- 11 「そんなことはゆめにも知らなかった。」
- 12 「あなたはすしを食べなさるか。」
- 13 「それは何か。」「それは何ですか。」
- 14 「おおかた、ひよりだろう。」
- 15 「わからない」
- 16 「蹴らない」
- 17 「借りる」
- 18 「払って」

- 19 「案ずる」
- 20 「起きる」「受ける」
- 21 「私は菓子なんかきらいだ。」
- 22 「泣かないで早く行きなさい。」
- 23 「言ったところでだめだから、言わないのだよ。」
- 24 「だけれども、じょうず（上手）ではない。」
- 25 「そうか。」「そうですか。」
- 26 「いらぬ世話をやくな。」「へ卑罵法V
- 27 「○○さんを見はしなかったか。」
- 27' 「知らん。」
- 28 「どうしたんだい。」
- 29 「行きたければ行こうし、居たければ居ようし。」
- 30 「もちやらうどんやら、たくさんごちそうを出して。」
- 31 人や、のらねこなどを、しかりつける時のことば  
——その諸段階——
- 32 鼻濁音の有無
- 33 [ai]連母音の同化
- 34 一音節語の長呼現象



35 「だして・おとして」の発音

丹後地方の踏査

はじめに、丹後地方を歩きました。これは、主として、語アクセントの調査をねらったものです。

丹後、但馬は、中国地方のアクセントに同じるアクセントを保有しています。そこで、近畿地方でも、その西北部では、但馬・丹後の中国系のアクセントと、他の近畿系のアクセントとが、接触していると思われることになりましたが、その境は、いったい、どう引かれるものなのか、これが、私の丹後踏査の目的でした。前まえ、瀬戸内海から出発して、中国へ、四国へと、語アクセントの観察をひろげてきていましたので、その中国地方の研究のひろがるころ、しぜんに、この丹後地方へも、調査の手をのばしたというわけです。

この旅のふりだしは、京都の左京区でした。そこから、自転車で出発して、京都の二条駅からは汽車を利用し、丹後の峰山で下車して、以来、一週間ばかり、丹後調査をおこないました。

連日の雨の中、防水マントを着ているとはいえ、ずぶぬれにな

りながら、奥丹後を自転車車でへ巡ったことを——無暴にも近かった、その旅のことを、今、しきりに思い出すのです。下痢とかぜ熱に悩まされたりしながらも、むりに自転車を走らせたのでした。

こうして、大江山を中心とする、東西にわたる山梁の、アクセント境界線をさがしあてた時は、なんとも言えないうれしさでした。この一週間のさまざまな踏査経験は、今も、よく私に生きています。

### 文アクセントの調査

語アクセントの調査に熱中するうちに、文アクセント研究の必要を痛感しはじめました。このたびの、陰陽をぬつての深部調査では、右にかかげた調査項目のおの調査ごとに、なまの文アクセント（なまのことばについて出てくる、しぜんの文アクセント）を、できるだけくくめい（克明）に書きとめようとしたのであります。そういう点で、この西近畿・中国路の旅は、私にとって、文アクセント調査という仕事の、最初の旅にもなりました。この種の仕事も、その後、全国を視野としてひろげていくことになるわけです。

### 表現法の調査

右の三十五項目を立てたときは、これらの項目を載せた帳面の表紙に、「文章法」と書いたのでした。つまり、私には、この時、表現法の調査を主眼としたのです。（それと、文アクセントの調査とが、あいともないます。）単語調査から、センテンス本位の調査へと進んだのでした。表現法といえは、もはや、センテンス本位に考えられることです。あるいは、センテンスからセンテンスへの発展において見られるものでもありません。

表現法の調査というようなねらいが、はつきりすればするほど、この時の踏査への意気込みも高まったことです。生きたことばをとか、方言の生きた姿をとかいう文句が、この時、まさに自分のことばになっていたのです。

※ ※ ※ ※ ※

### 旅の思い出

おそろしかったのは、西播磨の奥から、戸倉峠（八九一m）という高い峠を越えて、鳥取県の因幡の国、若桜<sup>ワカサ</sup>に出た時のことです。私は、シャツズボンにげたばきというかっこうで、自転車を押しながら、この大きな峠を越えました。よくも遭難しなかったものだ、ふと思うことがあります。暑い日ざかりに、飲みものの用意ひとつなしで、自転車を押し押し、石ころの山道をげたばきでのぼったのですが、途中、疲れを覚えるよりも、むしろ、いつ、峠までたどりつけるだろうかという不安にかられたのでした。峠を越えて、くだりにかかった時も、乗ることのできない自転車を、押すというよりは引っぱりながら、ころげんばかりにしてくだって行きました。

やっとでたどりついたのが「落折<sup>おちおろ</sup>」という小さな部落です。ようやく人家が見えた時、どんなにほっとしたことでしょうか。その一軒の家に、おばあさんの姿が見えたので、たずねて行きました。ここで、幸いにも、ご飯のもらなしを受けることができました。麦ご飯に、おみそです。が、そのおいしかったこと！ 麦ご飯をたべて、こんなにまでおいしさを覚えたことは、前後にありません。ほんとに、涙が出るほどうれしかったことを、今も、忘れることができません。

食事のあとで、ここのおばあさんに、いろいろ土地のことばのことをお聞きしたのですが、調査のことは、今は、省くことにします。当時の私には、戸倉峠をはさんで、播磨と因幡とが、どのようにことばの違いを見せているか、

また、どの程度にことばの交渉を見せているか、そういうことが、魅力のある問題でした。

若桜から汽車に乗って、岡山県の津山にぬけます。ここから、作州を西に行つて、新見に出ます。新見から汽車を利用して、鳥取県の西部に出ました。

### 伯耆のおばさん

西伯耆の山地の町に泊まつて、おりしもめぐりあわせた盆おどりの雑踏にもまれた翌朝、私は、自転車を駆つて、米子をめぐりました。くだり道を、勢いよく行きます。川ぞいにくだりました。やがて、松並木の間を走ります。朝飯がまだであることが、急に気になりました。川はぼがだんだん広くなって、前方のながめがよくなります。そのへんで、道ばたに店屋が二軒、並んでいるのを見つけました。米子から七、八キロメートル手まえというところだったでしょうか。

私は、スイカをたくさん並べてあるほうの店へ、つとはいっていきました。見ると、そこに、おばあさんと言つてもよさそうな年かげんのおばさんが、ひとりの小学生らしい女の子をつれて腰かけています。おばさんの鼻からは、今しがたすったばかりのたばこの煙が、二すじ、よわく流れ出ています。

私を見かけたおばさんは、しばし、目をばちばちとさせていたかとおもうと、話しかけてきました。

「けっこうなことだのう。おまえさんはたっしやで。おら、おまえさんのような、元気なのを見ると、うらやましゅうて、うらやましゅうて。」

おばさんは、なぜか、しきりに、こんなことばをくりかえします。そして、私をしげしげと見つめるのでした。

おりしも、一台のがたがたバスが、けたたましい音を立てて通り過ぎました。おばさんはびっくりして、

「おら、しまった。あれに乗るんだったに。」

と言いながら、たばこ入れを急いでしまいました。もう追いつきません。

「おら、あんまり、おまえさんに見とれていたもんだけえ、自動車に乗り遅れてしまうただよ。おっさん。もういっぺん、マツチを貸しておくれ。」

ふたたびたばこを始めると、こんどは、あらためて、ぼつりぼつりと、私に語りました。

このおばさんには、私と同年配のむすこさんがあつたのだそうです。そのむすこさんは、とても親孝行なむすこさんだったらしく、ひとり身のさびしいおかあさんを、よく慰めて、なにごともまめまめしくつとめていたらしいのです。覚悟するところがあつてか、このむすこさんは、薬剤師を志して、断然、大阪に出て行きました。

ところが、きのどくなことに、そのむすこさんは、病にたおれたのだそうです。ことしの三月には帰省し、おかあさんをじゅうぶんに喜ばせもして、四月、また、角帽すがたで元氣にたつて行つたのだそうですが、不運なことに、流感にたおれ、このおかあさんのかけつける間もあらばこそ、とうとう逝つてしまつたのだそうです。ここまで話して、おばさんは、さめざめと泣きました。

「あれが、「カカーゴ」だったのに。」

と、おばさんは言います。このことばが、私にはわかりませんでした。なんども聞きかえしました。おばさんは、依然として「カカーゴ」と言います。私は、ああ、おくさんとお子さんがあつたのか。と思ひました。「カカーゴ」というのを、「カカー」と「コ」とに分けて受けとつたのです。

「ははあ、嫁さんと子どもさんですか。」

と応答しました。おばさんが、「いいや、そうではない。」「と、しきりに説明してくれるのを聞きますと、なんと、「カカーゴ」とは、「かかり子」のことだったのです。「かかり子」、まったくそのはずです。さきほどからの話からしても、嫁さんや子どもさんがいないことは明らかなのでした。私は、なんと失礼な誤解をしたことでしょうか。なんと、恥ずかしいことでもありました。ですが、方言研究の身としては、ここで、大切な収穫を得たわけです。この西伯者から出雲一帯にかけては、ラリルレロの音が、とかく聞こえにくいありさまです。たとえば、「ありません」というのも、「アーマシエン」となります。そういう、土地弁の特色を、私は、幸いにも——と申しては失礼ですが——、おばさんの「カカーゴ」という発音で、知らぬまに、とらえることができたわけです。

おばさんは、つえとも柱とも頼む、この「かかりむすこ」に先だたれて、なんの希望もなくなり、生きゆく先のまっ暗になったことを、嘆いたのでした。このいたわしいおばさんを慰めてあげることばのないのを、私は、どんなにもどかしく思ったことでしょうか。

おばさんは、自分の目の前に、むすこと同年配の、しかも、同じ大学生の人間を見て、いよいよつよく、「カカーゴ」への思いを深くしました。

「おまえさんは、ほんとにたつしやで、ええことだ。おらあ、おまえさんを見ると、死んだむすこのことが思われて思われて、……。」

おばさんは、やがて、また、「自分の家は、とても大きくて広いのだよ。それに、米も、たくさんあるから、来年の夏は、大山登りをかねて、ぜひ、うちへ勉強しに来るように。」「と、こんこんと言ってくれるのでした。

むこうの曲り道を、バスのくだって来るのが、小さく見えます。おばさんは、女の子をうながして、腰をあげまし

た。

「この子が、こんど、うちのあととりになったんどのう。こげな子どもだもの、どうなりやあ。先の遠いこつた。」

おばさんは、さびしく笑います。

私は、急いで、自転車の荷台につけたカバンのふたをあけ、前前夜、岡山県奥の津山の先で、友人のおとうさんからもらったバナナをとり出して、女の子に持たせました。そして、ポケットにあったグリコも。

バスが来ました。おばさんたちは、手を振って、バスに乗ります。私は、持っていた小さな写真機で、ふたりをぱちと写しました。

「おお、おお、わしらを写真にとってくれただのう。ありがとう。ありがとう。」

やがて、私も自転車に乗って、出雲にはいっていきました。

#### 安来やすきの町で「キ」の発音を

安来の町まで来ました。子どもたちから聞き覚えている、あの「安来節」のことにひかれて、足は、しぜんに、安来の町に向いたとでもいうことでしょうか。この町で、出雲弁のけいこをします。小学校をたずねたのです。用務員さん（当時は小使いさん）の部屋で、四十代のおばさんに会うことができました。この人が、旅の私にも、それとすぐに想像ができる、きれいな出雲弁の持ち主でした。

このおばさんにつきしたがって、私は、たった一つの発音、「キモノ」の「キ」をけいこしました。どういうつもりだったでしょうか。私なりの、当時の心がけで、この「キ」の発音の練習を選んだとみえます。よくまあ、一語一

音にだけしぼったものだと思うのです。出雲弁は、ことばつかいもむずかしければ、発音もむずかしくて、なかなか料理しきれない対象ですが、その出雲弁の中から、一つの「キ」の発音をとりだして、これを、いっしょけんめい習う気になったのですから、おもしろいことです。

どこの土地ことばを問題にしたばあいにも、いちどに多くのことを知ろうとすると、失敗します。(多くのものを、みな、とり逃がしてしまうことがあります。)中の一つを徹底的にとらえようとしますと、ついには、それが、とらえられて、やがては、それにつながる他のだいいなもの、二つ、三つと、とらえられてきます。出雲弁では、「キ」の発音などは、発音面の代表的なものでありましょう。出雲の国、西伯耆、このあたりでは、海岸のほうも山地のほうも、いったいに、「キ」の発音が特殊なであります。

さて、その「キ」ですが、「キ」<sup>[kçi]</sup>と発音します。まず、<sup>[k]</sup>子音にはじまり、すぐ、「ヒ」の発音のときの子音がやってき、複子音がおわると、「イ」の中舌母音がきます。出雲地方とともに、東北地方にも、この発音がよくおこなわれていて、東北では、それが、しばしば、「チ」に近くも発音されております。(「キンキョードーギ」を、「チンチュードーギ」と言うのなど。)私は、用務員のおばさんを先生にして、この「キ」の出雲発音を、くりかえし、まきかえし、けいこしました。おばさんに発音してもらっては、それを、私が進めるのです。あくまき修練とでも言いましょうか。ほんとに、なん十べん、なん百べん、これをけいこしました。おばさんは、よくもまあ、私の頼みを聞きいれて、あきもしないで、いくどとなく、「キ」の出雲模範発音をしてくれたものだ、今もつくづく思いかえずのです。こちらが、むきになって練習するので、おばさんも、ついほだされたともいうのでしようか。

通常、この「キ」<sup>[kçi]</sup>の二番めの子音が、<sup>[ç]</sup>と聞こえます。そのことをたよりにおばさんの発音をまねますと、たとえば「キモノ」は、「キシモノ」となります。あるいは、「クシモノ」となります。<sup>[ç]</sup>の感じが出るところは、それでいいのですけれども、「キシモノ」や「クシモノ」になったのでは、ほんものでありません。どうやって発音するのかわからなくて、ほとほと困りました。ふと気がついて、「汽車」を発音してもらいますと、これは、おばさんも、「キシヤ」と、まずわれわれのに似た発音をしてくれます。「キシヤ」がくせものだと気づきました。

二時間ぐらいいも教えてもらったでしょうか。しまいには、だいぶんじょうずになりました。ときに、「そうそう、それでいいんだ。」とほめられると、いい気になって、もう一度じょうずにとばかり、「キ」を発音します。こんどは、だめなのです。まことにとらえにくい「キ」<sup>[kçi]</sup>でした。しかし、「キ」の出雲音が、いかにもむずかしい発音で、しかもこれが、出雲弁の中に、どっしりとした地位をしめていることは、よくよくわかったのです。たった一つの発音の練習ではありましたが、この時、私は、大きなえものを得たような気がしました。念願の「安来節」のけいこなどは、もののかずではなくなって、おばさんにひとふし歌ってもらうことも、ど忘れのまま、ここをおいとましました。

めざす先は、奥の広瀬町です。

#### 広瀬町の夜

広瀬の町は、もと、尼子氏の城下だったそうです。自転車で、この町に着いたのは、およそ、ひともしごろでした。町にいいにおいがしていたような気がします。古めかしい町のように感じました。その夜、老人の男女の人たち

からは、ことに古めかしい語法のかずかずを、聞かせてもらうことができずには、もう一度、こへ来たいと、くりかえし思わせられました。

土地の人びとに、尚古的な意識がつよいのが、よくわかりました。古典的な町、と言つてよいように思われました。当然のこと、私は、じつにいい気分になったのです。その歌に、

思いがけない松江ができて

富田は野となり山となる

というのがありました。今も、盆おどりに、これを歌うそうです。とにかく、懐旧的な情調が、町中に、いめん（纏綿）として感じました。泊めてもらった宿屋の、はしの袋には、正徳二年開業とありました。

### 菊の葉のてんぷら

明けての朝、広瀬の町を発つて、さらに山奥にむかい、奥田原の峠を越えようとしています。十キロメートルばかりも自転車を押して歩いたでしょうか。まひるのかんかん照りののぼり道、途中で、一回、枝道にそれたりして、へいこうしました。

だんだん疲れて、日にあてられた感じになりました。目がまうかのようなこちにもなったのです。これといって、旅じたくのない私ですから、水筒から湯茶を飲むこともできません。水砂糖で、のどをうるおすことができたりしたら、最上だったのですが、それは、のちに人に教えられた知恵です。ただむてつぼうだった私は、ま夏の強い日に照りつけられて、今や、疲労の極に達したのです。そして、道ばたのせんだんの木の陰に、しばらく横たわって、目をつむったのです。あの時、人ひとり通らなかつたのですが、しぜんによく回復したものだあと、今、思うことで

す。

ひと休みして勇気が出ると、ふたたび自転車を押しながら、坂道をのぼって行きました。たどりついたのが、一軒の店屋です。峠までは、あと一キロメートルばかりというところだったでしょうか。

店のおばさんに頼んで、おひるを食べさせてもらいます。店さきでしばらく休ませてもらっているうちに、奥のほうから、いいにおいがして、揚げもののごちそうがでてきました。腰かけたまま、おひるごはんのもてなしを受けます。さて、その揚げものの中に、とりわけかおりの高いものがあって、しかも、それが、何の葉っぱかわかりません。尋ねてみますと、菊の葉を揚げたものとのことでした。菊の葉が食用になるとは、つゆ知りませんでした。色よし、風味よし、疲れきったからだには、なにか、精力をふるいおこしてくれる、特別の食べ物のように思われたのです。これをたべると、さっぱりとした気分になりました。今なら、これが、方言の旅の味だと言いたいところです。その味は、もてなしてくれる人の、あたたかい心の味わいでもありました。

#### 中国陰陽の旅

私は、近畿、中国の山地を、東から西へと、ことばを求めて、ことばを話す人びとの心をたずねて、旅行してきました。出雲路からは、やがて、赤名峠を越えて、広島県に出ます。

近畿、中国の山地は、ことばの山脈として見て、まことに見どころの多い山脈だと思えます。おおまとめにして言いますと、この山脈では、山陰ことばと山陽ことばとが、たがいにさしあっています。岡山県の奥地で申しますと、その伯耆寄りの村むらには、山陰伯耆弁と似たもの、同じものがあります。近畿、中国の山地それぞれの地域で、およそ、山陰ことばと山陽ことばとの、行きかい、さしあいが見られます。

広く文化一般について見ても、この、近畿、中国の山地帯は、一種特定の文化圏をなしていると言えそうです。方言の表現法を見ましても、この山地、せきりょう、（脊梁）地帯で、そこ、ここに、似たような表現法がとられているのであります。つきに、あいさつことばの一つの表現法を見てみましょう。

### 婚礼に招かれてのあいさつことば

今で言えば、結婚式ですが、昔なら、「婚礼」です。近畿、中国の山地で、人が婚礼に招かれた時に、その家の人びとへ、どのようなあいさつをしたでしょうか。これは、先にかかげた三十五の調査項目の、第一番めの調査項目です。

親類の人が、嫁どりをした家へヨバレて（招待されて）来ます。お祝いのあいさつを述べます。男の年寄りの人など、ずいぶんかしこまって、この日ばかりは、とくに威儀を正したりして、しかくばったあいさつをします。人は、この晴れの日のために、とっておきのあいさつことばを用意しているのででしょうか。

しかくばったあいさつをしても、その人は、けつして、ただの形式的な表現をしているのではありません。形式化したことばをつかっているようであっても、じつは、そのような発言することによって、本人は、特別のよい心もちをあらわしているのです。このさい、しかくばった、言いかたも、「よろこび」の気もちの、最大の緊張表現であります。ともかく、心をこめて、嫁どり祝いのあいさつをします。以下には、男の年寄りの人だけではなく、一般のおとなの人が言うあいさつのことばをとりあげてみます。（もつとも、今日の若い人たちは、もう、それについていってはいないのでしょうけれど。）

はじめに、京都府の丹波、その西北の端の、但馬近くの村の例を一つ出してみます。

○コンニチワ オヒガラニツキマシテ、オテマー モライウケナハツテ、ゴターネニ ヨンデ ヤロー オツシャ  
 ットクレナハツテ、オジギナシニ、ヨバレテ アガリマシタ。

「オヒガラニツキマシテ」と、まず、きょうのよき日を言いたてます。なかなか古風な言いかたです。そのつぎに、「オテマー モライウケナハツテ」と言っています。嫁さんむかえは、働き人をひとりむかえることだったのです。なんにしても、人間ひとりを、「テマ」と呼んでいるところには、昔の山村の嫁どりが、どんなことであつたかを、よく考えさせるものがあります。じじつ、労働力には違いありませんけれど、なんとか、ほかに考えようはなかつたものでしょうか。「オジギナシニ」とあります。「無遠慮に」ということでしょうか。そのことを、品よく言っています。「オテマ」というのも、品のよいことばではあつたのですが、その考えかたに、問題があるわけでしょう。

では、つぎの土地に進んで、鳥取県因幡の山奥のことば——（婚礼の日のあいさつことば）——をとりあげます。

○ゴメンナハンセー。コンニチワ ケツコーナ アンバデ ゴザンシテ。キキマスリヤー コナタニヤー ニギヤ  
 コー ナラレマスゾーナ。マタ ヨンデ ヤロ ユーテ ツカーサレテ、エンリヨナシニ ヨバレテ キマシタ  
 （サンジマシタ）。

このように言います。これは、昭和十年の八月十八日に、五十五歳の女の人から聞いたものですから、今日は、この土地でも、どうなつてゐることでしょうか。おそらく、こんなに言うことは、あまりないでしょう。このばあいに、やはり、「オテマー モライナサンシテ」とも言っています。山地すじの労働のきついところに、所は変わつても、やはり、同じような言いかたが、おこなわれてゐます。

どこのあいさつことばにしましても、結婚式の宴などという改まった場席へ出たのあいさつとなりますと、「オ日

ガラ」とか、「こんにちは、けっこうなあんばいで」とか言って、あいさつの出だしから、おりめ正しくやります。じつは、そこに、民間のだいな生活があったのだと思われれます。変に改まっているようではありませんが、じつは、そうすることに、生活の、なにか特定のよろこびを——ときにとつての生きる楽しみを、人は味わっていたのではないかと思われれます。虚礼廃止などということが、しばしば言われてきましたが、山村の、こういうあいさつ礼の生活などには、虚礼どころか、民間生活の、とっておきのたいせつな実礼が、あったと思われるのであります。

つぎに、鳥取県の因幡から岡山県の作州に来て、津山市の北の方の山村の例を引いてみます。

○コナタニヤール ヨメサン モラインサツテ、オメデトール ゴザンス。

ここでは、「オテマ」とは言っています。あいさつの本論で、「コナタニヤール」と言うのは、かしまった言いかたです。おそらく、へいぜいのつきあいでは、「コナタニヤール」などとは言わないでしょう。「コナタニヤール」。「コナタ」というのが、よいことばである上に、「こなたニワ」と、「ニワ」の言いかたをしています。「ニワ」とは、相手を見上げた、よい言いかたです。やはり、およろこび用の、とっておきとして、こういうことばが用意されているのかと思われれます。

つぎは、鳥取県西部山地の例です。

○コチニヤール ニギヤカニ ナイナハイマスゲデ、オメデトール ゴザエマス。カドノ オイニ、ヨール ヨンデツ  
カーサツテ、ヨバレテ キマシタ。

こんどは、「コチニヤール」とあります。「コチニワ」、これが、さきほどの「コナタニワ」にあたります。嫁さんの来ることを、「ニギヤカニ ナイナハイマスゲデ」と言っています。「カドノ オイニ」というのは、案内する先の

多いことで、けっきょく、「縁類が多いのに」ということになりましょう。「縁類の多いのに、よく呼んでくださいました。」と感謝しています。

出雲奥の例を見ましょう。

○コチラサンニワ　ゴシユーゲンデ　ゴザイマスソーデ、ゴケツコーナ　コトデ　ゴザイマス。ヨーコン　ヨンデ  
クダサイマシテ、ジギナシニ、マカリデマシテ　ゴザイマス。

これは、島根県飯石郡頼原というところの例で、このへんになりますと、あの独特の出雲弁が、もはやよわくなつてきます。備後奥のことばと似かよつてもきます。

では、おしまいに、広島県がわの、双三郡奥の例を一つ出してみましよう。

○コレニヤ　エー　テマガ　モラエマヒテ、オケツコーデス。ヨバレテ　マイリマシタ。

まえまえから論じてきた、だいたいなことがらが、このあいさつにも、いろいろに出ています。「コレニヤ」(これには)——このおうちには。よい言いかたです。「エー　テマガ　モラエ」たとあります。はるか東の方の、京都府丹波の山地でも、「オテマ」と言っていました。そこから、ずっと西にくだつて、この広島県山地に来て、やはり、嫁さんが、「テマ」と言われています。山地の、働く人たちにまつわる物語です。

## ○ 出雲今昔

出雲路の方言をたずねて、そちこちに旅行したことは、いくたびになることでしょうか。いくどたずねても、きりがありません。たずねればたずねるほど、だんだんに、出雲ことばの、奥深いところがわかってくるのです。

昭和四十五年の十月には、思いついて、夫婦づれで、出雲に出かけました。それというのも、出雲今市の駅前の紙屋旅館の夫婦さんを、私どもふたりで、たずねてみたかったからです。

三十四年ぶりのことでした。先に、私がひとり、その旅館にはいつていつて、おりしも出てきたおばあさんに声をかけようとすると、なんと、それが、昔の若嫁さんではありませんか。いや、むこうも、すぐになにかを感じたらしくて、おやっというたような顔をします。話しはすぐ通じました。その昔、私はひとりで出雲の旅をして、この紙屋旅館に泊めてもらったのです。夜中すぎること、腹痛に悩まされました。その時、親身にせわしてくれたのが、ここのご夫婦でした。（――残念なことに、ご主人は、京都に旅行してゐるのです。）

さあさあとすすめられるままに、私は、待たせていた家内を呼んできて、ふたりであげてもらいました。

「ワタシヤ イズモベン マルダシデ。」

おばあさんが、おもしろく謙そん（謙遜）します。この、文のアクセントが、まったく、出雲弁本来の文アクセント

です。おばあさんは、その昔、ひどいズー弁だったように思いますが、三十余年後の今日、どうやら、その「ズー弁」の発音が、よわくなっています。が、イントネーションは、いかにも、出雲弁の特色をよくあらわしています。そして、この特色が色こく出る時は、また、母音の、中舌母音も顔を出したのです。

発音の、例の「キ」ですが、これは明らかに、問題の[ki]でした。こればかりはすこしも動いていないようでした。ことばづかいでは、「そんな」を「ソゲナ」、「うだけれども」を、「うダドモ」、私を呼んで「オマエサン」、こういうのが、あいかわらずつかわれています。「オマエサン」というのは、出雲弁のよいことばです。それと同じく、尊敬のことばになる、「先生ノ 言ワレテモ……」というようのが出ました。「先生ガ」と言わないで、「先生ノ」と言っています。それが、尊敬の表現法なのです。出雲弁は、変ぼう（変貌）してきているようでも、肝心のところで、このようなことばづかいが、依然として温存されているのです。

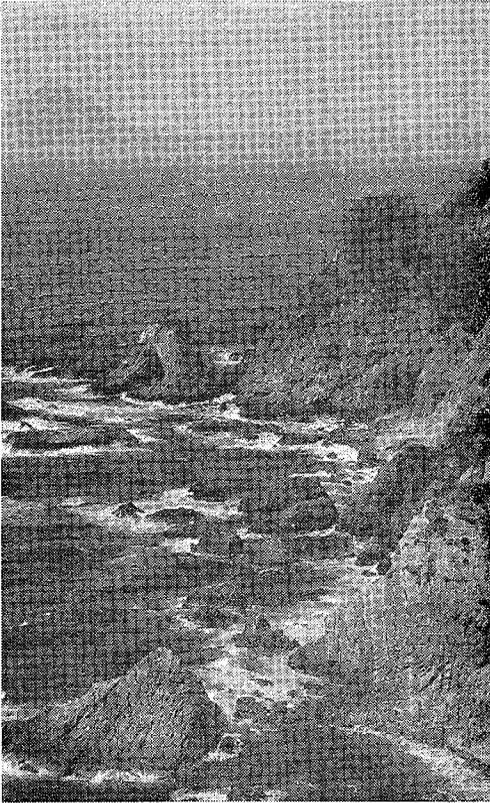
文末につける、訴えことばの「ネー」、これは、出雲弁では、「ネアー」となります。「ネアー」が、このおばあさんにもさかんでした。「ネアー」は、出雲地方の老若男女に、すこしも衰えることなしに、おこなわれているのではないのでしょうか。中学生でも、バスの中でなど、

“……言うた カイネアー。”

などと、相手に呼びかけています。

移りゆく出雲弁ではありますが、移って移らぬ要素もあります。しかし、それにもかかわらず、「出雲弁」という全体的なものは、日に日に、ゆれ動いていくようです。私は、紙屋旅館の老夫婦さんに、この先も、移りゆく出雲弁のすがたを、見つけつけていきたいと思うのです。

# 九州方言の深みへ



大隅半島・佐多岬より

## ○ 調査の仕事

先に述べた、陰陽をぬっての旅は、私に、調査の仕事の力づよさを教えてくれました。いよいよ、全国的な深部調査に邁進する気もちを固めることができました。昭和十四年一月、勇躍の思いで、南九州の旅に出かけました。携えていった調査要項は、のちに掲げるとおりのものです。

南九州への旅は、私にとっての、本格的な踏査旅行の手はじめとなりました。出て行く時、私は、これに成功するか否かが、ことのわかれめだというような気もちになったのを覚えています。

## ○ 表現法調査要項（私案）

このときから携えはじめた調査私案は、敬語法（待遇表現法） 中心の表現法を、的確にとらえようとしたものです。

私には、このころ、方言の見かたとして、これを、語い(語彙)の面から見るとか、音韻の面から見るとか、語法の面から見るとかの部門別の見かたをすることに、あきたりないものがありました。できることなら、これらの部門を総合した見地で、ものを見たいと思つたのです。じつさい、一つの単語をとらえても、それは、語い論の問題であつて、かつ、音韻上の問題でもあり、音声上の問題でもあり、また、文法上の問題ともなるものだからであります。単語を、文法の見かたのうえにのせて見、発音を、生きたことばのすがたと考えるようにすると、しぜん、文表現本位の見かたがつよまってきました。私は、このような見かたから、語い、音韻、文法などと言われる研究部門を、統合しようとしたのです。これは、けつきよく、「表現の法」を中心とする見かたになりました。以下にかかげようとする「表現法調査要項」は、ただに文法的な見地のものではなくて、方言の実質を端的にとらえるための、統合的な方法という意味のものでしたのです。

さて、その表現法というものも、方言の現実の中での個々の文表現を見ますのに、みな、なんらかの待遇表現になつていきます。つまり、人にものを言うためのことばになつていきます。そこで、表現法というものも、けつきよくは、人を待遇する表現法——待遇表現法——と考えられてきたのであります。

このようにして、私は、土地ことば、方言の、全体像を、待遇表現法中心の、表現法の体系と見たのであります。一つの土地の方言状態の調査は、そのの、待遇表現法中心の、表現法体系の記述となります。

一つの土地に行けば、調査者は、できるだけ早く、その自然の状態の中はいって、その日常自然の言語生活を、ありのままにとらえることに努めなくてはなりません。ともに生活しつつ、相手と一体となつて、過不及なく、ものを受け取ることが、調査の理想です。このためには、いわゆる表現法調査要項のとりあつかいを、真に流動的な

ものとしなくてはなりません。その流動自在の間に、表現法の真実をとらえるべく、生きた表現をさながらには、握（把握）しなくてはなりません。

調査者は、その土地をはじめてふむ、いわば、当方言無知のものですが、それにもかかわらず、できるだけ早く、右のような調査の実行に移らなくてはなりません。このためには、じゅうぶんな用意と調査の修練がいります。それは、望めばきりのないことですが、基本的には、つぎのようなことを考えるべきでしょう。すなわち、調査者は、厳密に自分の郷土語生活を反省して、郷土方言を、徹底的に文表現の形でとらえてみるのです。調査者が他の調査現地におもむけば、じつは、自分の郷土語と、その調査現地語との比較をすることになります。自己の郷土語から出発して、比較的現地方言をとらえる時、願うところの、文表現本位の調査も、要領を得てくるのであります。調査をすすめて、つぎつぎに、未知の地点を調査すればするほど、郷土語との比較は拡大していくという意味あいになってきます。そのような時、生きのよい表現法調査——（文表現を視点とした、方言の総合的把握）——ができると思うのであります。

つぎに、私の「表現法調査要項」をかかげます。

1 人の名の呼びかたとその返事

目上に 対等に 目下に

2 呼びかけ

目上に 対等に 目下に

3 人の家に行つてはいるときのあいさつとそれへの応答

- 4 普通程度のもの 上等のもの 特別上等のもの ぞんざいなもの  
よその家を辞去するときのあいさつとそれへの応答
- 5 普通程度のもの 上等のもの 特別上等のもの ぞんざいなもの  
さようなら。
- 6 普通程度のもの 上等のもの ぞんざいなもの  
ありがとう。
- 7 普通程度のもの 上等のもの ぞんざいなもの  
おはよう。
- 8 普通程度のもの 上等のもの ぞんざいなもの  
きようは寒いね。
- 9 普通程度のもの 上等のもの ぞんざいなもの  
そうですか。△理解する場合▽
- 10 普通程度のもの 上等のもの ぞんざいなもの  
先生が来た。
- 11 普通程度のもの 上等のもの ぞんざいなもの  
まあ、おあがりなさい。

- 12 いつもお世話になります。
- 普通程度のもの 上等のもの ぞんざいなもの
- 13 どうぞお願い申します。
- 普通程度のもの 上等のもの ぞんざいなもの
- 14 私は、今晚はどこへも行かない。
- 普通程度のもの 上等のもの ぞんざいなもの
- 15 これは私のです。
- 普通程度のもの 上等のもの ぞんざいなもの
- 16 こちらへ来い。
- 対等に 目上に 目下に 罵詈
- 17 あれを見よ。
- 対等に 目上に 目下に 罵詈
- 18 休まないで早く行け。
- 対等に 目上に 目下に 罵詈
- 19 しっかり強勉しろ。
- 対等に 目上に 目下に 罵詈
- 20 そんなにするな。起きるな。あけるな。

- 21 対等に 目上に 目下に 罵詈  
この手紙を読んでください。
- 22 対等に 目上に 目下に  
おかあさん、早くごはんを食べましょう。  
普通に 上等に 下等に
- 23 おまえはどこへ行くのか。  
対等に 目上に 目下に 罵詈
- 24 うちのおじいさん（おばあさん）に会いはしなかったか。  
対等に 目上に 目下に
- 25 どうしたんだ。  
対等に 目上に 目下に
- 26 うちへ来てくれるか。  
対等に 目上に 目下に
- 27 おとうさん（おかあさん）はどこへ行ったか。  
普通に 上等に 下等に
- 28 おまえは、すしを食うか。  
対等に 目上に 目下に

29 今晩は雪（雨）が降るだろう。今晩は雪（雨）が降るだろうか。

対等に 目上に 目下に

あるいは

普通に 上等に 下等に

30 そんなにたくさん着たら暑かろう。

対等に 目上に 目下に

31 もう熱は出はすまい。

普通に 上等に 下等に

32 これは、おまえがしたのだろう。私は、しはしない。

対等に 目上に 目下に （前者について）  
罵詈

33 だれもいなかっただろう。△推量の問い▽

対等に 目上に 目下に

以上で三十三項目になります。小体系です。しかし、一問が、三つの問いになったりしているので、けっきょくは、百問ほどの問いになります。問いと問いとの間に、しぜんに、他の問いも入れたりすれば、問いの項目の数は、百以上に増えることになります。

私は、右のような調査項目の体系が、土地ことばのありさま（言語生活の統一状態）を的確にとらえる方法になると考えたのです。右のおのおの項目は、とりあつかえば、しぜんに、土地ことばの深層へはいつていくことので

きる項目です。——対等の言いかた、目上への言いかた、目下への言いかた、罵詈の言いかたを区別して問うとか、普通程度の言いかた、上等の言いかた、特別上等の言いかた、下等の言いかたを区別して問うとか、上品な言いかた、中等品位の言いかた、下品な言いかたを区別して問うとかしていけば、しぜんに、私どもは、土地ことばの会話の現実の中へはいっていくことができます。

語い調査としたら、これだけの項目の調査では、不じゅうぶんでしょう。けれども、以上の三十三項目の調査によって——拡大結果で言えば、百余項目の調査によって——、私どもは、土地の日常生活の中に生きている、生活上の基本語彙とも言うべきものは、相当数に取り上げることができます。右の三十三項目を母体にして、ひきおこすことのできる諸問題などを、問いに発展させることにすれば、けっきょく、右の三十三項目本位の調査によって、相当数の生活単語をとらえることができます。生活語彙体系の、普通部分、または中心部分が、かなりとらえられるとも言えるのではないかと思えます。

その方言の、音相面ともなりますれば、右の調査項目を処理することによって、ほぼ、いかなく、その実相を明らかにすることができるように思われます。

かりに、右の三十三項目の体系を、特殊な小体系と言いましようか。その特殊なものが、じつによく、普遍相の中核をとらえしめるようです。

以上のことは、右の調査項目によってした全国諸要地の調査の結果を反省しながら申し述べました。ひとりの考えで、全国調査の三十三項目を立てた時は、不安がいっぱいでしたが、仕事の結果は、かなり安心しうるものになりました。この調査が前提的な経験となつて、のちに、私の、全国五十余地点についての、一地一週間滞在の重点調査が



部日向について、まず日向らしいところを見て、それから、しだいに、南日向、大隅と、薩隅色の濃いほうへはいつて行ったのがよからうと考えました。日向中部を、私は、薩隅行き第一の関門と見たのであります。こう考えて、昭和十四年一月二十五日、日向中部の、児湯郡上穂北村にたどり着きました。

私は、この第一関門でさて、つ（蹉跌）したら、薩隅方言の深みにはいることはできないであろうと緊張したのです。薩隅方言の深みにはいれないようなら、全国踏査の出ばなはくじかれてしまうことになります。上穂北村に降り立った私が、どんなに興奮したか、また、心配したか、ご想像いただきたいのであります。

日豊線を南下する時は、私は、しきりに、上穂北村よりも奥まで行くことを考えていました。ですが、日豊線から支線に乗りかえて、上穂北村の杉安駅に着くと、もう日暮れです。今晩は杉安泊まりと、私は、そこに宿を求めるところにしたのです。

杉安は、ひっそりとした村落でした。だんだん問い聞きしてみると、このごろは、奥のほうは発電所工事で、よその人が、いろいろにはいりこんでいるとのこと。そうだとすると、この杉安あたりが、かえって、調査にかつこうの土地ではないか、と判断するようになりました。駅の近くに宿をとります。おばさんに聞いてみました。〃奥のほうと、ことでは、ことばが違いますか。〃 おばさんの話しでは、一、二カ村奥も、これも、そんなにことばは違わないとのこと。いよいよ安心しました。自転車を借りて、小学校まで、二キロばかり走ります。

学校では、先生がたが、四、五人、居のこつていられました。私は、さっそくに、計画を話して、援助を請いました。先生たちは、この村で調査したのでよからうと言ってくださり、中の、池沢秀雄先生が、当地出身の先生ということで、その晩の私の世話をしてくださることになりました。三十三歳のかたです。夕食のおわったころおい、池沢

先生は、村の長谷川忠吉さん（六十六歳）をつれて、宿に来ていただきました。

宿に来てもらったりしたのは、考えのたりないことでした。が、ここは、いなか宿の、簡素な所ではあったし、さ  
 いわい、宿のおじさんも参加してくれたので、（ほかに泊まり客はなかったし）、その晩は、宿が、つごうよく、私  
 どもの方言座談会場になったのでした。これなら、一軒の民家に、ほどよく人びとが集まったのも同然です。池沢先  
 生が、しぜんのうちに、司会者になってくださいました。

私は、ここではじめて、右の「表現法調査要項」にもとづく調査作業を実施します。さてこれが、どういくものだ  
 ろうかと思いつつ、第一問です。人の名の呼びかたを聞きました。（——もつともしぜんな話しあいの調子で話題を  
 出したことはもちろんです。）先方の答えは、「中野サン。」「中野ドン。」などです。似よりの人たちが集まっている  
 ので、答えは、すぐに、じっさいの呼びかけ例になっていきます。そのへんで、長谷川じいさんの口もとを見ると、  
 、今晚は、なんでも答えてやるぞ。、といったかっこうです。宿のおじさんも、珍しい泊まり客が来たものといわ  
 んばかりで、興味を持ってくれます。私は、早くも、これは、だいじょうぶ、やれるぞ。、と感じました。土地こ  
 とばの世界の、しぜんのふんいきが、そこにできつつあることが、じゅうぶんに察知できたのであります。池沢先生  
 のとりもちかたも、かくべつによかったでしょう。私は、だんだんうれい気分になります。そこで、自身おおい  
 にくだけでもきます。

一座の人たちが、めいめいの興味で、相手を呼ぶ代名詞のことを話題にします。——人の名の呼びかたからの、し  
 ぜんの発展でした。「オミが……」という、対称代名詞「オミ」は、対等の言いかたのようです。そこで、私が、こ  
 れについて問いますと、話しはまた、発展して、佐土原では、「オミ」、「オメ」が、老人の普通語だというような

話題も出てきます。こうして、しぜんに、近隣他方のようすがわかつてくるのも、愉快なことです。それをすぐに信じることはできないとしても、聞けば、なんだか、目先が明るくなるような気がします。

「オミが」というようなのを聞かされると、なるほど、九州に来たな。という感じになります。こうして、九州のことばの地層が見えてくるのだな。と、一ひぎも、二ひぎものり出します。

つぎには、あいさつことばを聞きました。人の家に行つて、はいる時のあいさつを、と言いはじめると、みんなは、今しがた、それを実行してきたばかりですから、早くも、活発な答えをしてくれます。さながらに、実演してみせてくれました。ことばを聞かせるものではありませんけれども、人たちは、実感をこめて、からだ全体で実演してくれるのでした。まさに、そのあいさつことばを、目に見せてくれました。

○ゴメンナハレ。ゴザルカノ。

これに対する家の人の返事は、

○アイ。マー アガラツシヤリ。

○ヨリヤツシヤリ。

であります。「ゴメンナハレ。」に対して、

○ゴメンナサリ。

は、中等程度の言いかたであり、これへの返事は、

○ハイ。

であるとのことです。すると、「ハイ。」と「アイ。」とは違うわけでしょうか。なににしても、「ゴザルカ

ノ。」「アガラツシャリ。」などということは、これまでの私の経験からしますと、古色そう然（蒼然）たることばが、ここに、日常の地ことばとして出てくるのですから、驚きです。「オミ」などと言う所だけのことはあると、おもしろくてたまりませんでした。もったいないものを拾いあげたような気がしました。ほんとに、普通に、こんな言いかたをしているのですか。と問いたくなつたほどです。私のノートには、これらのことばの文アクセントが、じゅうぶんには記載できていません。聞いて、よつほどあわてたものでしょう。（初心であるため、記録が、まことに拙劣でした。）けれども、これらのことばを聞いた感激だけは、今も、胸に新たなものがあります。

○ヤドゲ オル カ。

○ヤドゲ トコ オル カ。

これらが、人の家を訪問してはいる時の、ぞんざいなあいさつことばであるとのことです。

帰る時は、

○マー オセワデ ゴザンシタ。

と言い、家の人は、

○マー ホンナラ ヤットジャロ ガノ。

と言つて送るということです。（「そろそろお帰り。」ということだと、説明してくれました。）「ヤットジャロガノ。」とは、おもしろい言いかたです。そして、これらは、このような極端な後あがりのアクセントに発音されたのであります。——南九州の、つよい後あがり傾向に通うものでしょう。

あいさつことばのあれこれを、調査のはじめの段階で聞く方法は、方言調査のはいりかたとして、たしかに有効な

方法だと思えます。寄り合いの席であれば、これが、かくべつよい話題となりましょう。あいさつことば関係の調査で、会談のはずみがつけば、あとの仕事は、なだらかに開けていきます。

この晩は、ともかく、調査要項の順序を追って、仕事を進めていきました。それで、無理をおかしたかななどとは思うことなしに、仕事をおえることができました。おたがい、興にのれば、問いの順序がどうであろうとも、調査は、しぜん、軌道を行くものようです。この夜の調査は、真正面から、三十三項目をとりあつかったのでもあったのですけれど、進行は、わるくなかったように思います。要は、時と人によることでしょう。雑談がさかえるようであれば、定められた、どんな順序も、生かされてきます。生きのよい順序となつてきます。

三時間あまりも過すと、お互いに、ひとわたり話し合ったという気分になりました。集まってきた人たちも、みんな、もう、しゃべるだけはしゃべったというような気もちのようでした。調査項目のすべてはおわっていたので、こころでうち切ることにしました。

### あとの整理

ひとりになると、さっそく整理を始めました。二段活用はどうであったか、「ヨカ」（いい）式の活用はどうであったかなどと、いろいろにまとめます。アクセントの特徴が、いかにもよくわかりました。「行くト？ 行かんト？」などの「ト」のおこなわれることも、さかんなものがありました。これからしばらく、この文末の「ト」に関心をつなぐこととなります。「なざる」を、「ナハル」と言います。これが、高い敬意をあらわすことばとして、よくおこなわれています。「あがらっしゃい。<sup>シヤリ</sup>」などという「シヤルことば」は、「ナハル」の次に位する言いかたとなつていて、品位が低いというわけです。おこなわれることも、比較的すくなくなっています。「おはよう。」のあい

さつを、「ハヨ サメタノ。」と言うとか、「ばあさんは、おいでかい。」を、「バーサンナ オリヤツ ドカイ。」と言うとか、すこしでも特殊性を帯びているものは、みな、南方に係累をたどるべきものでありました。

### 文の形

調査中、つよく心に入れこんでいたことは、ことばを、なんとしても、文の形でとりあげようということでした。そして、文のアクセントを聞きのがすまいとしたのです。要するに、文の生きたすがたをつかむことに、心を用いたのです。そのため、緊張もひどかったのか、ずいぶん疲れたようです。しかし、ひと仕事をしたという感じもつよかったです。

文の形でとりあげようとすることは、そのころまでの方言集のやりかたにはとどまらないようにしようということでもありました。方言集が伝える説明では、現実に生きてはたらいっていることばを理解することが、じゅうぶんにはできませんでした。私は、一つの方言集が出ている土地へも、やはり出むいて、自分で、生きているすがたを、ほんとうに見たい気もちになりました。そうなると、いきおい、文本位のとりあげかたを重視することになります。生きていることばをくわしく見つめようとすれば、文表現單位に、ものを見ることになってきます。

「文」の方言観が、「表現法」の見かたになります。こういう見かたで、新しい仕事、深い仕事をしたというのが、私の願いでした。

### 私のつとめ

こんど、この地で、ひたすらに、生きたことばを見よう、生きたことばを見てとらえようとして、——（ことばの生きたすがたをながめ、とらえようと努めに努めてみて）、私は、私のなすべき仕事があるということを、思い知る

ことができました。私にもなしうることがあったと知って、今後の調査の見こみも立ちました。調査のしかたと調査すべきことがらとが見とおされて、思いは、全国に、はせ向かいます。日向のこの地での調査をおえて、私は、試験に合格したような気もになりました。

全国深部調査の第一作業は、こうして、無事におわりました。携えてきた「表現法調査要項」が、さきの山陰・山陽をぬっての調査の時の調査項目の発展として、一定の意義を有することも、ほぼ確認されました。

## ○ 日向から大隅へ 二

### 青島の手まえ

杉安を発ちますと、南下して、青島を目の前に臨む折生迫おひやうせきという部落にきました。ここで、六十二歳のおばあさんにめぐりあって、例の「表現法調査要項」にもとづく調査をします。ここで、私がいちばん言いたいののは、浜べで出会ったこのおばあちゃんと、すぐに、遠慮なしの間からなれたことです。ことばは、たがいに、ぐんと違ったものを持つているのですが、心と心とは、早くも結びついたので。おばあさんの人からでもあったでしょう。この人は、じつにくだけた態度で、さばさばと、私に、何でも語りかけてくれました。「早く行け。」は、「チャツチャツト イカ  
ン ガー。」で、おばあさんはつづけて、「ヤケラルル ガー。」と言ってくれます。「ヤケラルル」は、「おこら

れる」の意です。「こちらへ来い。」というのは、「コンゲ キー」。これが普通の言いかたで、同等の間から用いられます。わるい言いかたとなりますと、「コンゲ ダサレツキ。」です。おばあさんが、力を入れて、「ダサレツ」と言った声は、今も、耳の底に残っています。おもしろかったのは、このおばあさんの文アクセントで、私は「無アクセント的単調」などと書きつけています。たとえば、こうです。「うちのおじいさんに、会いはしなかったか。」というのでも、「ウチノ オヂーサンニ アワザツタ カ。」です。これが普通の言いかたで、上の言いかたになると、「アヤ シナラザツタ カ。」です。「おまえは、うちのおばあさんに会わなかったか。」というのでも、「ウチノ オバサンニ ワガ アワザツタ カヨ。」と言うのです。聞いていて、まことに特色の顕著なものでした。一方では「うちへやって来い。」と怒って言うのに、「ウチ ダサレツキ。」というような言いかたをして、文アクセントのはなだしい高低を見せることもありませんが、概して、同じ高さをずっとつづけるのが、大きな特色のようです。

#### 今の「日南市」へ

当時は、飢肥町です。飢肥町では、十九歳の青年と出会って、この人から、いろいろなことばを聞くことができました。当時、青年学校の生徒さんで、私どもとは共通語で話すはずの人ですが、ひとたび方言でとなると、飢肥のいななことば、まる出しで、私はすっかり驚かされました。

第一には、文アクセントです。この人の文アクセントは、たとえば、「見てくれ。」というのだと、「ミチエ クリー。」となり、ていねいなことばづかいのほうは、「ミチエ クダハリン カー。」となります。「この手紙を見てくれないか。」というのだと、「コン テガミ ミチエ クデン カー。」となります。あがりさがりが顕著で

す。「おまえはどこへ行くのか。」ですと、「ワラドコニイクトカー。」となります。この青年の抑揚では、折生迫のおばあさんの抑揚の中の一傾向が、極端に、大はばに出てくるというありさまでした。けつきよく全体的には、双方での、文アクセントの相違が、顕著だと思えたのです。

この青年のことばで、忘れることのできないのは、「エンリョシンガル」です。この抑揚がまた、例の特徴を見せているものですが、そのためにと言っていていいでしょうか、私は、このことばづかいの意味をとりちがえてしまいました。「シンガル」とは、どういう意味なですかと、私は、なんとも聞きかえしたのです。むこうはとまどうばかりで、答えることができません。そのはずでした。この言いかたは、「遠慮心がある。」ということで、「シンガル」などということばではなかったのです。抑揚でとまどわれた例を、もう一つあげてみましょう。「これは私のです。」という言いかたをするのに、この青年は、「コラーオリガートヂヤサルガー。」と言いました。「トヂヤサルガー」の言いかたを聞いた私は、とまどうばかりでした。「自分のとである。」というような言いかたをしているのでしようが、「と」から高くなるから、まどわされてしまいます。この十九歳の青年が、また、「先生が来た。」というのを、「センセノキヤッタド。」と言ったのです。若い人ですが、尊敬すべき先生に関しては、「センセノ」と言ったのです。ああ、九州の南にきたなあ。と感じないではいられませんでした。

若い人からも、いろいろと多くの南九州的なものを聞きとることができました。こうして、私は、薩隅への思いを高まらせます。

## ○ 日向から大隅へ 三

### 大隅高山町へ

はじめており立った大隅の地は、高山町です。当時、水害の跡も、まだ、痛ましいありさまの高山町でした。日ぐれの道を、教えられた宿に向かいます。三、四人の子どもが遊んでいましたので、近よって、

「この辺に、学校の先生がいらっしゃいますか。」  
と尋ねてみました。

「いる。」

という返事です。

「なんという先生ですか。」

と問いますと、

「ウエンソン……。」

と、男の子が答えてくれます。この姓の発音が、もはや、私には驚きの大隅弁でした。「上園」という姓が、「ウエンソン」と発音されたのを聞いただけでも、もはや上気してしまったのですから、あとは推して知るべしです。い

よいよ方言の異域に來たなど、自分に言い聞かせました。

その夜、宿で、隣室の人ごえを聞いて、ともかく、私は、一文句も理解することができませんでした。かつてな思いつきですけれど、<sup>、</sup>外国語か何かを話しているみたいだな。<sup>、</sup>と思わずにはいられなかったのです。

#### ウエンソン先生のところへ

翌日、ウエンソン先生にお目にかかることになりました。(私には、子どもさんたちのことばをたよりに、ウエンソン先生をたずねることしか、調査の方法が、思いつけなかったのです。誰に何を相談しようにも、人びとの、土地ことばの山が高すぎて、私は、どこへも近よりがたかったのです。)先生のおうちを訪ねると、さすがに、先生は、学校先生でいられますから、土地ことばを、共通語でわかりやすく説明してくださいました。一つ一つ、教えられつつ、私は、大隅弁の調査をすすめることができたのでした。

先生は、私の目的を理解してくださると、質問に答えるのにも、現場さながらの抑揚で発言してください、また、それをいろいろに言いかえたりもしてくださいるので、私は、しだいに、そこへとけこむことができ、いつとはなしに、土地弁のむきだしものを受けとることができたのでした。それにしても、教えられることば、一ことばが、みんな、私にとって、はじめての経験のもので、文字どおり、驚きのまゝでした。

「ありがとうございました。」というのでも、「アイガト モシヤゲモシタ。」です。「モシヤゲモシ」という言いかたに驚かざるをえません。「さようなら。」というのでも、「マタ ゴアンソ。」などとなります。「メニツ ゴアンソ。」などというのがあります。「明日、また会いましょう。」ということだそうです。まったく、うまれはじめて聞くことばです。「おはよう。」というのを、「ワダツ ゴアシタ。」と言います。「まだでございまし

た。」ということだそうです。そう言われれば、これが、「おはよう。」のあいさつことばであって当然と思われま  
 す。私には、ワダツ ゴアシタ。と、「ダ」のところを、促音に発音することが困難でした。このへんから、こ  
 ちらのことばの発音に慣れていかななくてはならないのだなと思いました。「きようは寒いね。」というのでも、「キ  
 ユワ サミ コツ ネ。」などと言いますが、この時も、「寒いこと」の「ユツ」が、当地風のむずかしい発音で  
 す。つきには、「ノ」と「ガ」の違いですが、「センセノ キヤッタ。」が、ていねいな言いかたで、「センセガ  
 キヤッタ。」が、ていねいではない言いかたです。ウエンソン先生が、このように区別して説明してくださるのです  
 から、ことは、じつさいにそうなっているでしょう。古いことばづかいの国に来たなど、しみじみ思わせられた  
 ことです。ていねいなことばづかいが多くて、いわゆる敬語法は充足しており、たとえば、「まあ、お上がりなさ  
 い。」というのでも、「マー イットツドマ オアガイヤッタモンセ。」と言います。こんなていねいな言いかたがあ  
 りえたのかと、驚嘆するばかりです。「いつもお世話になります。」というのだと、「イツモ オセワサエ ナイヤゲモ  
 ス。」です。「お世話になります」が、「……ナイヤゲモス」(なり上げ申す)ですから、まことにていねいな言い  
 かたをしたものです。「こちらへ来い。」というときに、もつとも丁寧な言いかたをすれば、「コツチエ オサイヂ  
 ヤッタモス。」となります。「おいでください。」などと言うのに比べて、なんと手のこんだ言いかたであること  
 でしょう。「あなたはどこへいらっしゃいますか。」は、「オマンサー ドキ オヂヤスカ。」と言ひ、また、「オ  
 マンサー ドキ オサイヂヤスカ。」と言ふとのことです。あとのほうの言いかたが、最上の言いかたになるそう  
 です。聞けば聞くほど、ていねいな言いかたが出てくるありさまで、私は、たちまち、敬語法の宝庫の中をひきまわ  
 されるような心もちになりました。このような言いかたが、土地の日常のことばづかいなのですから、まったく驚く

ほかはありません。

#### 方言の宝庫

大隅、薩摩の地方は、右にとりあげたようなことばの花の咲く、独特の方言の世界であります。国語の歴史を思い見る点からすれば、薩隅の地方は、まさに、国語の方言の宝庫と言うことができます。東條先生は、すでに、私のために、「大三島は方言の宝庫だ。」とおっしゃってくださいだったのですけれど、私は、ことあらためて、九州の南部地方を、日本語の宝庫とも言わなくてはなりません。じっさい、そうなのです。ひと足、踏みこめば、そこにもここにも、貴重なことばが、あたかも路傍の石ころのように、ごろごろところがっているのですから。ころがっていると失礼な言いかたです。金銀などの鉱脈のたとえで言うならば、金銀そのものが、そこにすがたを見せているのです。

近世初頭や室町末期のことばの世界を、目に見うるようなこちをおこさせる、この南九州の方言世界は、こののち、私をつよくひきつけます。私は、いくどもいくども、薩隅への調査の旅をしてきました。この薩隅方言の深みに分け入ることは、すなわち、日本の方言の深みに分け入ることであり、また、国語の歴史の現実に深みに分け入ることだったのです。

右の高山調査のあと、すこし大隅を歩いて、薩摩にはいり、その二、三地を調査して、広島に帰りました。

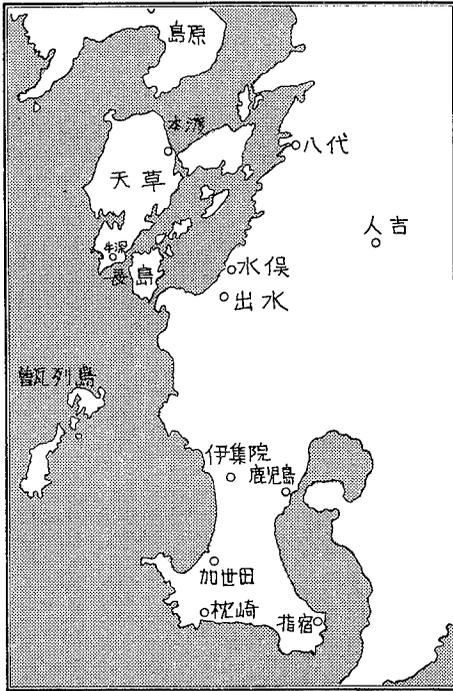
## ○ 天草から薩摩へ

### 天草

昭和二十三年五月末、天草<sup>ほんど</sup>本渡の港に着きますと、はとばに五、六台の馬車が並んでいます。つれとふたりで、うれしい気もちになって、それに乗ります。見ると、天草の山々が、じつにきれいでした。瀬戸内海の島の山の色とは違います。山のたたずまいにも、天草らしいものが感じられます。

こよいの宿は、佐伊津村ときめました。ここは、天草下島の北東にあたり、本渡の町からは、四キロメートルばかり北です。天草の島は、北は肥前から、東は肥後本土から、ことばの影響を受け、一方で、南方の薩摩に通うものを見せています。本渡は、天草弁の代表地で、佐伊津は、アクセントが変わっていると人びとが言います。

佐伊津へ行くまでに、本渡の人から、天草のことばのようすをいろいろに聞きました。天草では、「あの人が行った。」ということや、「……行きナシた。」と言うそうです。「行きナシた」が、いちばんよい言いかたで、つぎは、「行かシた」、そのつぎが、「行かいた」、「行かッた」の言いかただそうです。「行かいた」が、ここに見られるのは、薩摩のそれとのつづきを思わせる事実として注目されます。肥後の南部の人吉では、「行かいた」は、目下への軽侮のことばだそうです。肥後南部は、薩摩につながる傾向をよく示します。人吉にも、「行かいた」があるの



は、偶然ではないでしょう。天草の「行かいた」も、〃かたちだけの敬語で、敬意は失っている。目下のものにも、ふざけて軽く敬語をつかってみたい時に、「行かいた」などと言う。〃とのことでした。そろそろ天草の深みにはいりかけました。

この地では、命令に、「ドギヤー セロ。」、「コギヤー セロ。」と言います。「ロ」をつけるばあいと、「見レ」とか、「起きレ」とか言うばあいが、問題になります。

「……だけれども」の意味の「バツテン」は、ここでは、「休まんバツテ、早く行け。」（休まないで、……。）というようにもつかわれています。肥前や筑後、肥後で、だいたい逆接の言いかたに用いられているものが、ここで

は、こんな用法にもなっています。「くしないで、……」は、「センバツテ」であります。さて、その「しないで」、「せず」を、「セデニヤー」とも言います。「セデン」とも言います。「……デニヤー」は、何かの複合形でありましょう。どういふものが、どんなに複合するかは、まったく、予測を許しません。思いのほかのこと、ちよつと見たのは、ちぐはぐと思われるようなことでも、方言の世界では、よく起こっています。薩摩に行くと、もう、「バツテン」ことばは、行なわれませんが、そ

のかわり、逆接に、「ドンカラ」、「ドンカイ」を言います。「ドン」は、「ども」だとすると、右は、逆接の「ども」に、順接の「カラ」がついたこととなります。変わったことですが、じつは、このような、複合の自由なところに、かえてよく、日本語のはたらきというもの、あるいは、ことばのじっさいのつかわれかたというものが見られます。

九州弁の特徴である「バイ」と「タイ」とは、ここ天草ではどうであろうかと、たしかめてみました。この二つの文末ことばをつかう気もちは、どこでも、せんぎくに困難なことです。二つを、さほどはつきりとは区別しないてつかっていることも多いからです。追求していると、しだいに、いろいろな答えが出てきます。それらについて、用語法なり、使用感情なりを見てみると、「バイ」、「タイ」の実質が、しだいにわかってくるように思われます。

対話の文末の結びことばの「バイ」「タイ」について、やはり結びことばの「ノーマイ」というのがあります。

○行クト | カ | ノーマイ。

行くのかね。

などと言います。「ノーマイ」は、「のう、おまえ」でありましょう。肥前あたりに著しいものが、こうして、天草にも見られます。この「ノーマイ」を、目下につかうそうです。肥前では、「ノーマイ」「ノマイ」は、「のう、あな」の「ノンタ」に対立するものですが、そうした用語が、こちらにもあるのでしょうか。天草の西海岸には、「オマエ」を敬語とするところがあるそうです。

佐伊津村

午後五時を過ぎると、とうとう本ぶりの雨になりました。佐伊津行きバスの停留所に行くと、もう満員になった

というので、切符を売る窓口は締め切られています。困りました。すると、馬車の便を教えてくださいたい人がありました。その待ちあわせ場所に行きます。途中で道を聞くと、「佐伊津へ 馬車カラ おいでるなら。」と初老の男の人が教えてくれます。「馬車で行く。」「馬車カラ行く。」「船で行く。」「船カラ行く。」「カラ」のつかいたには、こうして、ほうぼうに、変わったものが見られます。

佐伊津へ着くと、日の暮れだというのに、雨の中を、さつまいもの苗を植える人びとが、小ばしりしています。道みち、それらの人びとに寄りそうては、その人たちのアクセント、上げ下げのはなはだしいアクセントに耳を傾けます。

この夜は、竹田さんのうちにやっかいになりました。そこのおじいさんが、  
 「タンゼンガケ ゴブレーシター。」（たんぜんがけで、ご無礼して。）  
 と出てきます。おばあさんは、

「ヨカ ウルイダツタ ナ。」（いいうるおいだったね。）

と嫁さんに言っています。つれの小泉くんは、熊本市の人です。私に協力してくれて、この場の話題の展開につとめてくれます。私は、一家の人びとを相手にした調査記録を始めました。おりしも停電となり、電灯が消えたひょうしに、人びとが、ローソクのそばに集まってきます。老夫婦に、当主人夫婦、その子どもさんたち三人、それに私どもふたりです。嫁さんが、おじいさんを中心に立てつつ、かいがいしく一座をとってもらって、話しの花を咲かせることにつとめてくれます。おじいさんの耳はだいぶん遠くて、こちらの話しかけは通じにくいありさまで、小泉くんが、大きな声の熊本弁で、ここの地ことばに調子を合わせながら、話題を持ちかけると、おじいさんは、黙ったま

ま笑います。小学生の女の子が、もどかしがって、おじいさんの耳もとに口をもつていきながら、大声で話しかけます。ところで、おばあさんがものを言うとき、これはさほど大きい声ではないのに、すぐにおじいさんに通じるのです。そのたびに、嫁さんが笑います。主人の竹田さんは、「まあ、今、みんなが話しているようなものですよ、このことは。」と言ってくれます。

佐伊津のことばの文アクセントに注意しましたが、だいたい、おわりをあげる傾向が特色のようです。

○ヨカツパ ナー↓

よいのです。

このように、おわりがあがります。

○チャルセナ。

であるから。

というのは、「ル」で高音になるのが特徴です。こういうのを聞いてみると、俗な言いかたをすれば、いかにも異様なアクセントという感じがします。

翌日のこと、午前の十時ごろまでに本渡までもどらなくてはなりません。ここのバスの時間までに、聞きあるき調査の能率をあげようと、そのへんのうちをたずねてまわります。むこうから、ひとりのおじさんが来るではありませんか。「すみませんが、……。」と、この人に話しかけます。この人は、ここのはえぬきでした。おじいさんのことばに、

「ホケ| オランチャ コツチ| コライ。」

(そこにいないで、こっちへおいで。)

というのが出てきます。これは、年よりの普通のことばだとのことでした。おじさんのうちで、おばさんが、お茶を出してくれます。

「オチャドモ ノミナツセー。」

と言ってくれます。おもしろいことを調べる男が来たものだというような顔をしていたおばさんも、やがて、うちくつろいで、話しかけてくれます。ここで、ひとつの方言気分がもりあがります。お茶がさめたといつて、おばさんが入れかえてくれた湯のみを、私は、感謝して持ちあげながら、また下に置いて、方言会話の記録につとめます。話すことと、お茶を飲むことは両立しません。口は一つです。

ようやく、雨も小やみになりました。〃それでは、ほんとうにありがとうございます。これで、ひとまず。……：〃などと言いつつ、欲な私は、「おじゃましてすみませんでした。」というのは、どんなに言うんでしょうかなどと、またしても尋ねてしまいます。最後まで失礼なことです。思わず知らずこうなるのですから、生きた方言をとらえようとする調査は、われながらにくいことです。さて、右の問いへの答えは、

○エライ ジャメ ナッタ ナー。

○エライ ジャメ ナツテ スマンチャッタ ナー。

でした。私は、えんびつを走らせながらのおいとまごいです。先方は、右の返事は、「ナーンノ アンター。」だと、また教えてくれます。こう言われると、また、カードを出して書きつけないではいられません。先方の人たちが笑います。じゃあ、これでいよいよと言ってお別れます。すこし行って、すぐ思い出しました。

## ○ソイヂヤバツテ。

そうだけれども。

というのを書きつけておかなくてはなりません。歩きながら書きつけて、バス停留所に走ります。

かなり疲れています。切符を買って、そのまま、その畳の間に横になりました。そこへ、

「ウデノ イトーシテ。」（腕が痛くて。）

と言いながら、ひとりの男青年が、切符を買いに来ました。切符を売る娘さんが、

「グワイノ ワルー アラッサン ナー。」（ぐあいのおわるいことですねえ。）

と言います。「アラッサン」？ 起きあがって、娘さんのほうを見ます。バスに乗るまで、手を休めることができませんでした。

## 天草高等学校

佐伊津のひと仕事をすませて、本渡のこの学校にもどりますと、きのうとはかわって、たしかに天草に来ているのだという気分になりました。

講堂にはいって、生徒諸君の前に立つと、みんなが、天草のことばの姿のように見えました。もはや、なんの気も感じませんでした。おたがいが天草ことばの仲間だ、というような気もちになることができました。

諸君への話しはじめに、佐伊津の旅情を述べました。——竹田さんのおうちで、ゆっくり、おふろをちょうだいしながら、とたん屋根にとんととあたる雨音を聞いて、たまたまなく天草気分をかきたてられたことを、申し述べました。

## 天草西岸の高浜村

ここへは行かなかったのですが、この村の出身の、大脇くん夫婦が、高浜から来ているふたりの高校生とともに、大脇くん夫婦の新居で、高浜弁を語ってくれました。

大脇くんの、この日まず痛感したことは、自分が、じつは、自分の郷土のことを知ってはいないということでした。大脇くんは、この新しい発見をたしかめるかのように、私の問いのいちいちに対して、慎重に答えてくれたのです。そしてまた、自分でも研究してみたいという希望を、そこそこで述べました。私は、こころみに、こういう君の方言への反省が、君の毎日の国語の教室に役だつだろうかと聞いてみました。すると言下に、大脇くんは、ためになると答えたのです。真実を求めるといふことは、すべてのことに、ためになるのです。大脇くんは、あすは牛深町へ今は牛深市Vの調査に同行したいと言います。

きのうの堀田さんが、また、ここへ見えませんでした。今夜は、堀田さんのお宅で、本渡中心の方言座談会が開かれました。そのうちあわせに、来てくれたのです。うちあわせがおわると、あとは、大脇くんの話題の中へはいってくれました。さて、西岸の高浜村のことですが、ここは、他地方からの影響が比較的すくない所ようです。ここに、いろいろ変わったもののあるのが、大脇くん中心に、とり出されます。母おやに、「早くごはんを食べよう。」と、さいそくする時には、どう言いますか。＼と聞くと、

○オカカ、ハヨ メシバ ポイ。

と言うと答えてくれます。「クオイ」（食おうよ）は、「ポイ」となっています。これは変わった形だとめずらしかつていて、だんだん類例が出されます。

○パシバ パン カイ。

これは、「菓子をくわんかい(食わないか)」。だそうです。「くえ」は「ペイ」、「歛」は「パー」、「杭」は「ピー」、「食う」は「プー(メシバ プー)」、「土瓶」は「チヨバ」だそうです。(「チヨカ」の言いかたもあるそうです) [k]子音と[P]子音とのおもしろい行きかいが、ここに見られます。これはいったいどういふことなのでしょう。奄美諸島以南のうちに、ハ行音の[P]があるのを思い出します。天草で、とくに西海岸に、右のような[P]音現象があるのは注目されます。

「もう熱は出ないだろう。」という推量の時は、

○モ ネーツアー デンド ワー。

と言います。「ワー」のつくのが特徴です。

「雪が降るだろうよ。」は、

○ユキン フッド ワイ。

です。この地に、「ワー」と「ワイ」とが、並びおこなわれています。「ワイ」とともに、「バイ」があつて、

○シュー ワイ。○シュー バイ。

などと言います。右の「ワイ」は、呼びかける時のもので、「バイ」は、人がしないで、自分だけがする時のもの、のだということです。「バイ」の用法に、右のような限定があるのは、「バイ」の語源が「わたし」であることを思わせて、興味がつきません。

堀田さんのお宅で（ほんど本渡のことば）

雨の中を、野みちをふんで、堀田さんの家に行きました。大きくすの木がおおいひろがつているおうちです。縁がわは、けやきの広い板で、木の目が白っほい美しさです。その端っこで、用意のえんぴつをとぎます。

今晚、来てくれるはずの人びとは、この日ぐれだのに、まだ、「カライモ」をさして（植えて）いて、帰ってきません。

そうこうするうちに、ふたりのお百姓が見えました。四十すぎの人と六十がらみの人で、ともに男の人です。五十そこそこの、堀田さんのおかあさんが、

「ホント ツカレトラシテ。」（ほんとに、疲れていらして。）

とあいさつしてくれます。あがつたふたりの人が、

「イッチョ ゴブレーショー カナー。」（ひとつご無礼しようかな。）

と言つて、ひぎをくみます。このようにくだけてくれると、もう、何でも話しかけやすくもなります。この人たちは、たちまち主役になって、土地の調子で語ってくれはじめました。

「マー コドモンサザ、ソギヤン シタ モンジャン。」（まあ、子どもの間は、そんなにしたもんだ。）

といったぐあいです。この人たちの説明によると、

○コツチャン ケー ノモイ。

こっちへ来いよ。

○ホンニ ノモイ。

ほんとにね。

○ソー カンモイ。

そうかね。

と、昔は言っていて、今は七十歳ぐらいの人が言うとのこと。

お夕飯もそこそこに来てくれたらしいこの人たちは、私ども以上に熱心かと思われるほどに、土地のことばについて話してくれました。こちらの仕事の意味をみこんでくれると、みんなは、気分について、話してくれるようです。

いつしか、堀田さんの老父君が司会者になっていて、話題を私とうちあわせては、しきりに、一座の会談をとり運んでくれます。今や私は、そつとひそまっています、ただいっしょうけんめいに、いちいちのことばを書きつけていけばよいのです。ころあいのところで、うち切ろうとしましたが、なかなか、なごりがつきませんでした。

夜ふけて、まっくらな道を宿に帰るころには、雨もあがっていました。

小泉くんとふたり、宿の部屋にねそべって、ほっと一息ついた時、私は、けさから下痢ぎみで、何もたべていなかったおなかの、快くくたくたになっているのに気がつきました。もうだいじょうぶ。あすはなんでもたべられる。と安心しました。

牛深町へ今は牛深市へ

牛深は、天草下島南端の漁港、天草調査の最後の目的地です。小泉くん、大脇くんといっしょに、朝の一番のバスに乗ります。

バスは、天草下島の山あいをぬって南下し、やがて、長平越えにさしかかります。青葉青葉の山みちをわけて、奥ふ

かくのぼって行きます。天草は、こんなに、山の美しい所なのでしようか。山の青さの中に、身も心もとけこんで、「天草」の名の、いかにもしっくりとしているのを感じます。

のぼりくだりをいくどもくりかえして行きます。今や、私どもは、天草の深みにこっぼりと埋もれたこちです。天草の地はだをなでていくような気分です。やがて、左に海づらが見えはじめると、ついその先は、もう牛深の町です。

町にはいると、いりこのにおいが、しきりに鼻をつきます。そこにもここにも、いりこが干してあります。バスをおりた私どもは、「このにおいの中で仕事をすれば、牛深のことばの調査は、まちがいなくうまくいきますね。」などと言いながら、町どおりを歩きます。はじめのめあては小学校です。そこには、大脇くんの旧友がいるはずだからです。途上、学校から帰ってくる子どもたちが、

「ヒルカラヤ ナカツチ カー。」（ひるからじゃなかったか。）

などと言って、通ります。私は、見つけた薬屋にはいって、腹薬そのほかを求めようと思いました。店の人が、

「ゴザツシエン バイ。」（ごさいませんわ。）

などと言います。小学校で、大脇くんの旧友という人に会うことができました。その人の考えで、茶わん屋さんを、最初の調査場所とします。とりあえず、ひる弁当をつかうことにしました。学校の前ちかくの店屋に案内されます。

「ちよつと、ここでお弁当をたべさせてください。」

「まあまあ、どうぞ、……。中学校で あンナスツ トカ。オアガンナサイマツシエ。オアガリクダツシエ。」

こんなよい機会はありません。あいさつは、つれの諸君にお願いして、私は、さっそくに記録にかかります。顔ではせいいつぱい感謝して、口でも断片的なお礼のことを述べながら、書く手はいっしょうけんめいです。ぐずぐずすればするほど、とり逃がしてはならない材料が、たまります。老主人が、

「オヒヨリガ ナオリマシタ ナー。」（いいあんばいに晴れましたね。）

とあいさつしています。離れていて、すなおな会話を写すのは、なんとも気もちのいいものです。やっと私も上にあがつたころ、こんどは、店さきから、帰る人を送る主人の声、

「コリヤ ゴブレデシタ。」

が聞こえてきます。

お茶が出ました。

「オチャドモ ノーデ。イリコバ タキヨリマスケン。」

いりこのおかずが煮しめられはじめたのでした。いりこのにのいの中で、調査が進みます。この家の人たちは、私どもが、何の用で来ているかは、ちっとも知らないのです。そんなことはどうでもよいことなのでしょう。家の人たちは、ただ、もてなすことばかりを、あたまいっぱいに考えているのです。おばさんは、

「ドージ オスツクダサイマツシユ。」（どうぞ、ごぶとんをお敷きくださいませ。）

と言って、また、すぐ、いりこを煮しめるくどに立ちます。私は、「理想調査だ。」と、小ごえで二君に語りかけて、喜びを押えかねるしまつなので、二君も書きつけを始めます。

「大脇くん、今、「オスツクダサイ」と言いましたね。」

「私のほうでも、「フトンバ スク」(ふとんをしく)って言いますよ。家内もそれを言いますので、「シク」だ、「シク」だと、いつもなおしているんですがね。」

やっぱり、中舌母音の[i]のこん跡(痕跡)があると見えます。

例の「すし」は?」

「私のお婆だけが、六十歳くらいですが、「スス」と言っています。」

薩摩の南部に中舌母音が聞かれ、奄美大島になると、それがことに著しいのですが、薩摩より北の、この天草南部あたりにも、このようであるのは、まことにおもしろいことです。注目すべき分布です。このたびの旅行で、薩摩の西部にはいるのに、天草からのはいりかたを企てたのは、まさに凶星とも言うべき、よいやりかたでした。薩摩から方言系統は、こちらへこう続いているはずだと考えてきたことが、あたっていたわけです。私には、中舌母音のこ一つを、このようにつかまえたことが、限りもない大きい収獲のように思われました。このような重要地点に来ると、短い時間のうちにも、重要なことが、つきつきにとらえられます。ふたりのつれに、自分の興奮を説明したい気持ちにかられながらも、また、高まる胸を押えて、——調査のまさ夢からさめないように、自分をいたわりながら、なおなおと、土地のことをむさぼり聞きます。

いりこのおかずの出たところへ、この家の飼いねこが一匹やって来ます。

「ネコガ アータ、マー。」(ねこが、あなた、まあ。)

とお婆さんが言って、ねこをしめ出してくれます。と同時に、われわれもしめ込まれたのでした。ここで、ひと思いに弁当をかたづけます。

「ユックリ シナハイマツシェー。」

の聲に送られて、ここを出ました。

町どおりにもどつて、いよいよ、一軒の茶わん屋さんをたずねました。ここが、牛深町のことばのほんとうのところをとらえるのに、かつこの場所なのだそうです。つまり、このうちが、牛深弁の代表的な家庭の一つ、というところのようです。みんなで、二階にあがらせてもらいました。若主人の長谷場さんは、広島にもいたことがあるそうです。双方に、急に親しみがわいて、話しがはずみました。長谷場さんは、すぐに、遠慮しない、土地ことばの話し手になりました。

長谷場さんは、われわれの目的をよく了解してくれて、会話の途中、もてし「牛深町でも、茂串部落、すくも須口部落、あまつげ天附部落のことばが、それぞれ変わっています。」と話してくれます。

「案内しましょうか。」

と言ってくれます。

これから、長谷場さんを移動司会者とした調査行が始まります。また、学校の前を通つて、入り海をかいまわり、三、四十分して、須口部落にはいります。ここは、牛深の町うちからは、かなり離れていて、海一つ向こうの小半島の最南端というところです。いりこが、そこら一面に干してあります。部落中は、いりこのおいでむせかえるようです。さらさらと白く光るいりこは、いかにも新鮮な感じでした。長谷場さんは、その家、この家の軒さきに首を出して、ものを言います。こちらは、書き取るのに余念がありません。長谷場さんは、須口ことばで話すのに努めてくれることになっています。「でも、完全にはやりきれませんよ。」とありました。

この部落は、三、四十戸でしょうか。その大部分が池田姓で、浜崎姓が二、三軒だそうです。長谷場さんにとっては、どこもみんな、懇意な家のようなです。そこそこで、いりこの景氣を聞くと、先方は、このごろ、茶わん商売はよからうと、逆に切りかえてきます。長谷場さんは、そこそこが、気らくな得意さきなので、話しの調子を合わせるのに、さほどほねはおらないようすです。いりこのことにもずいぶん明るいとおもったら、じつはそのはずで、奥さんのお里が、いりこの商売なのだそうです。

一軒の浜崎家に行きます。七十四、五歳を過ぎたかと思われのおばあさんが、にんじんを削っていました。六つばかりの孫むすこが、「バッパー。」と呼びながら、そばでざれています。長谷場さんの訪問のあいさつは、

○オイ トナー。

おるかね。

でした。おばあさんは、

「イマ ノリエガ イッタバッテ ナー。」（今、のりえが出て行ったんでね。）

と、もてなす人がいないことを心ぐるしがります。そして、

「チャー ワカシヤツシヨー カ。」（お茶をわかしましょうか。）

と言ってくれます。長谷場さんは、

「ヨカ トー。」（いよいよ。）

と答え、友だちが広島のほうから来たので、別に名所もなし、須口のほうでも案内しようかというのでやって来た。と、おばあさんに話します。私どもも、みんな、そのここちになりました。失礼して、あえて無作法もしてみます。

——こちらは、長谷場さんの言動を妨げないようにする必要があります。長谷場さんも、私どものいるのを忘れたようにして、話してくれました。

「ワイデバシ　ゴザス　ナ。」（おばあさん、にんじんなんか削って、お祝いでもありませんか。）

おばあさんは、これには答えないで、孫がじやまをするのをしかります。

「ドラー。」（おどれ！）

私どもは、腰かけたままで、寝そべったりもしながら、手すさびでもするような調子で、人の気を引かないように努めつつ、出てくることばを筆録します。

ひとしきりして、

「ドガンデス　カ。サキ　イタテ　ミマツシエン　カ。」（調査はどんなふうですか。先へ行ってみませんか。）

と、長谷場さんがこちらをふりかえるところへ、五十がらみの、この主人が、野らから帰ってきます。こんどはすぐに、私どものほうが、

「長谷場さんの友だち連中として、須口のぶらぶら歩きです。」

とあいさつします。おじさんは、くわえぎせるで茶をわかします。やがて、

「チャー　ノミナツシエ　ホラ。」

とすすめてくれます。芋うえの話が始まります。

「ジョーホーカラ　サーテ　ナー。」（広いうねに、両方から芋苗をさしてね。）

茶わん屋さんが、おじさんの話しをとらえては、話題ひろげにつとめてくれます。おじさんが、返事をしては、

ヤイト。<sup>し</sup>”(そうじゃ。)と言います。

このおじさんの、「人」の発音は、「フト」でした。そういえば、大脇くんの高浜村でも、「人」は「フト」です。このおじさんの「八代」<sup>やちろ</sup>は、「ヤツツロ」です。やはりここに、<sup>]</sup>i音のこん跡があります。おじさんの、この発音を聞くだに、はるかに、<sup>こしき</sup>甌島や薩摩半島が思われます。

「マタ キヤス デー。」(また来ますよ。)

長谷場さんが、こう別れのあいさつをすると、ぶこつで、ちよつとこわいようなおじさんが、

「ハ—イ。」

と返事をします。これです、九州の「はい。」は、全国をまわって、返事の「はい。」を聞いて、いちばんに特性・情調を私感じますのは、九州の「はい。」です。九州も、中部以南で、その特色が顕著でしょう。ともかく、九州へ来て、「はい。」を聞けば、九州の気分が味わえるとしても、私は言いたいのです。ここ天草南端の男性の「ハ—イ。」<sup>→</sup>は、改まっていて、しなやかであります。発言者の表情を見ていると、思いつぱいといったありさまで、実直さと謙虚さとは、すぐに見とられます。一見、無風流な挙動の中にも、たえず真情の動いていることが、この「ハ—イ。」の一事ばでわかります。

帰る道すがら、今の調査結果を反省しあいました。どのようにしぜんな話しあいがおこなわれたか、そして、それをどのようにすなおに速写することができたか、というようなことです。——方言の話しあい、平素のままにおこなわれているかどうかということも、その場で判断がつくという私の意見も、同行の二くんが納得してくれました。

こうして速写し、傍受したものが、たとえ少量であろうとも、これの資料価値には、疑いがありません。さてまた

このような傍受のうちに、問うものと問われるものとの相方の気分が和合したら、そのごは、続けて質問したとしても、それが、しぜんの話しあいになることもたしかです。

さいわい、長谷場さんが、移動司会者になってくれて、自分をまる出しにしながら、一座をリードしてくれました。調査では、このようなよい人に恵まれることも、肝要なことです。私は、＼では、おうちで、こんどは、あなたにお願いますよ。＼と長谷場さんに頼みました。

長谷場さんのうちの二階におちつくと、言いあわせたように、みんなが、ごろりと横になりました。つれのふたりは、すっかり疲れています。運動自慢の小泉くんが、

＼競技の練習をどんなにやったって、こんなにくたびれることはありません。この仕事は、よほどの精力がなければ、やれせんね。＼

と、しみじみとした調子で、述懐しました。人と応待して、また、人の中にあって、その話しの進行にびたりと寄り添おうとすると、ずいぶん心が疲れます。ねらいははっきりと持っていて、それをせっかちには問わないようにして、しぜんの会話の進行中に、一つ一つ目的のえものを得ていくようにすること、これは、一寸の油断もできないことです。しかし、生きたことばというものは、そのような注意のもとで求めて、はじめてとらえることができるものではないでしょうか。生きているものを生きているままにとらえるという、この平凡な仕事、じつは、もつともむずかしい仕事であります。相手の口から出ることばに、こちらは全身全霊をもってぶつかっていはじめて、生きているものがとらえられます。

ついでながら、文献を読んでものを調べるということも、じつは、その書かれていることばを、生きたことばとし

てとりあげるといふことでありましょう。この仕事は、文献というものが、静かに横たわって、いわば黙りこんでしまっているがゆえに、いかにもむずかしい仕事とされます。方言の、なまのことばを聞くのにもまして、ほねのおれる仕事であろうと思われれます。同時に、こういうことも考えられます。方言のことばは、からだで受けとめなくてはならないとすれば、文献のことばも、ただに、目さき、手さきで受けとったのではないけだろろうといふことです。(けつきよく、方言を聞いてことばをとらえるという仕事も、文献を読んでそこに生きることをとらえるという仕事も、同じことになるのではないのでしょうか。文献を読むおもしろさも、私には、方言をやってみて、はじめて、なるほどとわかるようになりました。右の二つは一つであれば、一方、こんなことも言えるでしょう。方言ことばを軽んじて、文献のことばを重んじるとしたら、そういう、文献のことばの重んじかたは、ほんとうの重んじかたではないだろろう、といふことです。)

一座の私どもは、用意していたあめを、ほおばりました。だれ言うともなく、口々に、〃方言を聞くという仕事〃が、なにか、生きた学問になるだろろうといふことだけは、実感されましたね。〃と語りあいました。おたがいに体験して得たもの、こればかりは、あらそうこのできない大事なものです。生きたことばにふれ、それをつかむことができたなら、そうするいとなみの、すでに学問になるおもしろさを、感じないわけにはいきません。まさに、学問が方言の山野にあります。方言の山野の中に立つて、私どもは、きわめて当然に、生きた学問、やりがいのある学問を自覚するのであります。

〃さあ、それでは、牛深方言の本論にはいりましょうか。〃と、私が口火を切って、こんどは、ここの長谷場さんに、ものを尋ねることにします。すると、長谷場さんは、

「アネー。アネー。ヨーイ。チヨボット。キテン。ノー。」（ねえ！ねえや。ちょっと来ておみよ。）

と、お手つだいさん呼びます。出てくれたのを、「この子が、さっき申しました天附の子ですから、ひとつ聞いてみてください。」と紹介してくれますが、十七、八歳のこの子は、恥ずかしがって、てんで座におちつきません。長谷場さんは、

「イットキデ。ヨカッチョイデ。スグ。スム。コッチャン。ノー。」（いつときでいいんだから。すぐすむことだからね。）

と言いますが、いっかな聞こうとしません。むろん、こちらもさまままにみてくださいますが、反応してくれません。やはり、用件の持ち出しかたがまずかったです。ことばを聞きたいと、あたまから頼んで、すぐに成功すること、まずありえないことでしょう。ことに、こうしてみんなが並んで待つている所へ、ひとりの、しかもあまり人まへに出たこともないような女の子を呼び出したのでは、何をどう頼んでみたところで、みんな無理となります。『そっちのことばの、変わったのを言ってみてください。』などと注文を出せば、そっちは恥ずかしがるばかりです。但馬の旅では、横でしばらく聞いてくれていた女学生が、やがて、ひとひざ乗り出してくれたのですが、その女学生は、方言に、特別の、興味と関心とを持っていました。今のばあい、私も、人を迎える用意と準備とに欠けていたことを恥じなくてはなりません。娘さんにわびて、おりてもらいました。（——顔をかくすようにして、ややほえみかげんでおりて行ったのからすれば、この娘さんは、さしてわるくも思わないで行ったのでしょうか。）

私は、場つなぎに、つぎのような思い出話しをしました。

『じっさい、今のような時は困りますね。相手は、なにかとくべつわるいことばをこちらが引き出そうとしている

かのように思うのですかね。若い人ですと、学校教育を受けていますから、土地の、変わったもの言い、変なことばというようなものに気づいています。あるいは、気づかされたりしています。そして、ときに、ひけめを感じています。外来者がそれを聞き出しに来たと思うと、もう心が固くなるんですね。

いつか、熱海で、あの、沖の初島のことばを聞きたいと思ひまして、市役所で、熱海の町に住んでいる初島の人を教えてもらいました。二、三軒おそわって、そこを順々にたずねましたが、不幸にして断られました。最後の一軒でした。見るからに、初島のことばの聞かれそうな家でしたので、熱心に頼みました。さいわい、主人の桶屋さんは承諾してくれたのですが、急に、おかみさんの方から故障が出て、それを新聞に出すのじゃないか、小説にでも出すんじゃないか。というわけです。残念ながら、その場のふんいきは、かたいものになりました。私は、大あわてにあわてて、陳弁これ努めました。やがて、おかみさんもわかってくれ、主人も気のどくがってくれて、今晚、宿へ行こうということになりました。さて、その晩、宿へは、主人さんが、羽織を着て来たというありさまですから、もうどうにもなりません。私がどんなにくだけてみても、調査の場は、やわらかにはなりません。宿のきれいな一部屋で、羽織すがたの桶屋さんと、よそから突然に来た私とが、ふたり、あの沖あいの初島のことばにひたりきろうとしたって、できることはありません。しかたなく、項目順に尋ねてはいきましたが、たいてい、「べつに変わったことはありません。」と答えられてしまうのです。そんな時、なんとも言えないつらい気もちですね。どうしたら、初島のことばにはいっていきけるのだろうか、もがくばかりです。

一つの残念な思い出です。”

長谷場さんは、

「アマツケニ イカツシエバ ヨカツチャバツテ。」（天附においでになれば、いいんだけど。）  
と気のどくがつてくれます。

調査者がわにつれのあることが、ときにはいいのですけれど、ときにはよくありません。つれがうぶな調査者であればあいは、だいたい、調査の場が、こしらえものようになって、ぐあいがわるくなります。調査者が、きちょうめんな顔をして、まともにものを書きつけたりしていると、相手は、まことに調べられてでもいるような感じがして、いつも自分というものを自覚しており、調査の場にとけこむなどとはもつてのほかとなるのです。調査者が、ともかく自分を捨て去って、その場にとけこんでいくようなありさまであつたら、相手は、しぜんにのびのびとしてくることが、言うまでもありません。一座の幾人かの調査者が、同様にその場にとけこみ、おぼれこむようであれば、それで、われもかれも、みんな一つ気分になつて、語りあうことができます。そこで、調査はぐあひよく進行します。調査のつれあいが、こんどのように土地っ子であるばあいは、その人たちが、その場の気分を養うのに、大いに役立ちます。

調査者がその土地にはいったら、調査のさいにも、その土地のことはつかうことが必要でありましょうか。あるともないとも言えます。わざとらしいまねは、かえつて、相手の感情を害します。しぜんのうちに、一ことば、二ことばを品よく（わるふぎけにならないように）つかうことができたら、これは、調査の助けになります。土地出身の同行者のしぜん土地弁をまたなくても、遠方から来た私の、わずか一、二の土地弁が、調査を大いに発展させることがあります。一つの思い出話しをここに添えておきましょう。いつか、出雲の旅をした時のことでした。散髪屋にはいつて、散髪をしてもらいながら、出雲ことばを聞こうとしましたが、どうも思いどおりになりません。相手は、

共通語めいたことばで応答してくれます。とうとう思いきって、例のズーズー弁の調子をすこし出してみました。と、先方は、これに触発されてか、急に出雲弁でしゃべり出したのです。自然の習性というものは、恐ろしいものです。

ここで一つの一般的なことを言えば、同行者が多いほど、調査は、たがいに、意のままになりません。たがいに、多少ずつこだわりを感じます。存分に被調査者にうちこもうとしても、なにほどかは、ひるむ気分を覚えがちです。その場の気分を測定したり、調節したり、推し進めたりするには、また、効果をいちいち測りながら、調査条件の整とん（整頓）に努めたりするのは、調査者は、ひとり舞台であるのがいちばんいいと思います。不如意の気分は、どんなばあいにも、調査にはきんもつです。

さて、いよいよ長谷場さん相手に、当方予定の調査項目を正面に立てて、問い聞きをします。すでに、長谷場さんの方言生活は、須口への往復以来、多少とも知ることができました。この人の生活語をつかまえる基準とでもいうものは、もうできています。これからは、この人の身体をなでまわすようにしながら、手・足の腕・首だのをとらえるようにして、この人のことばをつかまえればよいのです。今はもう、まわりのものが幾人いてもだいじょうぶです。多い方がかえってよいくらいです。土地っ子の調査者は、いっそうつつこんだ調べかたをしていくでしょう。

日が暮れて、ひとわたりの調査がおわりました。茶わん店を見物して、表に出ると、小さいのとりたてをかついだおばさんが通ります。「いわしのとれたって、こんなに青あおとした、きれいなものですかね！」

なにかも済んだような気がして、ほっとした気分で見やります。こんな時、「牛深」の名、この変わった名まえが、胸にかくべつじいとききます。そして、その名の町に自分のいることが、不思議なように思えてくるので

す。不思議でもあれば、まことに好きらしくも思えるのです。見るもの、聞こえるものすべてが、牛深の町の記念で、覚えようとしなくても、ものが覚えこまれます。それがまた、書きつけにもなります。(——旅行家は、このような時、ばちりばちりと写真をとるのでしようか。私どもには、機械のカメラよりも心のカメラがいつそうだいじです。) 見まわしながら、書きつけながら、私が町を歩くのを、つれの二君も、そんなものかなあといった調子で、見てくれているようです。阿波屋という宿に着きました。

この牛深に来て、阿波屋。旅をしては、宿の屋号も聞き捨てにしないものです。——宿のことではありませんが、伊予の南の端で、「シオツナ屋」「シヨツナ屋」という屋号を聞きました。珍しくおもって聞きただしますと、  
 “なんでも、紀州にも同じ屋号があるそうです。”ということでした。黒潮の結ぶこちらとあちら、四国西南端と紀州南辺とは、屋号の結びつきさえあるのでしょうか。私は、こんな結びあいのあるのからしても、双方のつながりの、じつは偶然ではないことをも思わないではいられないのです。そういえば、土佐の西南端に小築紫村というのがあります。宿毛すくもという名の町(今は市)もあります。小築紫の「つくし」は、九州の筑紫に通いましょう。宿毛の名に似た所としては、薩摩半島に指宿いぶすきという所があります。思い出せば、いろんなことが出てきます。まあそれはそれとして、今晚は、この阿波屋です。

玄関に、小さな箱が出されました。小泉くんが、旅行用の持参米をそれに入れようとすると、“おくつです。”と言います。小箱にくつを入れて、それをさげて二階にあがります。

、短距離そのほか、なんでもやお屋です。、という陸上競技自慢の小泉くんが、すっかりあごを出しました。“精力のいる仕事だ。”と、またしても大脇くんと話しあいます。裏縁から見ると、すぐ前方に、薩摩の長島がひろがっ

ています。あすは長島に渡りたいものです。今晚で、ふたりとはお別れです。

夕食後、散歩に出て、長島行きの便船を問いあわせました。どうもいい便にうちあたりません。あさつてまで待てば、朝便があるとのことです。

大脇くんの友だちの話によれば、長島では、「くをクイヤイ（くれヤイ）」と言うとのことです。薩摩に属する長島であるだけに、そこはもう、そのように、薩摩ことばのつづきがらを見せているのでしょうか。

こんどの旅行で、天草から長島をへて、薩摩本土にはいりたいと思つたことも、実情にあつていました。言つてみれば、ぼかし色の薄い天草南部から、色の濃い薩摩へ、長島をへてはいつて行くのが理想的です。だのに、あすは便船がありません。警察の船かなにかはないものかと、署へたち寄つてみますと、表にいた、二、三人の巡査さんが、「長島は国家警察の管轄が違うから関係がない。」と言います。これはまた、とりつくしまのないことです。

マーケットというのを見て歩き、また町どおりに出て、一軒の本屋にはいりました。しばらくすると、停電とあつて暗がりになります。ローソクの光のもとで、大脇くんが、二、三冊の本を買い求めます。宿に帰つて、座談を始めると、電灯がつかまりました。話にもくたげられたころ、長島をよんだ、小泉、大脇両くんの俳句ができましたが、ついに、あすの便船はできませんでした。

### 水俣行き

大脇くんは、朝、早く発つて、バスで本渡にひき返します。それを見おくつて、小泉くんとふたり、浜に出ます。けつきよく、私は、熊本に帰る小泉くんの便船にいつしよして、八代海を横ぎり、肥後の、南の港、水俣に渡ることにします。長島を、はじめは東に見つづ、やがて、南に遠望して、船は進みました。発動機船であるこの船には、お

客さんがいっぱいです。ふたりは、甲板の端っこにすわっていました。ここで、やっと、小泉くんを持つ熊本弁を聞く番になりました。

これは、さっそくに完了します。もっとも、細かなことになると、たしかめてみてもらわなくてはならないことが多かったのです。ちよつとした、文末のことば、たとえば、

○センセイノ キタ| バイ。↓

先生が来たよ。

と、

○センセイノ キタ| ボー。↓

との、「バイ」と「ボー」、この二つの違いというようになると、ことがらをくまなくさぐってみる必要がおこってきます。つぎにまた、「キタ| バイ」↓に対して、

○センセイノ コラ| シタ| バイ。↓

○センセイノ キナ| ハッタ| バイ。↓

というのは、待遇表現として、それぞれ、どのように値うちが違ふのか、おのおのことばづかいの気分の特色は、どんなぐあいであるのかとなりますと、これまでの小泉くんの注意のしかたでは、答えてくれることがむずかしいでした。いわば、今までの小泉くんの反省なり、観察なりは、目があらずぎたのです。「バイ」と「タイ」との区別も、追求していると、小泉くんにもわからなくなるのでした。

○ソギヤン| カイタ|。

そんなのかい？ そうかい？

の「タ」と、

○ヌシガ イクナラ エータ。

の「タ」とは、どう違うのか、表現差はないかと探究していくと、小泉くんは、答えにつかえてしまふのでした。いちいち、問題をノートにひかえた小泉くんは、学校に帰って、生徒に方言研究の話をするのだとはりきります。

小泉くんも、ずいぶんくたびれたのでしよう。この話しあいはずむと、甲板にすわりこんだまま、頭を、折り立てたひざがしらの間にはさむようにして、眠ってしまいます。船の向きかげんで、朝の日の光が私どもにいっぱいにあつたかとおもうと、また、かげがおおいます。もはや六月の初めになったというのに、うっすらと寒い日です。

八代の海は、深々として、すごい青さです。船が傾きかげんに走ると、私は、つられて、思わず身を固くして、じつと海づらを見ます。さいわい、波はありません。水俣はあの方角だろうかと見当をつけます。それから二時間ばかり、船はまっすぐに、水俣をめがけて走ります。

やがて、第一回の汽笛が鳴りました。小泉くんは、まだ身うごきもしません。彼は、とうとう、八代の海のはんとうのところは見ないで過ごしました。

“小泉くん。着きましたよ。”

水俣の港から水俣の駅までは、そうとうな長みちです。人びとはあらそってバスに乗ったのですが、私どもふたりは、歩いて駅に行きました。掘り割りのある丘ひとつを越えると、向こうに水俣の町がひらけます。

駅で、ひとり北へ、ひとり南へ、いよいよお別れです。「同じかまの飯をくった」ということがあります、短期間とはいえ、こうして調査の苦勞（楽しみ）をともにしたあいかたは、——仕事が四六時中の仕事でもあっただけに、今や、「同じかま」の同士です。小泉くんも、はじめてこんな経験をして、どうやら、深い思いにとぎされていようです。それではと、小泉くんは、ひとあし先に、上りの汽車で発って行きました。

### 薩摩へ

下りの汽車は一時すぎです。小泉くんを見おくと、ひとり、薩摩のどこまで行こうかと考えます。方言の旅に時刻表はありません。万事、行き着ける所まで行き着くまでです。こんどのおおよその目あては、薩摩の西南端の笠沙です。肥後の西南から薩摩へと、土地をなでる心地で、ずっと南下したいのです。切符は、まず伊集院まで買いました。

長島に思いを残しながら、鹿児島行ききの汽車に乗ります。薩摩にはいつて、米ノ津に着き、西出水さいみづを出て、三駅ほどとまりますと、六十歳前後のおばあさんが乗ってきます。この人が、ほかの人へ、

「どこそこへ オチャンス カ。」（おいでなさいですか。）

などと言っています。ああ、薩摩弁が始まったな。と胸がおどります。こんどこそ、薩摩弁をものにするのだと心にきめて来ただけに、こんな一ことばを聞くにつけても、胸がわくわくしました。それに、かねての旅行で、胸にもしみついている薩摩弁への懐しさはかくべつです。一つの抑揚を聞いても、おお、そうだった、そうだった。と、薩摩抑揚の特色を思い出すのです。あの大隅高山町での、はじめて、九州南部地方のことばに手つけた時のことも思い出します。聞いても聞いてもわけがわからなかった、あのもどかしさが、胸にあざやかです。外国語を聞

く思いで方言を聞け。ゝと、しんげんに自己に呼びかけ、白紙から出て行け。ゝと、自己を、いった（叱咤）した高山町での一兩日は、今も、私の胸に生き生きとしているのです。

それから幾度か、大隅・薩摩のことばに、もまれてきました。そして、今また、薩摩いりするのです。

南九州いりと、東北奥州いりと、この二つを交互にくりかえして、平均をとりながら、かつ、全国の諸地方を歩いてきました。薩摩・大隅は、なんとといっても、私には因縁の土地です。

乗って来たおばあさんのことばが一つずつ聞こえるたびに、高山町以来の「薩摩・大隅」経験が、一列に並びます。あれだな、これだなと、「薩隅的なもの」が心にうかびます。東京に行けば、東京ことばの抑揚がいくぶん身につくのと同じで、ここまで来て、おばあさんの話し声を聞いていると、薩摩弁が自分のものになってくる気がするのでもありました。

そのおばあさんが、——どうか自分のそば近くにすわってくださいますようにと念じていたかいがあって、つごうよくあいた、私の右どなりの席に、来てくれました。大きなふろしき包みをかかえたままのおばあさんです。さっそく、私に話しかけて、

「あんたは、どこまで行くか。私は、加世田まで行く。」  
と言います。

「そうですか。加世田へおこしですか。私も加世田まで行って、支線でもう一つ先の駅まで行って、それからまた向こうへ行くつもりです。さあ、きょうのうちに、どこまで行けますか。」

天草から薩摩への、この旅行に、さいわい、薩摩の北の端の人と同行できるのは、しあわせなことです。薩摩こ

とばの、北から南への移りゆきについて、なにほどかの知識を、車中で、おばあさんから得ることができそうです。偶然と言うには、あまりにももったいないことです。私は、心はずんで、多弁になりました。

おばあさんは、加世田の警察に勤めているむすこさんのところにできた初孫さんを見に行くのだそうです。大きな包みの中には、お祝いの品じながはいつていることでしょう。素朴なおばあさんです。

「おばあさんのお所は、どこなのですか。」

「脇本です。」

「脇本と言いますと、……………」

と言いながら、地図を見ると、三笠村脇本であることがわかりました。

「三笠村なんですね。すると、長島のすぐこちらですね。」

と言うと、おばあさんは、長島への渡し船のことや、その渡し場から、バスで、さっきおばあさんの乗った駅に来ることができると話を話してくれました。

三笠村は、薩摩の北の端に、こぶのように出た所です。それに長島がくっついています。おばあさんの話を聞いているうちに、あたかも長島経由でこちらへ来たような気分になりました。さて、このおばあさんのことばがこんな薩摩弁であるとすると、その北つづきの長島のことばが、やはり、このおばあさんのことばに似たりよったりではあるまいかと想像しました。目をつむれば、天草から南薩へと、ぼかし模様のように、ことばの移りゆきが見えて、薩摩ことばらしいものは、南へ行くにつれて、順次、色こくなっていくように思われるのです。その南薩の、私の行く先が、「笠沙」であるのも、このおばあさんの村の名、三笠村というのとの通じあいを見せているようで、おもし

ろいことに思われました。笠沙の町は、町とは言いながら広い村で、南薩の西海に突き出た小半島部にあります。

### 笠沙町の村むら

ここは、ずいぶん前から目あてにしてきた所です。まえに幾度か鹿児島の子師範学校を訪れて、その寄宿舎で、県内諸地方の生徒さんに会って、方言を調べていたころ、笠沙のアクセントは変わっているなどと聞かされました。それ以来、笠沙は、一つの調査念願の地になったのです。ちょうどあのように突き出た半島部はあるし、きっと調査の一要点になりそうだと思ってきました。こんど、いよいよ笠沙行きときめた時は、かつて女子師範の教師をしていた先輩に頼んで、その教え子さんに紹介してもらい、笠沙の玉林小学校の田中とみ子さんをたよることにしました。加世田までいっしょだったおばあさんに、駅前で別れると、もはや日も暮れがだったので、私はそのまま加世田に宿をとりました。宿帳に前夜の宿泊地を牛深と書くと、宿のお手つだいさんが、まあと驚きました。このお手つだいさんも牛深の人だそうです。夕がたの宿の二階で、裏のガラス戸をあけると、この地方特有の田園と丘の林が開けています。

目的地を前にひかえての一夜というものは、楽しいような、じれったいような感じのするものです。それにしても、この加世田の町は、気分のよい町で、いろいろなことばが、私を楽しませてくれました。町の銭湯もきれいで、ぞんぶんにひたることができました。

翌朝は、人ごえを聞きながら、二時間ばかりを町のそちこちで過ごす、加世田の駅前で、笠沙行きバスに乗りました。乗って二時間ばかり、ひどく揺られて、笠沙町小浦に着きました。浜べに、玉林小学校を訪ねます。

小学校の玄関で、男の若い先生に来意を告げると、わかっていてくれて、すぐに応接室に通してくれます。

「オイ。コラコラ、ヒロコサン。コツカイサン トコイ（小使いさんとこへ） イッテ ナー。オチャ モツテ キナサイツテ。」

ひろ子さんは、運動場の向こうの小使い室へすぐに走り、この男先生は、上のやしきにある別むねの教室に、田中とみ子先生を呼びに行きます。

田中さんが来てくれました。そこへ、小使いさん、といっても十七、八の娘さんが、お茶を運んでくれます。こうして、応接室などでもてなされると、方言調査には、どうもぐあいかわるいのですが、それにしても、薩摩弁きつすいの、こういう土地のことですから、きょうは、ここにおいても、そんなにちがいのようには思いません。小使いさんが、お茶うけにと、大根を小さくきざんだのへおしようにゆをかけて、持ってきてくれます。田中さんが、どうぞどうぞと、はしではさんで渡してくれます。私は、それを平手で受けなくてはなりません。これだ。と、かつて豊後の奥で経験したことや、奥羽地方で経験したこと、あるいは、紀州で経験したことなどを、つきつきに思い出しました。お茶うけで、おたがいの気分はすっかりとけあい、この場面も、まったく方言的なものになってきたようです。さあ、やるんだぞ。と、私は、心で、方言的にやや不作法になります。

「せいっぱい、この笠沙の土地のことばが聞きたくて、やって来ました。調査の手順としては、このように、このように。」

と話しました。とくに、

「私を、ただの隣のものとも思ってくれますように。」

と頼んだのです。田中さんは、どんなにしても、すこぶるはっきりとした、快諾の返事をしてくださいました。さ

っそく、

「ひるから、受けもちの子どものうちを訪問してまわりましょう。いっしょに来てください。」  
 と言ってくれます。願ってもないことに、田中さんは、一年生の受けもちだそうです。ついて行く私も、さぞかしいろんな話題が出るだろうと、心ははずみしました。

ひるに、小使い室で手を洗うときに、この道具は何と言いますかと尋ねると、例の小使いさんが、笑って恥ずかしながら「珍しい手洗い用のおけなのです。田中さんが聞きつけて、それは「ビンダレ」だと教えてくれます。「ビンダレ」だと、かおだらいというわけです。そこで、かねの洗面器は「カネビンダレ」ですかと尋ねると、「カナビンダレ」だと、今度は、小使いさんが教えてくれます。これで、みなが仲よくなりました。そこへ、ひる休みである子どもたちが寄って来ます。

やがて、田中さんと出かけることになりました。

向こうから、おばさんが来ます。半分、私の方を見ながら、田中さんになにやら言います。それに答えて、田中さんが、

「アスツケー。」

と言います。私は、おばさんが遠ざかると、「今の会話は？」と解説を頼みます。「アスツケー。」は、「あそびに。」という返事の由、なるほど、われわれは遊びに行くのです。「あそびに。」、これは、私なども、子どもの時分、さかんにつかった、おとなへの返事ことです。目的のあまりはつきりとしていない時につかうあいさつでもありました。なんとなくといったような気分が、それにはつきまわっていました。が、きょうは、まったく目的のはつきりし

た「あそびに！」です。そして、土地人には、それが、そこはかとなき「遊び」に見えるのでなくてはなりません。二王崎という部落にはいます。崖の上の一軒家に行きます。「ハマゴンボ」(はまごぼう)のはえている石垣をかいまわると、その家の門さきで、田中さんの受けもちの子の秋雄ちゃんがあそんでいます。

「アキオサン。アスツケ キタ。」(秋雄さん。あそびに来たよ。)  
 やっぱり、「アスツケ」です。

当地の文アクセントの特色をつかもうとすると、つぎのようなのがあがってきます。

○アタマニ ノミコメバ、……………。

○カライモガ クサリ、……………。

これ式の調子が、いちばん、耳を打ちます。

秋雄さんの家では、納屋の前で、おじいさんがやら仕事をしています。そこらあたりからおもや(母屋)の前にかけて、色とりどりの鶏の、大きいのがあそんでおり、ずいぶんにぎやかです。田中さんは、かまわず、おもやの戸口をあけて、ずっとはいつて行きます。——私もついでに行きます。いろいろばたに、三十三、四歳といったころあいの、秋雄さんのおかあさんがいました。田中さんと、このおかあさんとのあいさつが始まります。こちらは、聞きとりにいっしょうけんめいです。南九州へは、これで幾度めの旅でしょうか。こんどこそは、そうとうに土地弁が聞こえるようになりたいものだ、むきになります。(なにしろ、聞いていて、ちよつとことばをとりがすと、あとはもう、早く言っているのやら、遅く言っているのやら、それさえもわからなくなったのが、これまでの経験でした。)こんどは、うれしいことに、だいたい速さがわかります。あわてるでないぞ。と、自身に言い聞かせなが

ら、個々の発言をひろっていきます。わざと気をゆるめたりしてみて、おちつくことに努めてみますと、どうやら、おおよそは、土地の人のことばについていけそうです。時分はよしと、私は、書きつけ用のカードをとり出して、向くとはなしに横を向きながら、そつとことばを書きつけます。心おほえをしるすようなかつこうで、ものをしるします。ふじゅうぶんなところがあつても、あとで、田中さんの助けをかりれば、なんとかなります。

話しの座へ、娘さんふうの人が帰つて来ました。この人は、このうちの娘さんで、よそに嫁にいつているのが、今、ちよつと、手つだいに來ているのだそうです。小さい子たちは、どれがどちらのおかあさんの子か、私にはわかりません。秋雄さんのおかあさんが、お湯をわかしています。表のおじいさんも、あいさつにもどつて來ました。田中さんは、だれにも、〃私の、もとの先生が來て。〃とか、〃散歩です。〃とか、〃あそびに。〃とか言つて、その場の私をとりなしてくれて、いかん（遺憾）がありません。もとより、ご自身、笠沙町の大浦の人ですから、郷土の人になりきつて、お里ことばのままに語つてくれます。先方も、つかまわずに、私のことなどはさまで問題にしないで、田中さんとの平生の話しあいにはいります。もの言いは、双方とも、笠沙のしぜんのままです。

私は、場をこわさないようにと努めます。そして、もっぱら聞きとりに努めていけばよいのです。だんだん薩摩弁がわかってきます。わかり始めると、実感とも言えるものがわいてきます。いよいよ薩摩ことばの気分にあふれたようなこころになります。

お茶が出ました。無作法な訪問ですけれど、このように迎えられるのですから、恐縮にたえません。私は、まだ姓すら名のつていないのです。ただ田中さんの知人ということで通用しています。純朴な、よい人ばかりの中で、私は、はじめっからせんぶ信用されているのです。田中さんは、ほんとにいいリーダーでした。

土地のならわしで、すぐにお茶が用意され、そしてまた、なにかのお茶うけが出されます。余談ですが、私の年来の調査旅行も、言ってみますれば、土地土地のお茶うけをたずねてまわる旅でもありました。きょう、このお茶うけは、「コッパ」というのです。さつまいものむしたのをつぶして固めて、それを、小型ようかんのように小さく切ったものです。これを、はしではさんで、さし出してくれます。私は、すっかりうれしくなりました。やはり、たべることが、双方とけ合うものになります。おいしい、おいしいを連発して、「コッパ」をちようだいしていると、相手の人たちの遠慮のかけも、薄らぐようでした。そうなると、こちらも、気がねなしに、方言の聞きとり・書きつけをやります。此一時間ばかりも、こうしてあそばせてもらつたでしょうか。田中さんが、

「それじゃあ、また、ほかの方へあそびに行つてみましょうか。」

と言つてくれて、私どもは、おいとまごいの用意をします。おいとまごいの用意はすなわち、また新しい調査の用意なのです。薩摩南方の人たちの別れのあいさつことばが、あらためて私の心をとらえます。

この人たちが、たとえ、外来の私に遠慮してあいさつをしてくれたいとしても、それはそれでよいのです。私には、先方の、そのさいの丁寧なあいさつが、薩摩弁の上等の敬語法として受けとられます。この地方の人びとは、改まったもの言う時も、しげんに、当地方のことばでの改まった言いかたをする人びとでした。

○ゴブレサー モシヤゲモシター。〃

ご無礼いたしました。

これが、この嫁さん（秋雄くんのおかあさん）の、私どもを送つてくれるあいさつでした。戸口を出ながら、私は、あ、あ、こんなに気もちのよい「モシヤゲモシター」は、まだ聞いたことがなかった。〃と思つたことです。ほんとう

に、薩摩ことばを味わうことができたような気がしました。これ一つの経験によっても、私は、この土地ことばの中にはいった気分になることができたのです。

若いほうの嫁さんは、表口から出て、ゆっくりと静かに、私どもへ、

「マタ オサイチャツタモンセー。」（また、いらっしやってくさいな。）

と言ってくれました。こうなると、私は、薩摩ことばのいちばんおもしろいところをいっばいたべさせられたようなことです。——この嫁さんだったら、小学校で習った読本のことばであいさつすることも、できぬことはありませんまい。だのに、今は、この人のもっともしぜんな改まりかたで、純粋な土地ことばを、右のように出したのです。私は、こうした経験のもとで、「オサイチャス」ことばや「タモンセ」ことばの敬意度、尊敬感情などを、だんだん理解することができました。

夢からさめたようなこちで、また、「ハマゴンボ」のそばに立ちます。今しも、入り海やみさき（岬）の光景が、なんとも言えぬ美しさです。私は、名も知らぬ大きな木のかげで、田中さんに質問します。（さっきの調査での疑問点を、こうして田中さんに解いてもらおうのです。）

「見ずに」を「見ンジュニ」と、さっき言っていました。「見ン」は、薩摩半島南岸、枕崎港などで聞かれた、鼻母音関係の発音を思わせるものです。そう言えば、さっきの「ゴンボ」の「ン」も、同類のものでしょう。さっきはまた、

○チャシ トー。

とか、

○ヂヤシ トナー↓。

とかいう、主婦のしんみりとした応答のことばに気づきました。天草の牛深なら、

○ヂヤイ トナー↓。

と言うところです。

二王崎を出はなれて、その先の片浦へ歩いて行きます。道みち、田中さんが、*「天草の牛深へは、ここから漁船が行きます。」*と説明してくれます。*「甌島はどちらですか。」*とたずねる私。*「あれは、薩摩半島の吹上浜です。」*と教えてくださる田中さん。ふたりは、話しながら片浦の部落にはいります。ここは、もう、この小半島部の北の端に近い所です。片浦は、笠沙一番の漁港です。先年、火事があつたとかで、バラック建ての家も見えますが、りっぱなかわらぶきもたくさんできています。港にそつた平地から、そのうしろぐるりの高い所まで、家がたち並んでいます。私どもは、上のほうにある家に行きます。その坂道で、田中さんが、教え子の二、三人につかまりました。

「ドケー イキヤツ トー。センセー。」（どこへお行きになりますか？ 先生。）

「キヤイ ナー。センセ キヤイ ナ。」（うちへいらつしやいな。先生、いらつしやいな。）

と、みなみな、先生になつきます。田中さんのお人がらが見えて、ほほえましいことです。ひとりのおばさんが来ます。田中さんと対談します。そらとばかり、私は、耳を傾けます。だいたいのことはわかりました。その内容が、じつに痛ましいことなので、心を打たれました。先だつての暴風に、出漁したまま、このおばさんのむすこさんが帰つて来ないというのです。*「わしはまだ、いまに帰つて来るか、いまに帰つてくるかと思えてなあ。」*とのものがたり

のようです。その悲痛なことばのあやが、いくらか私にもわかるように思えました。発言の感情を、そのまま受けとることができたのは、方言研究としては喜びでありましたけれども、薩摩のこんな果てに来て、おだやかな村の中で、こういう痛ましい話を聞くのは、また言いようのない悲しみでありました。

そこから小みちにはいつて、石段道を上にあがります。「カミヤマ ヒトミサン ゲ」(かみやまヒトミさんのうち)に行きます。ちようどうちにいられたのは、六十歳にはなるまいかと思われるおばあさんでした。このおばあさんの孫ヒトミさんの先生、田中さんの訪問に、おばあさんは、

「バシヨガ ゴザハンデ。」(すわっていたく場所がございませんで。)

といったみ入ります。お気の毒に、このうちも、村の大火事にかかったのです。今、急ごしらえに建てた家のしつらえも、まだ整っていないようです。

「ヨカタンガ、オバサン。」(いいですよ、おばさん。)

と、田中さんが応答します。田中さんについて、裏にまわりました。裏のしきいに腰かけさせてもらいます。そこへ、ヒトミさんのお使いで、かあちゃんが帰って来ました。ヒトミさんは、去年、田中先生におそわって、今は二年生になっている子のようです。田中さんは、ここが親しいうちらしくて、気をつかわないで、ここへ私をつれて来たふうです。三十七、八かと思われる、いいおかあさんが、いろいろとうちとけたあいさつをし、田中さんのおかあさんのことも話題にして、あいさつを述べます。のちにわかったことですが、このおかあさんは、子どものころ、田中さんのおかあさんに、学校でおそわったのだそうです。どうりで、田中さんの、このうちへの訪問は、うちとけたものでした。私は、ここでなら、存分にカードが書きつけられるぞ。、というような気もちになって、疲れていた

からだに、急に元気をとりもどします。用意のカードがたりなくなりはいかないなどと、早くも、学校に置いてきた荷物のことを思っています。

おばあさんが、改めてあいさつをします。

「ヨカ テンキサー ゴアン ド。ユートソ。マー オアガリヤッタモン。」（いいお天気でございますね。ようこそいらつしやいました。まあ、おあがりになってください。）

整ったきれいなあいさつことばです。薩摩のいなかの、年長者のていねいなあいさつことばの世界に、こんな美しいことばが生きています。この人に、「……………ヤッタモンセ」が、「……………モン」と略されているのも、心をひきました。ヒトミさんのおかあさんのほうは、

「ユツクリ オカケヤッタモン。」（ごゆっくりおかけになってください。）

とあいさつしてくれます。田中さんに、「オマンサー」と言います。おかあさんは、もう一度、

「イタノマ ゴザモンド ユツクリ オカケヤッタモン。」（板の間ですけれど、ゆっくりおかけになってください。）

と言ってくれます。「じゃあ、失礼して。」と、私から先に、その板の間の端へあがせてもらいました。田中さんがまた、「私の先生で、…。」と説明してくれます。これで私は、鹿児島から来たものと思われてしまいました。田中さんのとりつくろわぬ紹介ぶりに、先方は、すっかり氣を楽にしています。一座は、平素のつきあいながらの話しあいをします。ときたま、

「イツコー シリモハン。」（いっこう知りません。）

などということばが出てきます。なるほど、「申さん」はこんなふうにつかうのかと、私は、大いに納得します。思えば、「申す」ことばが、よくもこう生きているものです。

お茶が出て、お茶うけには、じゃがいもが出されました。

五十がらみのおばさんが、かどききに干している麦をとりかたづけに来ます。おもしろいおばさんで、すぐ冗談も言ってくれます。大阪にも住んだことがあるとのことでしたが、それにはかかわりなく、今はすっかり土地ことばです。みんなの話しは、しぜんに、この火災のことにおよびました。いろいろの植木が、そのへんにあったことなども、話題になりました。ヒトミさんのおかあさんは、

「オチャヤンドワ ヨカロゴアンド。」<sup>↓</sup>と言います。「お茶などを植えたらいいんでございませうね。」というのです。「ヨカロゴアン」の言いかたの、ことばづかいとして、特別にきわだつていようすが、ここにはつきりとしています。

「メツシヤガッタモンセ。センセ。」

おじゃがを食べるようにと、しきりに私にもすすめてくれます。——こんどは、「モンセ」が出ました。やがて、ヒトミさんの学業の話題になります。

「ガツツ、カケル モレモシテ ナー。」<sup>（ひどく、</sup>「カケル」じるしをもらいましてねえ。）

算数の話しのです。おかあさは、ヒトミさんの一年生当時のことを、田中さんに感謝して、

「チカラ イレテ タモヒテ ナー。」<sup>（力を入れてくださってねえ。）</sup>

と言います。私は、ははあ、「タモヒテ」はこうつかうのだなあ。と納得します。おかあさんは、さらに、

「ニタセンセイモ アツタラシカ ナー。」（仁田先生も惜しいことねえ。）

「ヨカ センセ オサイチャンシタ ナー。」（いい先生でいらっしやいましたねえ。）

と語ります。これは、転任の先生を惜しむ話しのようです。「人が」を「フトが」と言うのも聞かれました。「ヒ」を「フ」と言うのは、<sup>[i]</sup>母音を<sup>[u]</sup>母音に近づけたものでしょう。枕崎方面に著しい中舌母音の傾向は、ここにも、特殊な形で残っているようです。

おりから、ヒトミさんのにいさんのゆたかさんが帰って来ました。

「ゆたか。タムイ カー。」（ゆたかや。おじゃがをたべるかい。）

「タモラン カー。」（たべないか。）

「たべる」の意の「タムイ」「タモラ」が出てきます。一つ一つのことを聞くたびに、いちいち、実証のここちになります。

二時間以上もここにいたでしょうか。田中さんも興じて、「この先生は、広島から来たんですよ。」とやりだしました。しかも、このことを聞きに来たと言ってしまったのです。その時、このおかあさんの口について出た声は、

「ド、ド、ド、ド、ド、ド、ド、ド。」

でした。「ド、ド」という、とっきの声に、私は驚き、かつ恐縮しましたが、先方さんが気をわるくしてはいられないことを知ると、ほっとして、改めて非礼をわびました。それからは、筆記のカードを、およそまともに取りあげたことです。

ひとしきり書きつけて、いよいよおいとますることにします。おばあさんが、

「セツカク キテ タモシタツチ ナー。」（せつかく来てくださったってなあ。）

おきかなもたべさせることができまさんと残念がってくれます。こんなにかつてな訪問をした私どもですのに、なんと果報なことでしょう。漁業の村の、人をもてなす気もちというものが、よくわかりました。おかあさんは、手ばやく田中さんのふろしきをとって、いりこを包みます。私どもは、くりかえしお礼を述べて出ました。家をすこしさがった所で、例のごとく、私は、また書きつけをします。その一つは、

○ヒカヒカ ヒトツタ。ギンノゴト。

ぴかぴかしてた。銀のように。

です。これを書いているところへ、おばあさんが、上のほうから、また声をかけてくれました。こんなものだが、持って帰るかたさし出してきているのは、ぶりの干し身です。（あとで、そうとわかりました。）私は、それをおしただだいて、感謝しました。

「カカイガ ワルー ゴアンデ、コケンゴー オチャツタモンセ。」（かかり入道Vがわるうございますから、いけないようにおいでなさいませよ。）

おばあさんの、心のこもったことばをあとにして、坂をくだりました。

今は、なにもかも満ちたりた気もちです。きょうも、ようやく暮れようとしています。一日を、笠沙のことばの中にうずもれることができた喜びを、くりかえし田中さんに訴えました。これれものをそつといただいたようなこち

で、——自分の頭の中を乱さないようにしながら、村の中を歩きました。

水をくむ人のそばを通りながら、港の端に出ます。突堤に休むと、港を出はなれたところの小島が、ちようど、造ってすえたように見えて、えも言われぬ美しさです。青あおとした海が、大洋はるかにひらけています。南の果てに来たというような感傷にとられます。

音にふりかえると、発動機をすえた漁船の幾隻かが、今や、かいがいしく出かけようとしています。これは、沖あいに向けて、幾時間もの距離を乗り出すのだそうです。村の若い衆が雇われて、網元の船に乗ります。この人たちは、「アミコ」と言われています。「アミコ」についての景氣のよい話しを、田中さんから聞きながら、もとの道にもどりました。こよいは、田中さんの宿、田中さんのおばさんのうちで、方言の座談会をもよおしてもらいます。

おばさんのうちに、久ちゃんという、新制中学三年の女の子がいます。おばさんは、三十五歳の人で、久ちゃんにとっても、おばさんです。久ちゃんは、東京に小学校五年のなかごろまでいて、ここに移って来たのだそうです。当座は、標準語の名手で、教室でも、しばしば模範台に立ったのだそうです。そののち、久ちゃんは、笠沙語の名手になりおおせて、今は、男まさりの級長さんです。私のおもな相手は、まず久ちゃんでした。

田中さんから言いふくめられたおばさんは、おとなしい人なのに、こよいばかりは特別で、大いにことばにくだけてくれます。久ちゃんの友だちふたりと、春ちゃんという男青年とが、集まってくれました。みんな、気がねなしに、あれこれの話しをします。

私も寝そべったりして、わざとお行儀をわるくし、ほんのきれぎれにはありますけれど、薩摩地方のことばをつ

かつて、ものを尋ねたりもしました。久ちゃんが、私を、鹿児島から来たものと思っていたのも一興です。やがて、久ちゃんが言うのには、

〃コマラスツゴ| センナ スマン。〃 (困らすようにやらにゃいかん。)

と、意地わるも言います。私を笠沙語で攻め落とそうというわけです。

○アン フタ| ムカレラツチ。

これは何のことかさっぱりわかりませんでした。尋ねますと、「あの人は嫁にいくそうだ。」というのだと答えてくれました。「人は」の「フタ|」は、まずよいとして、「ムカレラツチ」は、「迎えられるって」でありましようか。なるほど、嫁にいくのは、<sup>、</sup>迎えられる<sup>、</sup>に相違ありません。けれども、「ムカレラツチ」と聞かされると、まさにわけがわからなくなつて困るのです。類例を田中さんに求めます。と、

○オマヤ| ムカレラツ トカ。

おまえは、嫁にいくのか。

○アタヤ| ムカルツ ト。

わたしは、嫁にいくの。

の二例が出てきます。

〃ひとつもわからん。〃というのは、

○フトツモ| ワカラン。

でした。これは、久ちゃんが、私のことばを、すかさず笠沙語になおしたものです。ここにまた、「ヒ」の「フ」が

見えます。久ちゃんは、私が共通語で話したことを、すぐに笠沙語に訳してしまいます。これはまた、珍しくてありがたい経験でした。たしかに、この方法にも味があります。久ちゃんは、

〇オトトイ キヤイギー ヨカッタ。(おととい、来なさればよかった。)

と言ってくれます。おとといは、小学校の開校記念日だったのだそうです。やはり、この土地でも、「ギー」を言っています。(「行かなきゃよかった。」は、「イカンギー ヨカッタ。」です。)  
「ほんとに。」とあいづちをうつのに、「ホンナ ヨテ。」と言うのも、肥後あたりと同じです。

〇ヒロシマカラ クッド オー。(広島から来るでしょう?)

「クッド」(来るだろう?)の問いが、「オー」によって、ていねいな言いかたに、いろあげされます。薩摩地方に一般的、それでいて、全国でも珍しい文末の「オー」です。

〇コイカラ モー イッキ モドイヤツ ト。(これから、もう、まっすぐにお帰りになる?)

この「イッキ」というのも、旧薩摩藩以来のことばの一流布例として、あげておかなくてはなりません。

〇インガシカッタドンカラ、……………。

いそがしかったけれども、……………。

〇ナゴゴツヂヤツドンカラ、……………。

泣きたかったけれども、……………。

など、とかくすると、「ドンカラ」を言います。肥前、筑後、肥後あたりにさかんな「バツテン」は、こちらでは聞かれませんが。「ども」に、「から」が付くことは、変と言えば変です。けれども、方言の中での、ことばの育ちかた

には、旧来の文語法流の規則文法からははずれたものが、しばしば見られます。「ども」を受けて、「それだから」と、「どもカラ」を言うのであっても、よいのではないでしょうか。「から」は、そういうことばなのだと思えます。むしろ、私もは、「ドンカラ」などからして、「から」のはたらしの広さを、日本語のじっさいとして知ることができます。自在にも見える方言表現法の実態は、日本語の事実が、じっさいどうありえているかを示すものです。——ことばが、現実にとどのようにか用いられているからには、それに、そうあるべきいわれ、そうあって不当ではない根拠があるにちがいありません。方言上の一表現法に、いろいろの用法分化が見られるばあいにも、それは、そのことばづかいの生きかたのゆたかさを示すものだと考えられます。

この夜とつぎの朝との、この家での調査は、笠沙町での調査の最後をむすぶものになりました。ここまでこぎつけてきて、肩の荷がおりた思いです。聞きたいこと、ふれたいことには、おおかた、しぜんのうちに、聞いたり、ふれたりすることができました。

きょうは、この村から、直通のバスで、鹿児島まで行きます。加世田をへて、バスはいよいよ東に進み、薩摩半島の丘陵を越します。植林の間を抜け出て、くんだり道にかかると、むこうに鹿児島湾がかすんで見えます。平地までおりてからは、アスファルト道をひた走りに走って、バスは鹿児島市にはいります。

上りの汽車に乗りました。二駅すぎて、汽車は、伊集院の駅に着きます。どうしたのか、汽車がなかなか発車しません。駅の人びとが、あわただしく往来します。駅長さんのことばが聞こえてきました。

「イケン シャチ オ。」（どうしたかね。）

これらの筆録を、今回の旅のしめくりにして、やっとの思いで、えんぴつとカードとをおさめました。

## ○ 五島列島

昭和三十七年五月の上、中旬のことです。九州長崎県の五島列島に出かけました。

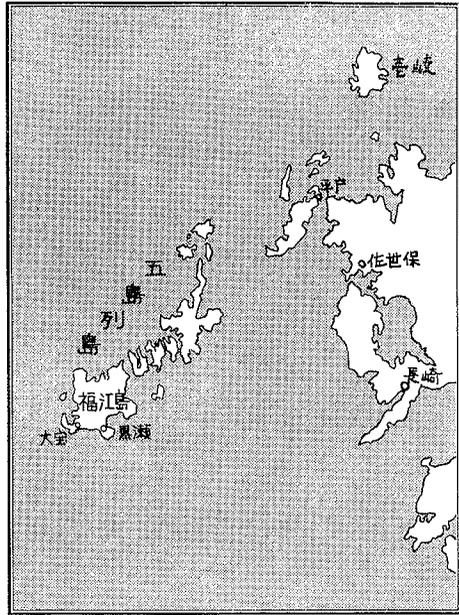
### 相手を見つけること

なかでもおもしろかったのは、五島調査の最後の日です。五島下島（福江島）に福江市というまちがありますが、この福江市内で経験したことです。どこかでいい相手にめぐりあいたいのものと、町をぐるぐる歩きまわりました。福江は、城下町で、古いお屋敷やお屋敷跡が、そこここにあります。そんなところをあちこちしまして、市役所のそばまで来ました。一軒のたばこ屋があります。ふと見ると、おばさんと娘さんがそこにいて、これは、どうもいい、被調査者、のようです。私の調査の相手になってくれる人ではないかな、という気がしました。こういう時の勘は、ふしぎにあたるものです。私は、なんとかして、このたばこ屋さんにはいりたいものだと思います。前を行ったり来たりしました。やがて、思いきってそこにはいりまして、たばこを買います。買いながら、福江の土地のことばのことを、一つ一つ尋ねました。

さいわいなことに、この娘さんは、電話交換局に勤めている人でした。交換手さんです。五島列島のあちらこちら

す。すぐに応じまして、なお、私は、まんじゅうも買いに走ります。みんなで楽しく、たべごとをしました。二時間ぐらい、ここでおじゃまをしたでしょうか。私のねらいとする調査項目は、みんな、談笑の中で、ひととおり、調べることができました。

辞去する時になっても、この人たちは、「おまえはどこものなの?」とか、「どこから来たの?」とかは、いっさい言わないのです。そんなことは問題ではなくて、ただ楽しくあそんだことがよかったのだ、といったような顔つきです。私は、自分で、それではすまないと、いちおう、最後のあいさつをしますと、先方も、なにかと話してくれます。驚いたことに、向かいの家のおばさんも、この娘さんも、じつは、郷土史に興味を持った人の子ども



から聞こえてくる島ことばを、この人は、よく覚えていきます。方言に興味を持っていてる人でしたから、しぜんに、話しあいには本調子になりまして、私の方言調査は、いつとはなく、順調に進行します。娘さんは、気をきかして、向かいの家のおばさん、といっても、三十そこそこの人ですが、その人を招いて来ます。この人がまた、さばけた人で、腰かけて、脚を組んで、からだをゆすりながら、いかにものん気げに話してくれます。やがて、ひもじいということになりまして、そのおばさんが、私に、「おじさん、うどんをとって食べよう。」と言いま

さんだったのです。そして、あとから来た、向かいの家のおばさんも、どうやら、私の用むきを、暗々のうちに理解していたらしいのです。理解していて、そういうことは何も言わないで、くだけた態度をつらぬいてくれたようです。私は、ここで、ずいぶん幸運な目に会いました。

### ナルバンバ

この福江島の西南の端に、大宝<sup>たはほ</sup>という部落があります。この大宝部落で、私は、一週間のあいだ、要地調査をしました。その時に泊まった宿のおばあさんが、別宅で、ひとり暮らしています。「ナル」というおばあさんと、村では、「旅館のナルバンバ」でおおっていました。この人が、おもしろいおばあさんと、年をたずねると、一晚ごとに答えが違うのです。「よくわからない。」といった調子なのです。八十三、四、五のあたりを、いったりきたりします。このおばあさんが、まことに気つぷのいい人で、私のために、いろんな人を集めてくれます。まずは放談会をやってくれるわけです。五月ですけれども、こたつがありました。皆がこたつをかこんで話しをします。その話しは、その時その時のでため話しなんですけれども、それが、いちいち、私には、方言調査のいい機会になりました。この「ナルバンバ」さんは、あまり字の読めない人でしたが、肝ったまの大きい人らしく、方々を旅行しております。いつかは、子どもさんをつれて、大連に行ってきたそうです。その大連旅行の話などは、まことにおもしろくて、みなが大笑いでした。

そういう談笑に時をすごすうちに、夜もふけてしまいます。おばあさんは、ここに泊まれ、旅館よりもここがよろうと言ってくれるのでした。

### 話しの座

おばあさん連中ばかりではなく、おじいさん連中にも、この部落で、だいにしてもらいました。お寺で、おじいさんたちの念仏がある時にも、私は招待されました。念仏のじゅずも、ともに繰り、そのあとでまた、方言の話しも聞かせてもらったのでした。

そこそこの土地に行きますと、今でこそ、ラジオやテレビがあつて、人びとはそれらで楽しんでいますものの、ひと昔まえまでは、そんなに、楽しみ種の種とはありませんでした。みなが寄つて話しあうことが、なんといっても、大きな楽しみだったのであります。そういう話しあいの座では、たとえば、罪のないうそを言うことも、ごあいきょうでした。うそのねうちというものが、そこではたしかにありました。そういつた世界へ、私は、はいつていくのですから、一座の中へ、すぐに引き入れられるのも、じつは、当然のようなことです。何をしに来たのかというようなことは、だれも聞かないで、みなが、まあまあ、さあさあと、さつそくに私をとり入れてくれます。それにしても、はじめのうちは、この男は、いつたいなんでつて、こんなへんぴな土地にやつて来たんだろう。と、いうような気もちも、多少はあるらしいのです。ですが、同じ土地で、幾日もすごしておりますと、土地の人は、私が何を説明しなくても、しぜんに、私の研究目的を理解してくれまます。これは、おそろしいことです。——どういふことになるかといひますと、あんなに熱心に書きつけているのだから、何かたぬになることをしているのだらう。あんなにたくさん紙をつかつて書いているのだから、きつと、何かたぬになることをしているのだらう。と、こう、推察してくれるのです。まことに、おかげさま、というところですよ。

#### うわさと理解

なんといつても、村の生活は、うわさの足の早い生活です。私のようなものが村にはいりましても、そのことが、

すぐに村じゅうへひろがつてしまいます。村のうちの一つの部落から、つぎの部落へ行ってみると、もう、うわさのほ  
うが、先にとどいています。このような、うわさのでんば（伝播）が、理解のでんばとなって、調査者、私は、大い  
に益を受けるのであります。

### 黒瀬という部落

福江島で、南岸の黒瀬という部落をたずねた時のことです。ここにおもう一軒の家を訪ねますと、まったくはじめ  
ての訪問ですけれど、よく来たというわけです。おじさんも、お婆さんも、かわるがわる歓迎のことばを述べてくれ  
まして、私をあたたく迎えてくれます。

こんな調子ですから、たちどころに、私は、自然調査の仕事を始めることができました。家の人は、みな、方言の  
いい話し手です。親切なお婆さんは、〃このつきに来る時には、もうまっすぐにうちへ来て泊まりなさい。〃と言っ  
てくれます。このお婆さんには、男の子が八人、女の子が三人ありました。いちばん上のねえさんをはじめとして、  
子のみなさんが、親おもいだそうです。うらやましい話しを、たくさん、方言まる出しで聞かせてくれました。

### 大宝の子どもたち

一度、子どもさんたちのことで、たいへんびっくりしました。おりしも田植え時で、親たちは、せつせと田んぼに  
出て行きます。子どもさんたちは、子もりにいそがしい時でした。子もりをする、小学校六年生くらいの女の子、四、  
五人に頼みまして、しばらく、私といっしょにあそんでもらいました。お寺の庭に行きました。私は、縁がわに腰か  
けて、ちゃんと書く用意をしております。子どもさんたちは、なにかのことばを思いおこしては、とんで来て、私に  
教えてくれます。それを、私が書きます。子どもさんのほうは、ついでに、その縁がわにひろげてある駄菓子を一っ

つまんで、また行ってあそびます。あそんでいて、ことばを思いおこすと、それをつけにやって来てくれます。ついでに菓子をつたべます。そのうちに、子どもさんたちの気が変わりました。縁がわにすわりこんで菓子をたべることになりました。おんぶしている子を、みな、おろします。よちよち歩き、男の子、女の子が、お寺の縁がわで、それこそあぶなつかしく、あちこちします。中のひとりの坊やが、あつというまに、その縁がわから落ちました。

「落ちたっ！」

と、どの子かと言うのと同時に、私は、思わず目を固く閉じました。ああ、たいへんなことになった。もう、方言研究も、これでおしまいだ。というふうな気になったのです。

みんなでかけつけてみますと、これはまた驚いたことに、坊やは、かすりきず一つつけていません。とかくするうちに、そのへんをよちよちと歩きはじめます。私は、その子をぐつと抱きかかえて、ほおずりをしました。

その晩、坊やへのおみやげの菓子を携えて、おかあさんのところへ、おことわりに行きました。ところが、おかあさんは、へえ？、といったふうで、何も知っていません。やあ、これは私が出すぎたことを申して来たでしょうか。じつは、きょう、こうこうでございました。と、おわびしますと、おかあさんは慣れたもので、よく落ちるんです。と言ってくれます。坊やは、おかあさんに抱かれて、私に、にこにこ笑いかけてくれるではありませんか。私は、ほっとするやら、また、子もりのおねえちゃんに申しわけないと思うやらでした。

ところで、これが縁になりました、そのおかあさんにもまた、土地のことばを、いろいろに教えてもらうことになりました。その晩だけではなくて、あくる日も、そこへおじゃましました。

おねえちゃんに坊やさん。もう、りつぱなおとなになっていてくださるでしょう。あの時はほんとうにありがとう

いじまりました。

## ○ 雪の峠

耶馬溪を過ぎて、奥へのぼって行きます。昭和二十四年二月はじめのことです。

下毛郡から日田郡に越える峠にさしかかります。日も暮れがた、むこうをながめると、まことに小さな、小学校の分校があります。そこを訪ねました。三十歳ぐらいの男の先生がいます。

「私は、絵をかくのが好きで、希望して、この分校に来ました。ここで、子どもたちと勉強しながら、絵をかいてみると、なんの不足も覚えません。」

またしても、私は、奥まった土地の分校で、すぐれた先生に出会いました。(、こういうのが、ほんとうの、「大<sup>学</sup>」の先生ではないのだろうか。、と思ったことです。)

絵を愛する先生が、絵と同じように、ことばを愛しつつ、方言の一ことば一ことばを教えてくださいました。こんな長文句も教えてくださいました。

オリゲン アンチャンガ カワバテー イツチ(おれのうちのにいちゃん<sup>が</sup>、川ばたへ行って)、ピキタロ ツカ  
メチ ビッシヤゲタ(かえるをつかまえて、ペし<sup>ゃん</sup>こになった)。ソーシチ ウチー ケーツチ(そうして、

うちへ帰って）、チエオ アローチ チエヌグイデ フイーチ（手を洗って、手ぬぐいでふいて）、ザニアガ  
ツタ（座にあがった）。オツカンガ ママ クエチ ユータ（母が、ご飯を食べろと言った）。ナルテンノ ヨ  
クイー ウメタ（南天の横へうずめた）。

この夜、私と、もうひとりのつれとは、この先生のお世話で、近くの梶原さんのお宅に泊ってもらいます。そのうちに行って、客用の玄関から座敷へ。その玄関口は、「カベナシ」と言われていました。

この夜、先生のきもいりで、遅くまで、方言の座談会がもよおされました。

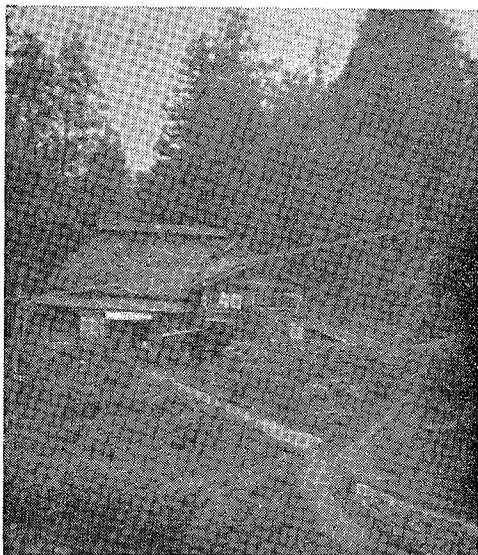
明けての朝、障子を開くと、表はまったくの銀世界です。なんと深い雪でしょう。

朝食をいただいて、ここを発ちます。分校までもどって、やがて、日田市への道をくだります。深い雪の峠でした。分校の先生が、しばらく道案内をしてくれます。

前方、はるか低く、日田市の町が見えてきました。〃「日田の底霧ソコギリ」といって、ここからは、霧のけしきがすばらしいんですよ。」と先生が説明してくれます。深い雪にくつをうばわれながら、「ヒタノソコギリ」と、カードに書きます。

以後、この名が忘れられません。雪の峠で、先生に教えてもらったことばです。

# 北の国に分け入る



新潟県・大島村

## ○ 東北・関東・北陸

### 九州と東北

国の西南、九州の、ことにその南部地方に対しては、国の東北、奥羽地方が、日本語の方言での、とりわけ重要な地域と見られます。方言研究上、まず、九州と東北とが、問題の地域としてうかびあがってきます。

柳田国男先生の、言語・民俗に関する多くのご研究にあっても、九州と東北とは、二つの大きな注意地域でした。私は、第一には、九州の深みに分け入ることを考え、第二には、東北の深みに分け入ることを考えました。私の、東北への関心も、一種の必然的なものだったのです。

### 昭和十四年八月

この年、はじめて、東北への旅を試みました。しかも、そのはじめての東北入りに、まず、北陸路をたどったのです。北陸から東北へ。東北の果てでは、陸奥の二つの半島をさぐり、やがて、太平洋がわを南下して、関東にもどりました。

そのごに、幾度か東北の旅を試みて、私は、はじめに右のコースの東北旅行をしたのはよかったと思うのです。東北へのはいりかたとして、北陸からの道をまずえらんだのは、上出来でした。

北陸の越後は、奥羽のことばをじかに受けていて、中部地方には在っても、関東に直統する中部、表日本がわとは、おもむきが違っています。越後のおもむきは、東北系のおもむきです。奥羽からの裏日本脈とでも言うべきものが、越後をすぎて、なお、西にたどられます。これが、はるかにのびて、山陰に通じます。出雲・隠岐は、そういう裏日本脈の連続線上の、大きな峰です。ついでながら、この裏日本脈は、さらに九州の西南へと、地底のつながりを見せています。その、九州西南のようすは、薩隅の島じまにたどることができ、かつ、奄美諸島の音韻の状態は、薩摩半島南部のそれとともに、出雲地方の音韻の状態に通うものを見せています。

東北にはいるのに、右に述べたような、北陸道からのはいりかたをしたのは、まさに合理的だったと言えましよう。

東北から太平洋がわを関東に南下しますと、関東ことばが、奥羽地方のことばの系統のもとにあることがよくわかります。(はじめて東北弁に接して、理解の困難を覚えても、しだいに南下して、関東地方にはいりますと、肩がかるくなったように、ことばがわかりやすくなります。)千葉県下の南端まで、東北系のことばは続いているのではないのでしょうか。こういう状態の中で、東京語も、東北弁の並流の地位に立っていると思われまます。このことを、私は、右の最初の旅の時、痛感しました。「東国地方」と称して、関東と奥羽とをひとくりにすることの妥当なことも、つくづくと思ったことです。さてその東国地方の東国方言の中に位する関東方言の続きが、東海東山道を西に、山梨県下・長野県下・静岡県下へと、よくたどられます。

### はじめての経験

昭和十四年八月のこの旅は、私どもにとって、まったくはじめての、北陸・東北の旅でした。(妻といっしょでし

た。そので、幾度となく、この地方の旅をしてきましたが、方言の一研究者として、「北の国に分け入っ」た、第一回のこの旅は、とりわけ、思い出の深いものです。ここには、私どもはじめての経験が、どんなものであったかを、報告することにしませう。

## ○ 北陸路をたどって

北陸路にはいつて、何も知らなかった私どもが、どれだけの経験をし得たでしょうか。

じつは、この時、はじめて、方言調査に妻を同行しました。これには、一つの、わたくしの理由があります。この年四月、私どもは、はじめての子を失いました。その名は、方三まさみづでした。不幸にして、百日ぜきにかかり、急性肺炎となり、この世を去ることになりました。私は、がんぜない子に、あえて方三と名をつけ、早くも方言の研究者を期待した非を、深く思いわずらいました。それにしても、改めて勇氣を出して、研究への道に立たなくてはなりません。回生の意気に似たものをもって、私は、傷心の妻をつれ、この旅に発ちました。

### 金沢弁

京都駅を、朝、発って、近江、米原でひと調査をすませると、北陸での最初の目的地、金沢に向かいます。夕がた、ようやく、金沢駅に着きました。駅を出て、もはや電灯のついた町をしばらく歩くと、新保屋という旅館が見つかり

ました。

駅前などの旅館では、調査にもつてこいの人を見つけることが、容易ではありません。どれだけか、町の中へはいったあたりで、土地っ子の宿をさがすのがよいと思います。——ようすで見当をつけてはいると、思うつぼというようなこともあります。宿屋を見て歩くのも、まずは、方言を見て歩くようなものです。（調査に応じてくれる相手を求めて、宿のたたずまいを見て歩くのです。）

新保屋。この屋号に引かれました。——屋号などというのも、見のがせない着眼点です。はたして、ぶこつな番頭さんが出てきました。用むきをすこし言つて、宿泊を頼みますと、*「よろしゅうございます。私は、この粟が崎のはえぬきのものですから。」*と、如才がありません。

番頭さんは、珍客が来たとばかり、喜んでくれます。こちらはまことにありがたいことです。ふろと夕食がすむと、番頭さんが、夕すずみのかっこうで、部屋に来てくれました。私は、冗談にまぎらわせて、番頭さんの身もとを聞きます。さつき、はえぬきと言つてはくれましたが、どんなはえぬきぶりか、わかりません。そこを、よくたしかめなくてはなりません。

としは五十歳とのことでした。

名まえを呼ぶのには、「喜兵衛サ！」というように言う、とのこと。これはおもしろいぞと、思わず調査のりかかります。「おはよう。」は、「オヒンナリ。」だということです。はじめて聞く珍しいことばです。古いことばを聞くことができるものだ、心はずみみます。「おしまいなさいましたか。」のあいさつは、

○オシマイ アスバシタ キー。



聞こえました。「ル」が、「リ」に近いのです。とかく、この人の発音に、舌が短いのかと思わせるようなところがあり、あずきでもはさんでいるのかと思わせるようなところがあります。こうした発音に耳をとめつつ、私は、山陰地方の音韻にも思いをはせます。山陰出雲などの中舌母音の発音につながるものが、ここに、どれほどか聞かれるのでした。

そう言えば、出雲地方にさかんな「シャル・サツシャル」を、こちらでも言います。

○ウチー イラツシヤラン カ。

○ウチー イラツシヤイ。

「シヤイ」は、「シエイ」に近いほどの発音です。

ここで、「あそばしたか」の「アスバシタキー」が注目をひきます。

○アンヤツンジミス。

ありがとうぞんじます。△帰っていく時のあいさつにも、こう言う。▽

これにも、「しぞんじます」が、「ツンジミス」となっています。「さむい、ねえ。」を、「サプイニー。」と言うのも、あわせて注意されます。「ある、ねえ。」と答えてくれたことばは、「アリ<sup>[i]</sup>ネー。」のように

○オマイサン ドコイ イキマツシヤル。

と、「マツシヤル」の言いかたもしています。

○コレ クーマツシヤラン カ。

これをたべなさいませんか。

の、「マツシヤラン カ」とともに、

○コレ クーマツセイ。

これをたべなさい。

の、「マツセイ」の言いかたがなされました。この「マツセイ」は、「マツシヤイ」の変じたものでありましょう。「マツセイ」は、当地方で、「マツシ」ともなっています。「マツシ」から「マシ」へは、ほんのすこしの移りゆきです。金沢の「マシ」、「マツシ」は、「マツシヤイ」起源のものと解されます。さて、「マツシヤイ」、「マツシヤル」は、「シヤイ」「シヤル」が、「マス」の下に來ています。出雲などだと、「シヤル」の下に、「マス」が來るのが普通ですのに、ここでは、その反対のものが見られます。(もとは、「マイラツシヤル」でしょう。ですが、今の「マツシヤル」そのものからは、「マス」、「シヤル」を見わけることができます。)

「いるのか、いないのか」を、「オルガカ、オランガカ」と言います。「これは、わたしのだ。」は、「コリヤワシノガヤザー。」です。加賀からして、この種の「ガ」が、しきりに聞かれることとなります。これを北にたどりません。

能登へ

能登半島を輪島町（今は輪島市）まで北上します。順序として、まず、半島の首どころの千路駅に下車します。ちよど日曜日でした。

いそぎ足で、小学校を訪ねますと、加賀から来たと言われる若い女性の先生が、日直でした。この先生に、方言調査の旅行のことを話しましたが、案に相違して、にわかには理解してくれませんでした。が、そうしたなかでも、

「ワカラ<sup>ン</sup>ガ<sup>レ</sup>デス。」

などということばが出ます。例の「ガ」だぞと思って、私は、心にこれを覚えこみます。

「ソ<sup>レ</sup>シテ<sup>ハ</sup>ズ<sup>ツ</sup>トアルイテ<sup>ハ</sup>オイデマス<sup>ケ</sup>。」

先生が、こういうアクセントで聞いてくれます。

「イチジカンク<sup>レ</sup>ライジャ<sup>ニ</sup>ナイカシラン。」

とも言ってくれます。

この席では、はじめから用むきを言いつぎて、どうもうまくいきませんでした、先生は、方言のことに無関心だったのです。とかくして、一軒のうちを心配してもらうことができませんでした。

「カンバンノ<sup>カ</sup>カッテ<sup>ハ</sup>アルガニ。」（看板のかかつてあるガニ。）

そのうちを訪ねました。「ガニ」を口ずさみながら、教えられた道をたどります。

やっと、そのうちが見つかりました。洗い張り屋さんです。ラムネなども売っています。五十歳前後のおじさんが、衣類のときものをしています。やせがたの、頭のすこしはげたおじさんでした。

「わたしどもは、ちよっと、このへんのことばを聞かせてもらいに来たんですけれど。」

と言うと、おじさんは、にこにこして、

「まあ、お上がりなさい。」

と言ってくれます。ここでは、直接法の頼みかたがよかったようです。おじさんは、ははあ、方言を聞きに来たのだな。と、すぐにのみこんでくれたようです。

理解のありそうな人のところなら、用件を早くきり出したほうがよいでしょう。私もは、ともかく旅のもので。先方が、はじめ、何をやるものが来たのだろう。といぶかるのは当然です。そこで、相手に、長くは、無用の疑問を持たせないようにするのがよいと思います。

仕事場の板の間にあがれと言ってくれますから、おじさんの仕事ぶりを目で追いながら、その板の間に腰かけさせてもらいます。

「この土地は、何という所ですか。」と聞くと、「石川県 ハクイガン コシジノムラ アザ チジ。」と答えてくれます。方言の話しは、むこうからさきに始めてくれました。

「このへんでは、母おやのことを「ヤーヤ」、父おやのことを「チャーチャ」と言います。」

とのこと。先方が進んで話しをしてくれるばあい、よく、こんなに、父・母の称呼などが出てきます。それから、その土地のことばの、定評めいたもののある、ひどいもの、変わったものが、とり出されがちです。

「石川県デモ、とくべつ、ワカラン コトバオ ツコー トコロヤサカイ。」

と、この人は言います。「いちばんわかりにくいのは、名古屋ことばだ。都会としては、いちばん下品だと思う。」とか、「能登のことばは、昔だったら、東京語とも京都語とも違う。どっちにも似ていない。能登のことばは特別

だ。「とか、話してくれます。(人びとは、こうして、地方語比較のあたまでも持っています。この人が、方言を聞きに来た私を、最初からほほえんで受け入れたのももつともです。

さつき、「ツコー、トコロ」(つかう所)とありました。「ツカウ」と言わないで、「ツコー」と言っています。広島で、能登ご出身の中国文学者、斯波六郎先生から、ツコー(買う)つもりだったので、「ツコー」というように言いかたを、かねがねお聞きしています。私はこれを、先生の特別な文語口調かと思っていました。ところが、ここに来てみると、土地つ子が、「ツカウ」ではなくて、「ツコー」と言っています。そこで、斯波先生のも、お国ことばなのだなど気づいたわけです。先生は、私もがこれから行く輪島町のかたです。(すこし西に行った海岸に、皆月というところがあります、そこのかたです。)先生には、能登半島のことばのあらましを教えていただきました。また、宇出津町<sup>ウセツ</sup>在住の、先生の古いお友だちに紹介してもらいました。

この洗い張り屋さんの発音では、「四、五人」が、「スゴニン」と聞こえます。「もう、雨が降るかもしれん。」というのは、「モー アメア フルモ スレンジャ。」です。「シ」が、「ス」に近く聞こえます。やはり、このへんは、中舌母音のある奥羽地方・出雲地方に糸を引くのでしょうか。べつに、「ダイコバシゲナ」(イヤマシゲナ)(おおげさな)という形容動詞を、このおじさんが教えてくれました。これが、このの風がわりなことばだそうです。この「ダイコバシゲナ」の「シ」がまた、[ʃ]と聞こえました。「こっち 来い。」は、「コッチ コイ。」で[tʃ]した。この所で、とうとう出雲的なものをたしかめた。というように、私は、当時の調査カードに、感激をもったためています。

変わったことばをつらねた言いぐさである、つぎのようなものも、教えてもらいました。「ノトノ ナンモ ビ

「ナンモヤマシゲナ。」。能登の「ナンモ」は、「何も」で、「これはあなたのですか。」と聞かれて、違ふ時は、「ナンモヤ。」と言います。「ビッチャ」はわかりにくいことですが、「別じゃ。」ではないでしょうか。「そうではない。」という時に、これがつかわれます。「白いガをほしいという心のうちに、赤いガを差し向けられた時、「ビッチャー。」と言う。「とのことでした。」

この部落以外の、そこちらの話しも、断片的には、たくさん出てきました。能登は、どうしても、くわしくあつてみなくてはならないところだと思われました。

乗る汽車の時間もせまりましたので、すべてを心からふり落とすようにして、用意の調査項目を追うことに努めます。先方が万事わかつていくるので、調査は、手ばやく進めることができました。能登がかりました。それではと、いよいよ帰りたくをして、くりかえしお礼を言うと、

「フシギナ ゴエンデシタ ネー。」

と言ってくれました。

駅に出て、前の邑知潟のどんよりとした水をながめながら、今のおわりのおじさんのことばを、くりかえし言ってみます。ほんとはふしぎな縁でした。突然、出かけて、ひとしきりさわがせて、また、あわただしく立ち去るので、すから、じつに失礼な訪問です。それがいつさい許されたのですから、私どもとしては、まったく、感謝しなくてはならないご縁です。人と人とのめぐりあわせというものを、しみじみと思わせられました。

方言の旅では、どこに縁を結ばせてもらうかもしれません。そのつど受ける、人のあつい情は、けっして無にしてはならないと、心に誓うのです。いよいよ精を出さなくてはなりません。ところで、自分のこの仕事は、学問の名に

値するものになって、世の中の役に立つのは、いつのことでしょうか。その道は、今からの奥州への旅路とともに、いよいよはるかであります。

汽車は輪島に向かいます。まだ、日のあるうちに、輪島の駅に着きました。暑い、人どおりもない町です。これが、昔、地理で習ったぬりものの町かと思って、町なみを、あちこちたどり歩いてみます。そのうちに、きれいな町どおりに出ました。静かだなあと思いました。こうし（格子）の新しい、一軒の宿屋が見つかりました。そこにはいって、宿泊を頼みます。二階へあがると、部屋は、夕日、ま受けでしたが、いくらか風もあつて、古いカーテンがゆれていました。年とったお手つだいさんが、着がえを持って来てくれます。とたんに、この人にすがつて調査をしようという気になりました。すこし話しかけると、「このおくさんが、よい話し手です。」と教えてくれます。

やがて、あがつてきた三十七、八歳の、ここのおかみさんは、見るからに病氣あがりのようすで、聞いてみると、寝たり起きたりの身とのことでした。しかし、私どもの用事が方言調査だと知ると、かくべつに興味を示してくれて、しばらくの間というものは、私どものために、輪島ことばを語りつづけてくれたのです。

この人は、じつに、ことばに敏感な人でした。その人が、土地の上流としての気ぐらいをもって、上流ではこうだが、下流ではこう言うなどと、こまかに教えてくれます。自分一個の感情による、ことばへの好悪もあつたようですが、それにしても、敬卑の区別など、くわしく語ってくれて、たいへん有益でした。方言の古脈地帯としての能登半島の一重要地点、輪島で、しだいに衰退していく土地ことばの（——ことにその敬語法の）衰退過程を、身をもって知らせてくれたのが、このおかみさんでした。私は、ひとりの特色ある語り手として、今も、この人のことを、印象

深く記憶しています。

お手つだいさんとふたりで、方言の座談をしてもくれました。

### 越中泊町

越中では、東に寄って、なるべく越後近い所に下車してみることにしました。ついに、いちばん東の端の泊駅で下車します。

ごを着た人が歩いていきます。これが、北陸の風俗でしょうか。しばしば見かけます。駅を出て、すこし歩いてみました。晩がたの泊町は、ひやっとした野っ原で、まるで田んぼの中の散歩です。ほうほうを歩いたあげく、また駅前にもどつて、長野屋という宿屋に泊まりました。おばさんひとりかやっている宿です。この人は、五十六、七歳にもなりましょうか。土地っ子です。〃字は、一字も知らん。〃ナンニモ 知りマシネー。〃とくりかえして言います。そのくせ、ことばは、いたってはきはきとしています。字を知らないことと、口頭語を自由にしゃべることとは、まったく別です。

このおばさんから、この泊のことばを聞くことにします。ここでも、

○サー。スコシ ヤスマッシャイ。

さあ、すこしお休みなさい。

「ヤスマッシエー」「ヤスンデ イカッシエー」、

○ペンキョ サッシャイ。

○オスシ タベッシャル カ。

などと、「シヤル・サッシヤル」ことばをつかっています。〃金沢とことと、ことばが、よく似てると思う。能登は、あれで、サベリカタが、なんやらすこし違う。〃とのことです。このことと、〃越後のともすこし違う〃とのことです。

それにしても、いわゆる東北弁風のなまりは、ここにも明らかに見えて、さきの、「スコシ」「オスシ」の「シ」も [i] です。

○コニヤ アメア フリマシヨ。

の「フリ」は、「フル」と聞こえます。「しません」は、「スマセン」、[i] が [i] であるのが、いちばん耳につきます。ごきを着て歩くことを話しに出したら、

〃アレ、マコトニ エー モンデス。〃

とのことでした。「エーモン」(いいもの)の「エー」は、「イー」に近く聞こえました。

わが国の東西両方言の境界線は、この東の親不知から、遠州の浜名湖にかけて引かれるとされています。越中の東の端、この泊町なども、東西両方言の違いという点では、注意すべき土地でしょう。「なにになににジャ。」の「ダ」「ジャ」の違いは、東西両方言の違いの、一つのしるしとされていますが、この泊町では、「ダ」でも「ジャ」でもなくて、「デア」です。「これは、おまえがしたのだろう。」は、

○コレ オマエガ シタガデアロー。

と言います。「今夜、雨が降るだろうか。」は、

○コンニヤ アメア フルデアローカ。

です。「どうした？」と聞く時は、

○ド シタガデア。

と言います。「これはおれのだ。」は、

○コリヤ オラノガデア。

です。越中は、この所だけにかぎりません。飛騨ざかいのほうでも、「デア」を聞きます。ほうほうで言うのでしょう。そして、これはまた、東北地方でも聞くことができます。つぎに、東部方言での「どうどうしナカタ。」は、西部方言で、「せナンダ」などと言いますが、ここでは、その両方が、

○ウチ<sup>[tʃi]</sup>ノ<sup>[tʃi]</sup> デーサンニ アワナンダ カ。

○ウチ<sup>[tʃi]</sup>ノ<sup>[tʃi]</sup> デーサンニ アワナカタデシヨカ。

のように並びおこなわれています。とはいももの、よい言いかた、改まった言いかたの時には、「ナカタ」が出て、普通の言いかたの時には、「ナンダ」が出るので、「ナンダ」の方が、まずは、より日常的な言いかたかと思われまます。地つきの「シャル」ことばとともに、

○…………… 会ワッシヤラナンダ カ。

と、「ナンダ」が出ています。どちらかというところでは、やはり、関西系のことばが勝っているのでしょうか。そうかとおもうと、アクセントは、よほど関東的になっています。

いずれにしても、このあたりは、東西両方言の違いという点で、おもしろい所です。この所に、古い言いかたも残っていて、

○ソ<sup>ン</sup>デ<sup>ソ</sup>コ<sup>イ</sup> 行<sup>ク</sup>。

などというのがあります。「手紙を読むものはいないし、……………」。「というのを、

○ヨ<sup>ム</sup> モ<sup>ン</sup>ナ、オ<sup>ラ</sup>ン<sup>シ</sup>、……………」。

と言っています。また、「ごはんはすんだかい？」は、

○ゴ<sup>ハ</sup>ン<sup>ナ</sup> ス<sup>ン</sup>ダ カ<sup>イ</sup>。

です。辞去のあいさつで、帰るものが、

○サ<sup>ー</sup> 行<sup>キ</sup>マ<sup>ス</sup>。

と言っています。もっとくだけでは、

○ハ<sup>ー</sup> モ<sup>ー</sup> 行<sup>ク</sup> ワ<sup>ー</sup>。

と言っています。そぼくな、昔のことばを、そのまま聞く思いがします。

### 巡査さんと宿屋

越後からは、いよいよ、東北系の発音を聞くのに、力を入れます。なにぶん、はじめての旅なので、聞くひとことばひとことばが、身にしみます。越後では、中越の平地部、中蒲原郡小須戸町矢代田で、用意の調査項目についての仕事をすることができました。

羽越線で、山形県にはいろうとする午後、越後、新津駅で、待ちあわせ時間のあるままに、とっさに思いついて、駅前の交番をたずねました。調べるのが仕事の人に、ちよつくりことばを聞くのは、どんなものだろうと、ためしものつもりで出かけたのです。あいそのよい巡査さんでした。転勤であちこちしているせいか、方言には興味を持って

るらしく、にこにこむかえてくれました。遠来の私を、すこしもいぶからないうで、楽しそうに話してくれました。

越中泊町では、じつは、臨検にいました。臨検というのは、巡査さんが宿に調べに来ることです。それまでも経験したことです。土地の宿屋に泊まっていますと、ときに臨検があります。へんびな土地に泊まった時などは、きまったように臨検がありました。そういう時、私は、どうして、こうすぐに、自分のここに泊まっていることがわかるのだろうか、ふしぎに思ったものです。だんだん宿の人から聞いてみますと、宿屋では、その晩のうちに、宿泊人名簿を警察に届けるのだそうです。私が、越中泊町といったような、広島からは遠く離れた所で宿に着きますと、巡査さんは、広島の方のものが、なんでこんな遠い所へ来たのだろうかといぶかります。そこで、臨検となります。すぐに駆けつけて来るのです。さて、泊町でも、巡査さんは、私の生年月日から問いはじめました。答えると、それを、宿帳につけて来るとあるのと比べます。年齢はと聞かれて、年を言うと、念のためか、指を折って計算します。用むきを聞かれて、方言調査と答えると、これがまた、わかってもええません。土地のことは聞きに来ましたとも答えてみますが、なかなかのみこんでもええせん。(いつでも思うことなのですが、人にいっぺんにわかってもらえるように、方言調査の用件と目的とを説明するのは、まことにむずかしいことです。)

「研究のためです。勉強にきました。」と言うと、先方は、こちらの、いかにも貧相な書生旅行の風体に、目をすえて、かえって怪しみます。——いつかの夏のことでした。東北の旅をおえて、東京の柳田国男先生のお宅までたどりつきますと、玄関にお出くだされた先生が、いきなり、「きみ、そんなかつこうで、宿屋が泊めてくれるかね。」とおっしゃいました。柳田先生の、あの、いつもの、なんのとつくりもいもないご慈愛のおことばでした。

宿にどう受け入れられるか、宿にことわられはしないか、これは、方言旅行の私が、いつも興味をもって味わう問

題です。宿にことわられることも、私の楽しい方言旅行の、だいじな一ページになります。そういえば、信州木崎湖畔でのこと、日ぐれにたずねた、大きな平屋の旅館で、宿泊をことわられました。ガランとした感じの宿だったのに、満員ですからとのこと。出て来た人は、その習慣どおりに、私の風体をさっと見てとったかもしれません。ことわられて、湖岸どおりの商人宿（方言宿！）に行くと、ここでは、予想どおりに歓迎されました。宿のむすこさんたち、ふたり兄弟が、私を、宿の小舟に乗せてくれて、木崎湖を思うさまこぎまわってくれました。方言調査は、暗くなるまで、湖上でやるという趣向が持てました。部屋に帰って、どんぶりで夕飯をいただく、急いで、湖畔反対側の学者村という所に出かけます。宿の人が、さっそくに自転車を用意してくれました。さきほどことわられた旅館の前を通って、湖のむこうがわに出、里を離れて山すそを行くと、道の左おかに、幾軒かの、バラック建ての小家があります。ここで、小林英夫先生をお訪ねしました。楽しい思い出です。いろいろとお導きにあずかって、おいただきますと、先生は、その下までと、見おくってくださいます。ふたりで、湖畔までおりた時には、おりしも、月が湖上に光を映していて、なんともいえぬよいけしきでした。そぞろ歩きのうちには、静かな調子で語ってくださいるおことばが、ことさらに身にしみました。あの夜のことを忘れることはできません。

さて、新津の駅前交番の話ですが、こんなに気もちよく受け入れられると、泊町の宿で臨検されたことなどは忘れてしまいます。私は、巡査さんに、「お気のどく」を意味することばから質問を始めました。というのは、さきの、中越、矢代田の調査で、「すまないが」、「お気のどくだけでも」という時に、

キノロク アルモ

とともに、

アンマ | シュシ(シユ)ラルム

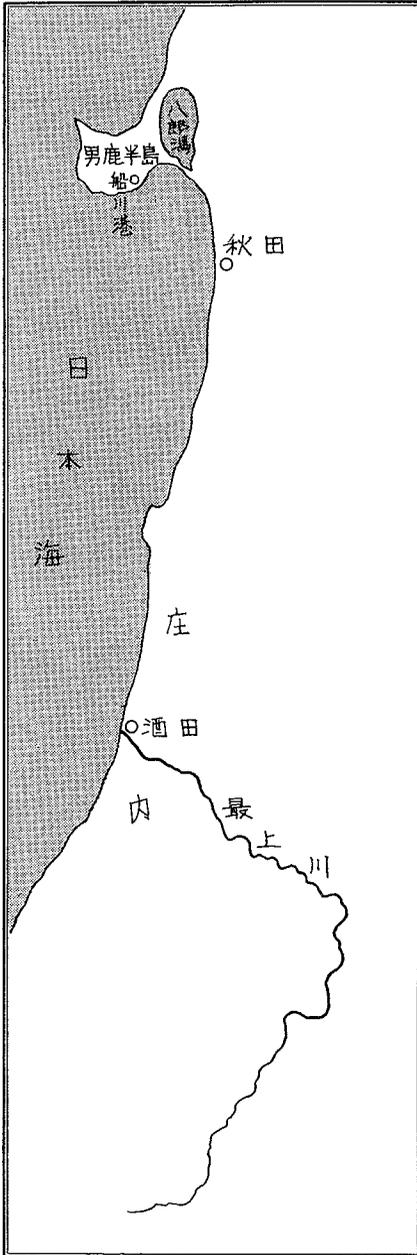
とあったのが、何のことだか、さっぱりわからなかったからです。道みち、人に聞いてもきたのですが、わかりませんでした。〃かねての疑問ですが、〃と、巡査さんにたずねてみました。

ここで、すぐ明らかになったことですが、「ラルム」は、「だども」(だけれども)でした。そういえば、越後では、ダ行音をラ行音に言うことが、多いありさまです。「おそまつでございました。」も、「オソマツレ、ゴザエマシタ。」と言っています。では「シュシ(シユ)」は何かということになりました。巡査さんが、やって来たもうひとりの巡査さんと相談をします。「しゅうち(羞恥)」ではなからうかというのです。そう言われてすぐに気づきました。「シュシ」は、「笑止」だったのです。「シヨーシ」が、<sup>[ü]</sup><sub>[i]</sub>と発音されていたのでした。以前、私は、ある名家が、その弔辞の中で、「笑止千万」ということばをつかったというのを聞きました。弔辞に、「笑止」とはけしからんと、非難する人もあったとのことですが、このことばをつかった人は、「笑止」の語に関する知識をもって、これをつかったと察せられます。方言に、「お気のどくの」の意味で、「笑止」ということばをつかっているのは、名家の「笑止」用法に照らしてみても、もつともなことだと思われるのであります。東北地方には、「シヨーシ」という形容詞もできています。

## ○ 奥羽の日本海がわ

庄内弁

山形県の西北部、庄内地方の、いわゆる庄内弁を聞くことにします。庄内弁は、もう、きつすいの奥羽弁です。庄内弁！ 発音を聞きとるのに難渋します。いろいろなばあいには、濁音化の現象が見られますが、その実態がなか



なかつかまえられません。はつきりと濁るものは、まず、それとしてわかりますが、そうまでは濁らなくて、よわく、あるいは、わずかに濁るものが、聞いて聞きとりにくいのです。

○シエツゲダ　ゴド　スンナ。

そんなことをするな。

などですと、濁音化した「ゴド」(こと)は、すぐわかるのですが、「シエツゲダ」の、半分ほど濁音化するのが、なかなかとらえられません。ものはまさに、半濁音と言ってもよいものでしょう。こんどこそは聞きのがさないぞ、と、緊張して聞き耳を立てていますが、また、聞きのがします。同席の妻にそつと注意されては、濁点一つを打つしまつです。「こと」は、いつでも「ゴド」と出ることかと思っていると、また、「ゴド」の程度にも聞こえてきます。すべて、この濁りかたには、ゆとりとはばがあつて、自在にいくようです。かならずしも、きちつとはしていかないようです。聞くのに、まことに神経をつかいます。自分は、聞く耳を持たないのかしら。と、幾度か悲観もしました。ことばの声を聞くのに、こんなにづらい思いをしたのは、この時がはじめてです。——とはいふものの、方言の調査といえ、じつは、しょっちゅう、このような困難を味わつていなくてはならない仕事です。この時、困難をひとしお感じたのは、それだけに、まだ、調査の経験が浅かつたというわけです。

それにしても、この時、もう一つ痛感したことがあります。音声に対しては、やっぱり、女性のほうが敏感なのかな。と、ということ。方言調査に女性の参加がなかったら、むずかしい発音の地方での仕事は、ものになりにくいのではないかな。と、思つたりもしたことです。

○ソゲ | イツペー | キタラ | アヅガロー | チャ。

そんなにいっぱい着たら暑かろう。

の「アヅガロー」の「ガ」が、やはり半濁音でした。

右の、「キタラ」の「キ」は、[kci]です。出雲地方のと同じ発音です。なお、庄内弁で、「まま 食え。」は、

○ママ フエー。

と言います。この「フエー」も、出雲地方のと同じ発音です。

### 船川港

秋田県にはいって、男鹿半島の船川港に行きます。八郎潟を見わたし、寒風山をながめて、船川の駅に着くと、すっかり方言の土地にはいったという、おちついた気分になることができました。秋田駅からこの支線に乗りこんでからは、男鹿半島へ帰る人びととひざつき合わせた、狭い汽車だったので、よけいにじっくりとした船川入りになったのでしよう。

その土地にはいることができたという安心・自信のようなものを得ると、しぜん、調査にあぶらがのります。それに反して、ふぐあいな気もちがおこると、気おくれがして、その土地の人に話しかけるのにも、ことばがひるみます。質問は、とってつけたような問になります。われながら、まずい感じですよ。

めざす土地へは、何かのきっかけを得て、つごうよくはいりたいものです。いわば、よいコンディションのもので、そこそこへはいつていききたいものです。コンディションがよければ、しぜんによい相手も見つかります。

船川の駅前に出ると、初老かと思われるほどの、実直なおじさんが、私どもを待っていたかのように寄って来て、

うちに泊まれとすすめてくれました。その夜と、翌日の午前と、この、実直な、宿の主人は、たつぷりと、私どもに、船川弁を語って聞かせたのでした。

○ガツコ　ハヤフェ。

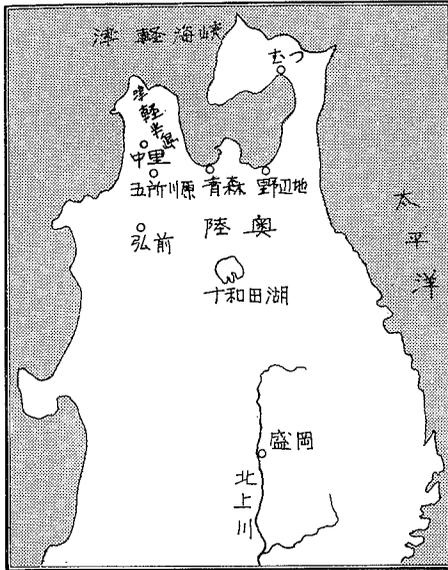
つげものを切れ。

というようなことばづかいに驚いたことは、今も、はっきりと思い出すことができます。

## ○津軽半島へ

日本海ぞいに走る汽車に乗って、青森県にはいります。陸奥の国です。どこかの駅で、弘前市の小学校の子たちが、たくさん乗って来ました。幾日かの水泳生活をおえての帰りだそうです。向かいがわの席にすわった、六年生の女子二人に、いろいろと話しを聞きます。その子たちは、私どもが尋ねるのに答えて、弘前ことばをじょうずに教えてください。はきはきとしたよい子たちです。〃在郷ザイゴウの衆シュウは、こう言います。〃などと、この子たちは、喜んで、私どもにしゃべってくれたのでした。津軽平野の五所川原駅で、別れて、私どもは下車します。——津軽半島への軽便鉄道に乗ります。

終点、中里まで行く、この小さな汽車は、稲のよく実った広い平野を、しだいに北へ進んでいきます。こむほどで



もない乗客が、ひと駅ごとにすくなくなっていくます。ようやく、日も暮れようとして、私どもの気分も、しぜんにおちついてきます。黙って乗っていても、車中の人びとに話しかけているような気もちです。

ひとりのおじいさんに話しかけてみました。勇気を出してあたってみました。津軽半島のことばの勉強をするには、もう、ここから、地がためをしていかなくはなりません。稲のよくできていることなどを話題にしてみました。おじいさんは、

○コトシモ イー イネダ デア。

と言います。こちらの言うことは、たいていわかってくれて、

「アーアー。ンダンダ。」（うんうん。 そうだ、 そうだ。）

と答えてくれますが、こちらは、おじいさんの言うことが、すぐにはなかなかのみこめません。

「シロシマダ デバ。 コノ フト。」（広島だつてさ。

この人たちは。）

と、おじいさんは、つれの人たちに話しています。先方同士の普通の会話は、私どもが、いくら聞き耳を立てても、ほとんど聞きとることができません。ここで、九州の南のことを思い出しました。あちらには、もはや、いざさかの親し

みも覚えることができるようになったつもりです。それに比べると、こちらは、今、はじめてのことで、まったくむずかしいことばだなあと思息するばかりです。山で言うのと、越えかねる山にとりかかった感じで、なかば、気おちもなってくるのです。文法上では、この津軽ことばも、東京語などの属する関東方言の、まっすぐ北の延長線にあるものと思われ、大筋としては、九州南部の、ものの言いかたよりも受けとりやすいように思われるのですが、なにかさま発音がむずかしいのです。そのむずかしさといったら、ひと通りやふた通りではありません。元氣を出せと、われに言い聞かせてみますが、このように変わった発音のしかたが、そうそう急に身につくものではありません。聞いていて、だいいち、どこがくぎりめなのか、わからないほどなのです。

おじいさんは、

「コトバー イッタイ ワルイ デア。」（ことばは、いつたいわるいよ。）

と言いますが、わるいわけではけつしてありません。ただ、発音がむずかしくて、それに、やっぱり文法もむずかしくて、分け入りようがないのです。おじいさんは、

「コツツマデ ヨク キタ ノー。」

とねぎらつてくれます。あとで、

「アンタ ホーノ コトバー ワカラネー シ。」

とも言いました。そんなものかなあと、こちらも、はるばると北の国にやって来た感慨を、もよおしたことであります。

汽車が終点に着きます。日も暮れました。材木をいっぱい積んである中里駅前に出て、人が、たそがれ道を去って

行くのを見てみると、つい、ものを聞く人がいなくなってしまう。やむをえず、いちばんあとに行く人に追いついて、聞いてみます。

“このへんに宿屋がありませんか。”

“アル。”

と、ただ一言。——じつに東北的です。

“何という宿屋でしょうか。”

“ワガラネー。”

“この駅前へんにありますか。”

“アリス。”（あります。）

問いても愚かな問いですが、答えはまったく簡単で、ちよつととりつくしまがありません。（——これは平凡な考えかたですが。）

駅前を過ぎて、一本道路をむこうに行きます。しばらく行くと、右上に、小学校が見えてきました。まずここへと思つて、あがつて行きます。当直の先生が出てくれました。三十五、六歳の、がんじょうな男のかたでした。あごひげの濃い男性です。この人がまた、ことは数のすくない、いわば訥弁の先生でした。広島などという、遠い所から来たものに出会つては、それが、平素からあまりにもかけはなれたことなので、土地ことばしか所有せぬ人は、いきおい、無口にもなります。

私は、こうした無口の状態に接すると、その人のふところにとび込んでみたいような思いにかられます。こういう

人たちの胸の中にある郷土・郷土弁を、とらえたいのです。こういう人たちが、土地っ子同士で、こだわりなしに話しあえば、きっとおもしろい会話をするでしょう。

当直先生に、私どもは、失礼ながら、調査要項をおあずけして、この先生に教えられた宿におもむきました。駅からいうと、だいぶんの道のりの所に、その宿がありました。

宿の二階にあがると、古色そう然（蒼然）とした部屋です。（そういえば、あがるのにも、箱段をのぼりました。）話しあいには持ってこいの部屋です。どうかして、今晚一晚を有意義に過ごしたいものです。念願のくに、津軽に来たのですから。

宿のおばさんがとてもいい人でした。二階への箱段と、このおばさんとのとり合わせがよくて、私どもは、親類のおばさんのうちに来たような気もちになりました。さっそくに話しこむと、おばさんが、＂このすぐ前に、諏訪先生がいらっしやいます。＂と教えてくれます。そのかたにお会いしたいと言いますと、即座に、諏訪先生をおつれしてきてくれました。シャツに半ズボンの諏訪先生で、三十四、五歳くらいの、やさしいかたでした。土地のよもやま話をしてくれて、＂では、夕食後に。＂と、いったんひきとつてくれます。そこで、こちらは、銭湯に出かけました。

この銭湯の大混雑と、湯の濁れているのには、どきもをぬかれました。芋を洗うと言いますが、それ以上かと思われるほどのおお人数、それに、お湯がひどく汚れていたのです。ここでは、ことばを聞く余裕もなにもなくて、そうとうにひきあげたことを告白しなくてはなりません。この湯だけは、私どもの方言調査旅行の長い経験での記念すべきものです。——こう書きながら、私は、今、一種のなつかしきで、あの銭湯のことを思いかえしています。

夜分、うすあかりの電灯のもとで、おそくまで、諏訪先生に、土地ことばを教えてくださいました。この先生の住所

は、「アオモリケン キタツガルグン ナカサトムラ オーアザ ナカサト アザー カメヤマ」です。このように、はつきりとした、あとあがりのアクセントが出ます。ほかの例をあげると、

○コレ| ヨンデ| ケへ| デア。

これを読んでおくれよ。

のとおりです。一つの傾向として、アクセントのあとあがり傾向がつよいあります。

右の「デア」は、「ジャ」とも言います。「デア」と「ジャ」とのふたとおりは、幾度も出たので、まとめて尋ねてみますと、この諏訪先生としては、

「ジャ」は、改めて言う時のもの、「デア」は、くだけて言う時のものだ。

ということでした。この諏訪先生は、幼少のころ、「デア」で育ったそうです。昔から、「ジャ」も、あるはあった。「そうです。」「ジャ」は、普通階級よりちょっと上の知識階級の人がつかいます。高等小学校卒業以上くらいがつかいます。それも、全部とまではいきませんが。とのことでもありました。

右の、「これを読んでおくれよ。」について出た、

○メイ|ヤクダ|バテ| コレ| ヨンデ| ケへ|ン|ベ| ガナー。

の、「めいわくだバテ」の「バテ」は、どう解釈したらよいものでしょうか。意味から言えば、逆接であることがわかります。逆接の九州弁に、「バツテン」「バツテ」があります。それとこれと、音相の似ているのが注意されます。

「ケへ|ン|ベ|」に、小さい「ン」音がはいっています。「サン|ビ|ノー。」(寒いのを。)でも、「ビ」の前に、

「ン」が出ています。「ソング ノー。」など、ダ行音の前にも、小さい「ン」が出ています。東北に著しい鼻母音の現象です。

「ン」にかぎりません。注意すべき発音の多くに接します。私の遅鈍な耳では、それら全部はとらえかねますが、つぎに、

○ソレホド| キレバ| ヌグ| グヒン| ナー。

そんなに着れば、ぬくうはございませんか。

という「グヒン」には、「ございません」にかかわるものが、感じとられます。それにしては、「グヒン」と、大きなまったものです。

○ド| シタ|ング| バー。

どうしたんだ。

などという「バー」は、

○オメ| ドサイ| イグ|ング| バー。

おまえは、どこへ行くんだい。

では、「バエー」とも聞かれて、どうも、えたいの知れぬものでした。

○ヂ|サ|マ、ド|サ|エイ| イギ|ィ|ス| [ü] |バエー。

おじいさん、どこへいらっしゃいます？

などとも言っています。

○コレ オメ ヤツタンダベ シー。  
〔シー〕

これはおまえがやったのだろうね。

というのでは、おわりへのつけそえことばとしての「シー」が見えます。この「シー」がつくと、「多少上品な言いかたになる。」「よしです。この「シ」は、「モシ」の「シ」でしょう。この種の「シ」は、奥羽に広く見いだされます。

「味ましい」ということばも出ました。

○ナンボ アンヂマシ バ。

ほんとに気もちがいいたら。

この「アンヂマシ」の内容は、「とても深くて、標準語ではあらわせぬ。」「そうです。」「気もちのとてもよい時のことばで、疲れて、一本やって、湯にはいった時などに言う。」「このことでした。

以上は、ものの一端をあげたのにすぎません。私どもは、異域に來た思いをひめて、耳に聞こえることばのいちいちを、心にききみこもうとしたのでした。

ほどへて、小学校の先生がふたりづれで見えました。ひとりには、来がけにお願いした、ひげの先生です。」「どうも。早く来るつもりでしたが、いっぱいやりました。」「なるほど、上ぎげんです。」「こうこうで、諏訪先生にお世話になりました。」「と言うと、「それはよかったです。」「と安心してくれます。ひと仕事すんだところへ、この人たちが来てくれたので、ちょうどよかったです。調査に、酒はどうもきんもつですから。――（前に、陰陽をぬって旅をした時のことでした。播磨の奥へは行って、あすは鳥取県という晩、土地の学校の若い先生にお願いして、ひとりの

もの知りのおじさんを被調査者に招きます。男先生の手料理にビールがついて、おじさんは、大よろこびです。ところが、飲むほどに飲むほどに、しだいに舌まわりがややしくなつて、どうにもならなくなりまして。つとめる気はあるのですから、なんとか、説明もしてくれませう。それがまた、くどくなるのです。ことわることもできず、困りました。舌がまわらねば、発音もアクセントもあつたものではありません。男先生は、微妙なことにはおかまいなしで、

「あなたは、いけるのですから。」と、ビールをしきりにすすめます。私は、長大息を禁じ得ませんでした。さて、この中里の夜では、ごきげんのおふたりがすぐ帰り、やがて、私どもの仕事も、ぜんぶおわりました。

明けての朝、また、早くから諏訪先生のおうちをおたずねして、いろいろ、ものを教えてもらいました。

中里駅での発車まぎわ、諏訪先生が、自転車でかけつけてくださいます。「これを。」と言って、さし出してくださったのは、ぶどう酒のかわいいびんづめでした。こんなかわいい小びんがあるとは、ついぞ知りませんでした。珍しいおみやげです。びんをふところにして、なごりを惜しんでお別れします。

汽車は、来た時と同じように、ゆつくりと歩きます。まあ、走るものではありませんが、じつさいに、「アルク」と言われています。諏訪先生も、汽車を「アルカセル」と二度ばかり言われました。中里小学校での、例の先生は、「ナツダト」ガソリンカー「アルクシ、……………」と言われました。まったくこの津軽鉄道は、のんびりしています。駅に着くと、どこでも停車時間が長いのです。乗ってきたおばさんが、駅員に、「だれだれはノリシタ ガー。」（だれだれは乗りましたか。）というようなことを問います。駅員は、たしかめに行つてくれます。私も、ある駅で、駅長さんのところまで、「スタンプはありませんか。」と問いに行つてみました。この夏分、運転は、一日七回で、冬は、回数がすくないそうです。汽車賃は、夏に安いということです。冬の雪が、一メートルから二メー

トルも積めば、汽車賃も、あがるのが当然でしょう。

津軽のことはをどれだけか知ったよろこびにひたりながら、今また、車中で聞こえる方言に快く身をまかせながら、私どもは、五所川原に向かいます。

## ○ なんぶ野<sup>の</sup>辺<sup>へ</sup>地<sup>じ</sup>町

青森県も、津軽となんぶ（南部）とは、ことばが違うと言われています。なんぶことばの初経験は、野辺地町でしました。

駅を出ると、前の通りをまっすぐに行きます。道がすこしだらだらさがりになって、まもなく、田んぼに出ます。これではと思ってひき返し、一軒一軒見て歩くうち、右がわの道うえの板ぶきの家に目がとまります。下宿屋のしるしが出ていました。なんとなく親しみぶかく感じて、ここをおとすれました。

四十歳を越したほどのおばさんが、老母さんとふたり、静かに暮らしています。雨にぬれていた私どもは、さっそく、いろいろばたに招かれました。静かな午前です。おばさんは、いろいろのふちに湯のみを置いて、お茶をついでくれます。

「サツパリ アジマシー オチャモ アリマセン。」

旅のものをもてなしてくれる、改まったあいさつです。(「アジマシー」が出ました。) こんなことを言われると、しんみりとさせられます。外は雨、そぞろに旅愁を覚える東北の果てでした。おばあさん、おばさんと向き合つて、方言の話しをします。もつたいないような環境です。(——ふせいを感じることに、ひとかたではありません。)

「アンタガタニ オヒル トキ、……………」

の、「オヒル」が、まずわかりませんでした。これが、「オシエル」と知られた時、秋田県以来の、「セ」を「へ」と言うのなど、<sup>]</sup>sをhにする、著しい現象を思いおこしました。この地で、「かせがねば」を、「カヘガネバ」と言ってもいました。

この発音にも、いろいろむずかしいことが多かったのです。ひとつの感じですが、濁音を見せることは、日本海がわでよりも、すくないかのようにでした。また、鼻母音関係の発音も、日本海がわで聞いたほどにはなはだしくは、ひびかないように思われました。日本海がわと太平洋がわとに差異があるとしたら、これはおもしろいことです。いろいろな点で、奥羽の表と裏とは、質的な相違があるのではないのでしょうか。

このおばさんたちのていねいなことばには、「どうどうしなさいませ。」の「サマへ」がありました。「新聞 見ヤサマへ。」などと言います。「なんでも、「へ」がつきます。」と、おばあさんは言っていました。「へ」だけがつくではありませんけれども、「サマへ」の「へ」が、まったく、<sup>[he]</sup>の発音なので、この人びとの意識では、「へ」がつくということになるのでしょう。人の、このような思いとりようから、新しいことばやことばづかいが、分生したり派生したりします。土地の人が、自分のことばをとらえて、説明していることばには、しばしば傾聴すべきものがあります。とつぴとも思えるような説明も、無視することができません。おもわぬところで、それが、ためになり

ます。

○マ<sub>1</sub>マ<sub>1</sub>、アガラシテ クダサマへ。

は、「マ<sub>1</sub>マ<sub>1</sub>、アガサマへ。」(まあまあ、お上がりなさいませ。)(よりも、もっといい言いかたです。

「また、おいで。」を、

○マンダ オデ<sub>1</sub>リ<sub>1</sub>。

と言います。この言いかたがまた、太平洋がわのことばづかいのようです。(ここから、岩手県下へ南下すると、ますます、これが聞かれます。)(「こちらへおいでなさいませ。」は、

○コツチサ オデ<sub>1</sub>リマへ。

であります。

○センセー オデ<sub>1</sub>リマシタ イー。

○センセー オデ<sub>1</sub>タ イー。

というようにも言います。「オデ<sub>1</sub>タ」も、「オデ<sub>1</sub>リ」ことばの「オデ<sub>1</sub>タ」であって、「おいでた」ではないでしょう。「オ出アル」の連用形、「オ出アツて、オ出アツた」が、「オデ<sub>1</sub>タ」になったものでしょう。

「コツチサ オデ<sub>1</sub>リマへ。」に關係のある言いかたとして、

○コツチサ キ<sub>1</sub>テ<sub>1</sub> エヒ<sub>1</sub>。

というのもあります。「キテ エヒ<sub>1</sub>」は、「テヒ<sub>1</sub>」のようにも聞こえます。「よってお行き。」というのは、

○ヨツテ エヒ<sub>1</sub> ジャ。

です。これがまた、「ヨツテヒ ジャ。」のようにも聞こえます。「エヒ」は何でありましょうか。たまたま、表へ「サカナツコ」（魚）が来ました。その声に答えて、このおばさんが言ったのは、

「キョーア エヤ シ<sup>[i]</sup>。」（きようは、いらないわ。）

でした。

対話文の文末のことばに、「ニ<sup>[i]</sup>シ」というのがありました。

○ソーンデ ゴザリマス カニシ。

○ソー カニシ。

などと言います。

○キョーワ サムイー アガ ニシ。

これは、「きようは、サムイーあるがニシ。」です。

津軽では、「バ」がありました。ここに、つぎのような、「バイ」があります。

○テモ ナモ シピデデ バイ。

手もなにも、しびれてね（しびれてしまいますわ）。

○テモ ナモ モゲルヨ<sup>[i]</sup>ンタデ バイ。

手もなにも、もげるようですわ入寒くて。

これなどは、九州の「バイ」に似たところを持っているのではないのでしょうか。

ここ、野辺地では、「タイ」というのもありました。

○オツカネ コトー アリマシタ タイ。

おそろしいことがありましたよ。

○オツカネ コトー アツタ タイ。

おそろしいことがあったよ。

こういう「タイ」もまた、九州の「タイ」と、考え合わされるものです。

ゆっくりとあそばせてもらって、おばさんの話しを、じゅうぶんに聞かせてもらいました。ここをおいとますると、つぎは、下北半島への旅です。

### のちにふたたび野辺地町を訪ねて

幾年かのちのこと、ま冬に、また、下北半島に行くことになりました。そこで、前と同じように、野辺地の駅下車しました。その時は私ひとりでしたが、東北本線の夜行の寒さが身にこたえて、朝、野辺地駅におりた時には、もういちずに、野辺地のあのおばさんのうちに、暖まらせてもらいに行きたくなりました。昔なつかしい気もちで、大雪の道をたどって、おばさんの家をたずねます。だのに、どうしたことでしょうか、おばさんの家が見つかりません。すっかり雪におおわれた野辺地だったので、前の見おぼえをたしかめようとしても、容易には見当が立ちませんでした。すつかり雪におおわれた野辺地だったので、前の見おぼえをたしかめようとしても、容易には見当が立ちませんでした。またしても田んぼのほうへ出てしまうのです。どうしても、おばさんの家が見えません。板ぶきの、あの低い屋根の、簡素な家が、もう、どこにも見えなくなっていました。

野辺地町の駅前どおりは昔ながらでしたが、あのおばさんたちのことを聞こうとしても、さて、だれに問うてよい

のかわかりません。――だれに尋ねようもなかったのです。ひき返して駅にもどり、駅の玄関口のうず高い雪のかたまりを越えて、待合室の土間におります。雪ぐつの人びとが、ここここに腰かけています。ここで、長い間、下北半島、大湊線の発車を待ちました。ふと目にはいった、プラットホームの駅名表示板の「のへじ」という三文字が、雪の中に、くつきりと、きわだって見えました。

もうひとつのちの話になりますが、柳田国男先生の『雪国の春』（創元選書本）を拝見した時のことです。中に、「清光館哀史」というのがありました。これを読むと、やはり、先生の東北旅行で、清光館という宿屋が、二度めにおいでになった時には、あとかたもなくなっていたというのであります。なんともあわれなお話です。これを読んで、私は、同じようなこともあったものだと感じいました。先生のご旅行を、ときには、夢に描きながら、東北を歩いて来た私としては、この、先生の「清光館哀史」もまた、文字どおりの哀史として、受けとらないではいられなかったのです。

## ○ 十和田湖畔

奥羽はじめての旅では、下北半島の旅行をおえると、青森にもどって、国鉄バスで、十和田湖にのぼりました。奥入瀬川に沿っていくと、やがて、湖岸です。バスからおりた所に、遊覧船が待っています。バスの客は、みんな

な、その遊覧船に乗ります。私どもも、乗ることにしました。

十和田の景勝もさることながら、これを案内するおとめの説明のアクセントが、あまりにも変わっていたのには、驚かされました。名所地ごとに、その案内のことばにも一風あるのがつねかもしれませんが、ここのは、その話のアクセントが、かくべつにこと変わっていました。(——土地の人が、共通語で書かれた案内の文章を、大きい声で述べたると、そこに、ことばの変なアクセントがうまれることもあります。)案内嬢の説明を聞くお客さんたちが、笑うまいとしても笑えてくるありさまであったのは、今、思い出しても、おかしいかぎりです。こんな調子でした。

「ヒダリニ ミエマスノワ、……………」

身のこなしもやさしい、おとなしそうな娘さんが、そのことばの節まわしは、こういう調子のもをつぎつぎに出してくるのですから、聞く私どもは、ふしぎなような気もしたのです。娘さんは、そのことばのアクセントに、なんにも気づいていないようでした。

いわゆる、十和田湖めぐり、がすむと、遊覧船は、ホテルの前に着きました。あがったお客さんたちは、みんな出迎えられて、ぞろぞろとホテルにはいります。私どもは、あてもなくて途方にくれました。ともかく、左手の村の見える方へ歩くことにします。湖ぞいに、雑草の高く茂った道を行います。やがて、休屋(当時、十和田村の「ヤスミヤ」という部落にはいりました。部落といつても、みやげもの屋などが並んでいて、宿屋もあり、ます、十和田湖の町です。修学旅行の生徒たちが、夕がたの湖岸を散歩しています。

“ここへ来てよかったね。”と話しいながら、宿を求めます。調査の仕事にもつてこいの宿屋さんはないのか

とがします。もうだいぶん暗くなっていたので、気がねなくあちこちすることができました。と、さいわいに、湖ちかくに、平屋だての、宿屋らしくない宿屋があるのが見つかりました。表は小店のようにしてあって、おやじさんがぼつねんとしています。修学旅行の生徒たちが、出はいりしていました。明けはなしたへやに寝ころんでいるのも見えます。店の前で、ちよつとたたずんでいますと、かいがいしげなおばさんが出てきました。今だと思つて、宿を頼みました。

「さあどうぞどうぞ。今晚は農学校の修学旅行を受けたので、ひとりでてんてこまいをしています、もう、食事もすみましたから、さあどうぞ。」

と、おばさんは、まことに気がるく受けいれてくれます。

私どもは、裏手の、はなれのようになった、小さな部屋に通されました。まもなくおばさんが、夕飯を知らせてくれます。「お夕飯は、こちらで。」と、表のほうへ案内してくれます。道からまる見えの、店のまにすわらされました。行き来する人から見られるのではありますが、私どもは、そこにいて、おちつきのよさを感じたのです。あまり恥ずかしい気はしませんでした。おばさんが、私どもの世話をしてくれる、その世話のしかたは、てきぱきとしていて、ぞんざいなようでもありながら、なお、どことなしに、情愛を感じさせるのです。おばさんのもてなしの中に、すつかりとけこまされました。

このお夕飯のおぜんのようなすは、いなかもの私どもの、昔なつかしいものです。まず、食器が、古風な茶わん、古風な皿、古風なおわんです。平たい皿に盛られたおかずは、野菜の煮つけです。それに、大きく切った油あげがはいっています。湯葉もはいっています。湯葉のはいった煮つけの皿で、お夕飯をたべることは、そも幾年ぶりのこと

でしようか。おわんには、すこしさめたみそ汁がはいっていました。中味のないみそ汁です。これが、大きい平皿の煮つけとよく調和していて、私どもには、なによりのごちそうぶりです。

「さあ、みそ汁のおかわりを。」と、おばさんは、手盆でさつとおわんを持っていきます。それがまた、早いのです。あつというまに持っていかれたという感じですが。気さくで、かいがいしくて、みじんもむだがないようなおばさんです。こちらは、すつかり、いいとりこのようになってしまいました。

食事のあと、しばらくすると、おばさんが、私どもの部屋にやってきてくれます。この部屋は、物おきを改造した部屋のようにした。納屋がすぐ横にあったと思います。私どもの部屋の隣に、小部屋があって、その男青年客が、足をそろえて出しているふうです。どうかげんだったか、その足さきが見えました。

この宿の主人さんは、五十五、六歳だったでしょう。さつき一度、この部屋に来て、私どもの話し相手になってくれたのです。中風とので、からだか不自由らしく、でつぶりとふとったからだを、自身、もてあつかいかねているありさまでした。おばさんは、ことし五十歳になると話してくれました。三、四十人もの生徒さんたちの、食事と寝床の世話をし、さぞかし疲れていることのように、私どもにも、夜おそくまで、相手になってくれたのです。

このとしまでに、おばさんは、よほど苦勞をつんできたらしく、中でも、夫の長わづらいをかかえて、働きぬいてきた苦心談は、哀切をきわめました。おやじさんのことを、まるで「子ども」のように言います、そういえば、最初、見かけた時から、主人さんは、病みあがりの大きい子どもといったふうに見えました。なにかもひつかまえて、働きぬくおばさんの、きびきびとした物語りは、いちいち私どもの胸にこたえ、私どももまた、おばさんの子ど

もでももあるかのような気分になってしまふのでした。

明けて、朝、六時まえの食ぜん（食膳）のことです。おぼさんが、〃けさは、おやじが、お客さんたちに、さかなけをたべてもらわなくちゃというんで、早く起きて、十和田湖のえびをすくって来たんですよ。〃と書いてくれます。見れば、えびのてんぶらが、ゆうべも出た、例の平たい大皿に盛られているではありませんか。これにはすつかり感動しました。旅はいろいろに経験してきましたけれども、これほどかたじけない料理に接したことはありません。旅をして、宿のかくべつの心づかいを受けたことは、しばしばあります。〃家庭的にもてなさなくっちゃ。〃と書いて、台所やいろいろばたで、朝ご飯を食べさせてくれた、そういう宿を経験したことも、たびたびあります。が、朝の宿で、とりたてのえびのてんぶらをいただくなどということは、たえてありませんでした。

主人さんは、〃お精進ばかり食べさせちゃね。〃と笑いながら、土間に立って、笑っています。からだのはつきりしないこの人が、このようにまでして、もてなしてくれるのにこたえて、どうお礼を言ったらよいのか、ことばもありませんでした。私どもは、おぼさんがいそいそと、しかも手ばやく揚げてくれたにちがいないてんぶらをかみしめながら、ただただ感謝して、朝ごはんをいただきました。外は、雨のようです。

だんだん大ぶりになりました。出発しようとする、主人さんが、ついそこだからと言って、バスの乗り場まで、送ってくれます。どしゃぶりの雨の中を、大ごえで話しあいながら、停留所に向かいます。借りたかさで、無事に停留所に着いたところへ、むこうから、ハンカチなどを心ばかりに頭にのせた人たちが、大さわぎしながら、つぎつぎと停留所へかけこんできます。きのうの晩、ホテルに泊まった人たちでした。ここから出る自動車は、十和田から南にくだって、秋田県の毛馬内けまはちに行くのです。雨の中を、やがて、バスは発車します。窓のすぐそばで、宿の主人さんが、

すこしかさをかして、私どもを見おくつてくれました。

## ○ 雪の盛岡駅

これは、いつの年の旅だったでしょうか。岩手県の盛岡の駅に、夜、着きます。冬の雪のころでした。ひどい雪の中で、私は、ほかの多くの旅行者と同じように、一夜を、盛岡の駅のベンチで明かしました。

夜あけがたになると、ずいぶん冷えこんできます。朝になるのを待ちかねました。ようやく、人の行き来が始まるころになると、私は、暖かいみそ汁をたべさせてくれるところはないかなあ。と、宿屋をさがします。町どおりをしばらく行くと、橋に来ました。これを渡って、左に折れると、そこに、ちよつとした宿屋がありました。駆けこむようにしてはいって、おはようございます。と大きい声をします。

三十歳台かと思われる、宿の女主人が出てきました。私を見るなり、まあ、かわいそうに。と云ってくれます。どうも、私の身なりが、たいへんみじめだったらしいのです。私をいたわってくれて、さあ、あがれというわけです。さっそくに、おいしいおみつけを出してくれました。それに、かぼちゃの煮たての、ほかほかと湯気の立つごちそうも出してくれました。思いもよめなかつたごちそうを、腹いっぱいいただきます。——戦時中で、国は非常時と言われていた時のことです。

「記念に、このかぼちゃの種をください。」と言いますと、おやすいご用だと、新聞紙に、その種を包んでくれました。それをもらって、広島の外郊の、疎開さきの家まで、だいに持って帰りました。

翌年、このかぼちゃの種を植えますと、無事に東北かぼちゃが育ちまして、あの、赤い、大きながなってくれました。私は、そのはつ物を、自分の先生に持ってあがったことを思い出します。この先生は、ほんとうに、非常時中でも清らかな生活をしていらつしやうした先生で、東北かぼちゃのはつ物を、この上なく喜んでくださいました。

### 小笠原リツさん

盛岡のお話で、もう一つつけそえたいことがあります。これは、夏のことです。

やはり、非常時、お米を持って旅行するというようなころでした。盛岡弁の調査の時、教えてくれる人があって、小笠原リツさんのうちを訪ねました。この人の家庭は、当時、材木商で、岩手県北部の軽米町から、この盛岡に来ていたのでした。私は、はからずも、小笠原リツさんから、軽米弁を、たつぷりと聞かせてもらうことになりました。じつに、いい語り手で、私の問いに答えながら、要領よく、軽米弁のおもな表現法を、平素どおりのことばの調子で聞かせてくれるのでした。

岩手ことばをどつさり聞かせてもらったうれしさに、胸をふくらませながら、いそいで駅に出ます。

上りの発車時刻になりました。いそいで改札口を出ようとします。そこへ、どうしたことでしょう、さっきのおばさん、小笠原リツさんが、もんぺ姿で駆けつけてくれました。

「これを。」

ということとともに、新聞づつみをさし出してくれます。おばさんの心づくしのお弁当なのでした。私はそれをあ

りがたくいただいて、汽車にとび乗ります。

車内で、新聞づつみを開いて、あの東北一流の大きいにぎりめしを、じつとながめました。

つけそえて

戦後、幾年めのことだったでしょうか。ひと夏、私は、青森県の津軽と南部との調査に出かけました。南部地方では、その南方の島守という所で、一週間の滞在調査をしたのです。

島守滞在のある日のこと、思ったって、軽米町を訪ねることにしました。いうまでもなく、小笠原リツさんを訪ねてみようとしたのです。いなか路線のバスを乗りかえながら、軽米町に着いて、そのへんの店屋にはいり、

“小笠原リツさんという人が、……………”

とたずねてみますと、

“リツさんのうちは、つい近くです。”

と、これはまた驚いたことです、若い嫁さんが、親切に、道路のむこうがわを指さしながら、リツさんのうちを教えてくださいました。行ってみますと、町どおりの裏手に、「小笠原リツ」と表札を出した、静かな平屋があります。

あけて、「ごめんください。」と言うと、出てきたリツさんが、はつとなりまして、「あなたは。」と、すぐに私に気づいてくれました。こんなにも、さっそくに、昔の私を思い出してくれようとは、ついぞ思いかけなかったことです。

“よくわかってくださいましたね。”

と私が申しますと、

“おつむのかっこうが、……………。”

などと言ってくれ、よくおぼえていると語ってくれます。その時の会話の内容は、ここにいっさい省くとしまして、私どもの方言の旅が、どのような旅であるかは、ここで、ひとふし、各位にご観察ご理解いただくことができるかと思っております。

# 四国二題

## □ 四国のおもしろみをさぐる

四国をめぐる、方言をたずねると、四国四県のそこそこで、方言の、おもしろい土地風に接することができません。大きくながめると、四国の南がわの土佐では、ことに変わった方言のおもむきが見られます。土佐も大国で、西から東へとたどっても、地域地域の変化が見られるのですが、そうであって、なお、土佐は、土佐弁と言ってよい特色を見せます。たとえば、ダ行の「ヂ」「ヅ」とザ行の「ジ」「ズ」の、発音をし分けることなど。

この土佐のようすは、ひきつづいて、阿波南部の山地帯にたどることができません。そして、もう一つ、伊予の東部へも、その土佐的なものつづきをたどることができません。四国の北がわで、とくに、この伊予の東部が、土佐とあい通じるものをよく見せているのはなぜでしょうか。私の解釈は、つぎのとおりです。四国の北がわは、いわば、瀬戸内海斜面になっっています。したがって、北がわは、内海の島じまとの交渉もすくなく、また、内海および島しょ（島嶼）をはさんで、中国がわとの交渉もすくなくありません。その時、伊予の東部はと、地図で見ますと、ほかとは違って、その北の海に、ほとんど島がありません。つまり、この地域は、島づたいに中国地方と接触を保つというようなところからではないのです。このような状態のもと伊予東部は、他の北がわ地域が、瀬戸内海関係の影響を受けて、しだいに方言色を改めてきたのに対して、その方言色を改めてくることがなかったと考えられるのでありま

す。こうして、伊予の東部は、瀬戸内海がわに關係のない、大平洋斜面の四国南半とともに、比較的古い状態を温存することになったのだろうと思われまゝ。

このように考えられますので、私は、かねて、伊予の東部を、土佐とともに注意してきました。そして、両者のつづきがらを、一度、歩いてたしかめたいものだ、かねがね思ってきたのですが、つい一昨年のこと、やっと、その思いを果たすことができました。

## ○ 寒風山トンネルをぬけて

### 西条から南へ

九月はじめ、私どもは、広島から伊予西条に直行し、午後二時ごろ、西条発のバスに乗って、南下しました。バスの終点が、下津池しもつゐけという所です。下津池しもつゐけのかみての、山はだの部落が、風透かぜすきです。私は、このあたりで伊予がわの山奥のことはをとらえ、やがてまた、寒風山トンネルをぬけて、土佐がわの山奥のことはをとらえようと考えました。風透部落で訪ねた一軒のうちの人は、「この先祖は、もともと土佐から来たのです。」と説明してくれました。しかし、この人の語ることはまったくの伊予弁で、土佐弁らしいものは、すこしも聞くことができませんでした。ただ、「キョーワ アツイ ネヤ。」(きょうは暑いねえ。)などという文末の「ネヤ」は、ここで聞かれ、土佐がわ

でもよく聞かれたのですが、この「ネヤ」は、伊予がわでも、問題の伊予東部にかぎって存するものではありません。

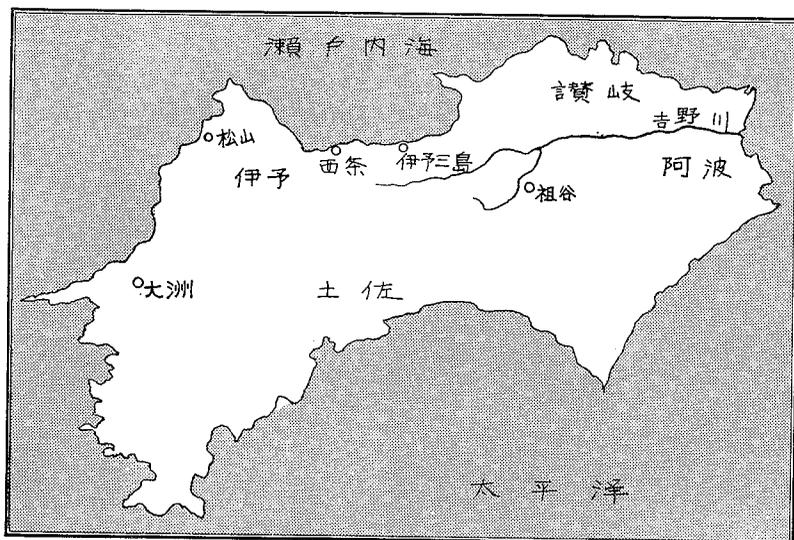
よし、ここはわかった。と、私どもは、四時すぎ、車で下津池を出発します。一時間半の山道が、これからの行程です。

さきほど、風透の民家では、「ミザ ヨシ、クーキヤ ヨシ。」

(水はよし、空気はよし。)と言われました。水のきれいな谷川にそって、空気の清らかな山道を、車はぐんぐんのぼります。りっぱな道路です。しかし、まったくのつづら折りでです。もはや、瀬戸内海は、はるかむこうのかすみの下になりました。

ふと、前方の谷あいには村落が見えてきます。とっさに、私が、  
 「おお、もう土佐に来ましたか。」と言うと、車の人が、  
 「さっきの部落ですよ。」と笑います。なるほど、道をくねくねとのぼるうちに、さっきの部落を向こうに見おろすような所に出たのでした。そういえば、こんなに早く土佐が見えるはずありません。寒風山トンネルは、まだまだ先のようにです。

五時を過ぎたころだったでしょうか、ようやく、道路は高みにあがりきって、名代の寒風山トンネルをぬけます。これを越えれ



ば土佐です。せんだつての台風の影響で、トンネルの内部には、所どころに水が出たりしています。中央部あたりには、修理工事用の木ぐみがいっぱい、車は、わずかな通り道をやっとすりぬけるありさまでした。

トンネルを出て、土佐がわの谷あいをくだること三十分、桑瀬(クワゼ)という部落に着きます。このあたりは、高知県土佐郡本川村ほんがわむらになります。

清流の、なんとみごとなことでしょう。水をびんに入れて、持って帰りたいようなこちがします。川には、大小無数のきれいな石がころがっていて、まさに美観です。川ぞいの、寒風荘という宿の、橋のこちらで、車の人たちと別れます。

### 桑瀬の夜

宿の寒風荘は、農業協同組合の出張所でもありません。突然客の私どもでしたが、若嫁さんが出てきて、どうぞと、受けいれてくれます。私は、土間に立ったままで、今夜はこの桑瀬のことばをどこかで聞かせてもらいたいのですがと頼みます。

夕食のあと、川むこうの、一軒の隠居屋へつれていってもらうことができました。

そこは、伊東松嶋さんのうちです。土佐では、松嶋さんといったような、風がわりな名まえに、ときどき出会います。この松嶋さんは八十七歳、その嫁さんの、おばあさんは八十九歳です。九月はじめてはありますが、隠居屋では、あがりたてのいろりに、大きな木かぶが、とろとろと燃えていました。すぐに、あがらせてもらって、  
 「おじいさん、私どもはどこへすわらせてもらったらいいですかね。」と言いますと、「いや、ここは、どこでもいいんだ。」とのことでした。おばあさんが出てきます。「おふたりがおそろいで、いいですねえ。」と言います

と、さっそく、おばあさんが、わしのような年寄りに頭をなでてもらうと、長いきをするんじゃそうな。”と言ってくれます。私は、首をさしのべて、おばあさんになでてもらいました。そして、家内の頭もまた、なでてもらったのです。

おじいさんの口から、「カ<sup>カ</sup>ガ<sup>ク</sup>ケン」ということばが出ました。鼻にかかる言いかたです。また、おじいさんが、お菓子を私どもにすすめてくれて、

「アンヂャ エー ワイ。」（味がいいよ。）

と言ってくれます。この「ヂャ」の前でも、鼻にかかる音が出て、しかもそれは、大きい「ン」になりました。おばあさんのことばの「ちようど」というのは、「チョーンド」となりました。この桑瀬でも、土佐風の鼻音は、はっきりと受けとられて、私どもは、こと伊予東部との似よりを思うことができました。（ついでながら、妻は、伊予東部の出身です。）

さきの、「アンヂャ エー ワイ。」の「アンヂャ」は、「味が」の意味になるものだと思います。おじいさんの、ほかの言いかたを出しますと、

○ニ<sup>ニ</sup>ハ<sup>ハ</sup>マ<sup>マ</sup>ニ ム<sup>ム</sup>ス<sup>ス</sup>メ<sup>メ</sup>ア オ<sup>オ</sup>ル。

新居浜に娘がいる。

などがあります。主部の、このような「が」格表現がまた伊予東部にもあって、「ツ<sup>ツ</sup>レ<sup>レ</sup>ア オ<sup>オ</sup>ル<sup>ル</sup>キ<sup>キ</sup>ニ。」（つれがおるから。）などと言っています。おじいさんおばあさんの、「くしないで」の言いかたでは、「センツツ」というのがあります。土佐がわには、ここにかぎらず、「センツク」ではなく、「センツツ」が、よくおこなわれていま

す。おじいさんの、その「ツツ」の「ツ」が、また、きれいな「ヅ」の音です。

燃えるいろり火のそばで、幾度もかえてくださる熱いお茶をいただきながら、私どもは、清涼の夜の長ばなしを楽しんで、時のたつのも忘れませんでした。

### 日の浦

桑瀬の翌朝、四キロたらずの道を、日の浦まで歩きます。

土佐北辺の、こういう山中に、「浦」ということばをつかった地名があろうなどは、思いもせませんでした。ここでは、六十代のおばあさんから、ツ<sup>[t<sup>s</sup>u]</sup>、ヅ<sup>[d<sup>s</sup>u]</sup>の発音を、たくさん聞きました。まさに土佐弁です。そして、これと同じような発音を、私どもは、伊予の東部でも聞くことができます。日の浦のおばあさんは、「チ」も、<sup>[ti]</sup>に近く発音していました。このへんのことばで、とくに注意されたのは、つぎのような「ガ」です。

○イランガオ ノケトイテクレ。

いら  
ないの  
をそ  
つち  
へ持  
って  
いっ  
てお  
いて  
くれ。

おばあさんが、このような「ガ」を、たびたびつかうのです。伊予の南で聞く「ガ」に似ています。（こういう「ガ」は、伊予の東部にはありません。）伊予の東部にも日の浦方面にもある鼻音の例を出しますと、「チンヂュコサエル」（地図をこしらえる）、「ヒロシマワ、トータルタンダケデス。」などというのがあります。

### 田井へ

午後の一時半、日の浦の本川郵便局の前で、田井行き的小型バスに乗ります。（——出発まえ、運転手さんといっしょに、車内のみんなが、アイスクーキをたべました。）

日の浦の部落を出はざれると、バスはまた、川ぞいの道を走ります。川は、例のごとく、石と水との美景です。もなく、青の洞門のようなトンネルが見えてきました。バスは、がけ下の道を行き、いくつか曲がつて、やがて、トンネルにさしかかります。これを出たとおもうと、また、前方に、つぎの、青の洞門、が見えてきます。道よし、川よし、石よしの山ぐにです。だんだんくだと、ところどころに、赤く塗りあげた鉄のつり橋があります。いくつめの大つり橋だったでしょうか、これが上吉野川橋でした。

上吉野川橋を渡つて、しばらく行くと、美しいトンネルです。トンネルをぬけると、目の下に、ぱっと大きな集落が見えてきました。それが、田井の町でした。

土佐では、きのうときよう、通つて来た地方が、嶺北と呼ばれています。田井からが嶺南で、しだいに平地が開けます。

しかし、ことばはといいますと、発音にしろ、ことばづかいにしろ、この田井のことばも、日の浦などと、そんなに違ったものではありませんでした。がまた、「くしてゐるよ。」という意味の、「シチヨラーヤー。」（男ことば）、「シチユーゼヨ。」（女ことば）というのなどが田井ではおこなわれていて、もはや、このへんから、山地以外の土佐一般の、ことばのようすが見られるのかとも察せられたのです。

田井ことばを教えてくださいましたのは、沢田さんご夫婦でした。ご主人は、鶴馬さんです。お会いしたとたん、顔のつやつやした人だと思ひました。愛くるしい表情の人です。六十五歳くらいでしょうか。あとで話してくれたのですが、この人は、若いころから、いなかずもうの力士さんだったのだそうです。今日のことばで言いますと、スポーツで鍛えに鍛えたかたです。そのせいに違ひないと思ひました、このにこやかな美しい顔は。

そのおうちで、双方四人が話しあっていると、突然、「オヂーちゃん。」という声が聞こえてきます。おばあさんの声そっくりで、九官鳥が鳴くのです。これを聞いた時、私どもは、このつれそいさんが、沢田さんにとってどんなに大切な、いいかたであるかがすぐにわかりました。（沢田さんは耳をいためていて、つれそいさんは、つねに夫君の耳のおてつだいもしているのです。）九官鳥がつつぎつつぎに語りかけてくれます。

○ゴハン タペロー。

ご飯たべようよ。

きれいに、土佐弁のアクセントで話します。方言を語る九官鳥に出会ったのは、私ども、これがはじめてです。

調査とはいいながら、この上もなく楽しい思いをさせてもらって、しめくりには、沢田さんの長男さんの、かつて学生ずもうでその名を全国にひびかせたようすを、たっぷり聞かせてもらいました。そのむすこさんは、方言の調査に興味を持っているのだそうです。

「伊予東部」弁

田井の調査をおえると、バスで、阿波池田まで出ました。

池田から、夜のバスで、伊予三島市の西寒川さいがわに來ました。土佐弁を思いかえしながら、ここで二日、いわゆる伊予東部のことばに耳をかたむけたのでした。

## ○ 徳島県の祖谷いや

昭和十四年の三月、四国の南岸を、西の端から東の端に旅して、やがて、吉野川の川しもに來ました。これから、祖谷地方をたずねます。

阿波赤野という小さな駅でおりると、そこから歩きはじめました。もう西祖谷です。両がわの山は高く、その山腹に、点々と農家が見えます。みな、高い所に居を構えています。吉野川ぞいには、平地とてはありません。

しぜんに、家いえは高い所に建てられたものでしょう。それで、日あたりもちようどよくなっています。人びとは、みんな、日あたりのよい所へ上がっていったということなのでしょう。——のちのちも、九州その他で経験したことです。山ぐにの人びとは、じょうずに、日あたりのよい、山の中腹あたりの地面を見つけています。

狭い谷あいから上のほうへと、丸みを帯びて大きくうねっている急な山はだに、大小の家いえが横ならびに点在している風景は、なんとも珍しいものです。それらの家が、日を受けて、みんな幸福そうに静まっています。

あのあたりへあがつて行くのだと、自分に言い聞かせながら、のほり道を求めて、しばらく川ぞいに歩きます。飲食屋があります。そこにはいって、昼食をとることにしました。五十歳ちかくのお百姓のおじさんが、弁当をつかっています。

「オチャ ツカー。」（お茶ちょうだい。）

とおかみさんに言います。「ツカー」は、伊予の「ツカー」と同じ言いかたです。

「チート ヌルイ ナー。」（ちよつとぬるいねえ。）

とか、

「ナツナラ エーヨーナ。」（夏なら、ちよつどいいようなお茶だ。）

とか、いかにもこの地方のアクセントらしいアクセントを出しています。

「コレカラ ……ワ、ニリ アル ンデカー。」（これから……までは、二里あるのかね。）

このような、問いの「カー」のつかいかたをします。いつか、東海道線の静岡近辺の車中では、若い母おやが、こみあつた通路を、小さな子といっしょに通りながら、「チョット トーシテ チョーダイ カー。」と言っていました。「くださいませんカ。」というような「カ」を、「チヨウダイ」の下につけていました。問いの心でつける「カ」の、つけかたの自由さが、これに見られます。同じような「カ」が、この徳島県の、「デ」の下の「カ」でしよう。

こ高い所の一軒の農家にたどり着きました。（このあたりは徳善とくぜんという部落です。）表で、四十すぎかに見えるおじさんが、みつまたの皮を干しています。このあたりでは、みつまた、こうぞの皮を売り出すことが、一つの大事な仕事になっているようです。おじさんが、

「コーゾーモ アルンデス ワ。」

「コシラエルンデス ワ。」

「ヤスインデス ワ。」

などと言います。この「ワ」が、「ナイ ンデワ。」（ありません。）のような言いかたにもなります。「デワ」は、「デア」に近くも聞こえることがあります。ものは、まさしく「デ・ワ」です。

この家の老父さんが、干してあるみつまたを、ほつほつと裏がえそうとします。それを、主人がとがめます。「やめておおき。」と言いますが、どうしたことか、おじいさんは、なかなかやめません。私は、縁がわに腰かけて、ふたりのやりとりを聞き書きします。

主人のことばに、

○コノ| ヘンノ シガ オータレバ、……………。

このへんの衆が会うタレバ、……………。

とか、

○メウエノ ヒトニ ユーンダツタリヤ、……………。

目上の人に言うのだったレバ、……………。

とかいふのがあります。

○タイチエイ| ウエー オー| ツケライ。

たいてい、上へ「オ」をつけライ。

など、伊予と同じように、「ライ」を言います。「書いてください。」というのを、「カイテ オヤリ。」と言うのも、南予などの、「くしてヤンナハイ」と言うのと似ています。この種の謙譲法は、中国西部の石見にもあり、九州北部の内にもあります。

縁がわで、この主人（おじさん）に、ひとわたり、質問要項について聞くことができました。ここをおわって、また、部落の上のほうへあがることにします。さいわい、徳善部落の「徳善」家が、上のほうにあることを、おじさんが教えてくれました。——徳善家は、平家の落人のちと言われるうちだそうです。そのうちの建物や家族のことも、おじさんが、くわしく話してくれました。

おじさんの説明は、その徳善さんに対して、じつにいんぎんなものでした。やがて道を教えてくれます。

「アノ スギバエノ スイタ クカラ、シモイ ムイテ デルンデス ワイ。」（あの杉林の透いている所から、しもへ向いて出るんですよ。）

「なになにのク」というのは、土佐の「そのク」、東予の「チー<sup>ナ</sup>ク」（千代さんのうち）などの「ク」と同じものと聞かれました。

徳善家を訪ねます。おりよく、老主人さんがいられました。家宝の拝見を乞います。と、  
 「ゴランクダハレマヒテ。」と古文書を出してくださいます。山の上の台地に建った、大きな大きな家の、いかにもゆい、いふ（由緒）ありげなたたずまいの縁さきで、私は、ただ記念にとばかり、それらのものを見せていただきます。ようかんのお茶菓子が出ました。なんだかもの珍しい感じがしました。

当時の私の若い血をかきたてたのは、ここへもすでに歴史家が、一再ならず探訪していることでした。今回の旅のはじめには、南予の齒長寺を訪ねましたが、そこにも、すでに、その道の人びとの来訪があつて、くわしい調査・研究ができていました。歴史家の探訪が、すみずみまでいき届いています。ここ、徳善家の縁さきでも、私は、  
 方言研究の探訪が、歴史研究のそれに、幾十歩遅れていることだろう。ノと思わないではいられなかったのです。

なんだか、大きなむち（鞭）を当てられたような気になって、暮れがたの道を下山します。汽車に乗って池田駅にもどりつくまで、私は、客づくりの車中で、歴史家の探訪を思う文章をつづりました。

歴史家が、国のすみずみまでたずねて、何をしたかは、私には、わかりません。ただ、私としては、方言の山野の開拓が、あまりにもたち遅れていることを、思わないではいられなかったのです。そしてまた、やれば、歴史家たちのようにやれるのだということも、考えないではいられなかったのです。小さい身でしたが、方言研究の学問をおこす責務とでもいうようなものを、しきりに考えました。——まったく青年の旅だったと申さなくてはなりません。

\* \* \*

人間の歩みの中には、ときに、このような異常な体験があるのではないのでしょうか。そして、人は、しばしば、そのような体験によつて、しぜんに導かれていると思うのです。

## □ 四国の深いおもしろみ

四国の全体は、近畿地方のアクセントと同じようなアクセントでいざろられていきます。近来、共通語の普及とともに、だんだん変わってきていますが、それでも、だいたいの調子は、やはり近畿アクセント的です。海をへだてたこの四国が、なぜ、近畿アクセントに似かよったアクセントを示すのでしょうか。これは、興味ある事実であつて、

同時に解きたいなぞです。

四国と九州地方とが深い関係にあることは、発音、文法、その他の点で、いろいろに認められます。たとえば、ザ行音ザとダ行音の発音の区別にしても、土佐と南九州とは、ともに、そのきれいな区別を見せています。こういう四国地方がまた、東は淡路をへて、紀州と、方言上、よくつながりあっています。たとえば、ことばづかいのうえで、「ダ」一というのでも、

○アルンジャダし。      △阿波▽

○ナイワダし。      △紀州▽

と分布しています。(わが国、古来の南海道という呼び名が、いかにもと思われるのであります。) そうですねば、文法上の二段活用は、伊予の南部にあつて、西は、九州に著しく、東は、紀州にその系脈をたどることができます。

——紀州の二段活用は、南予のその比ではなく、かなり広い範囲に、そうとうによくおこなわれています。

このように、四国も、南半に注意すればするほど、外の東・西との深いつながり関係が見てこられます。方言状態の深層にたち入って見る時は、海に境された島の四国も、けっして単純に孤立しているものではないことがわかります。もともと、四国は、本州とも、方言上、深い関係にあつたのでしよう。

それが、どういう歴史的推移の結果でしょうか、今では、中国地方のとはかなり違った方言状態を見せるようになっており、一方、近畿とは、密接な関係を示しているのであります。

# 近畿を歩く



志摩半島国崎にて方言採集中の筆者（左）

## ○ 紀州日高郡

紀州は、問題に富む所です。その南部に、はいつておもしろく、北部に、はいつてもおもしろいのです。九州・四国西辺とともに、二段活用を見せていることは、さきにふれたとおりです。昭和十六年の四月、私は、その二段活用をじゅうぶんに聞きとろうとして、北紀日高郡入りをしました。

汽車で、御坊町（今は御坊市）に着いたのは、日もとつぶり暮れてからでした。御坊の町は、有名な道成寺の手まえにあります。町を歩いて、一軒の宿屋を見つけました。夕食どきも過ぎたらしくて、なんだかひっそりとしている宿屋にあがると、もう、わびしくなりました。電灯の光のよわい部屋で、すすけたふすまに向かつてすわったところへ、例の宿帳がきます。早くあすになればよいとの思いにかられます。目的地をひかえて、ほんの足だまりの土地で、こんなにして一夜を明かすのは、一種、つらいものです。あすの自動車便の時刻を問いあわせて、ともかく早く寝ました。

明けて、朝一番の御坊発に乗ります。きょうは、できるだけ奥まではいりたいのです。バスは、日高川ぞいにのぼって、川上村まで来ました。終点で下車して、川上村の役場を訪ねます。

村長さんがるすで、助役さんに会います。日高のことを聞きに来ましたと雑談をかわしていると、むこうの机に

ついで事務をとっていた老書記さんが、小さな紙きれを持ってきて、机の上にそっと置いていきます。一口ものを言わないで。見ると、その紙には、「山路言葉

ノーラ ジャー」と書いてあります。さ

っそく助役さんに老書記さんを招いてもらって、三人でいろいろ話します。

日高川をなお上流にのぼると、下山路・中山路・上山路の三か村があるそうです。

このことばが、「山路言葉」と言われて

いるとのこと。どうしようかと思案していると、そのもう一つ奥の童神村の話が出て、この温泉へは、大阪の遊び客がよく来るといふことです。それは困りました。もっと、荒らされていないほうへ。と云いますと、

「そんなら、この川上村のいちばん奥の、つまりに、神場かたばという所がある。昔からの温泉だが、家がたった二軒だ。

そこは、もう、だれも行かない。」とのこと。家二軒の温泉とはと、地図を見たら、このコースは、たしかに、行きづまりコースで、日高郡の北の山地にはいつています。ここなら、外界の力などに荒らされてはいないだろうと思つて、二軒というのは特殊すぎるとも感じましたが、ひとつ行ってみよう。という気になりました。それに、こんどはまた、案内人をやとつて、これを活用してみることも考えました。こうして、きょうは、神場コースときま



ります。

役場に頼んで、「この土地のはえぬきで、私に、方言まる出しでしかものが言えないような、話しずきの人」、案内人をさがしてもらいます。居あわせた人たちが、ぐっとくだけた評議を展開しました。こんなのを聞いていると、もう、来てくれる人の風ほう、(風貌)がわかるというものです。山下マサ一さんが来てくれました。四十歳ちかいです。当時の私から見るとは、いいおじさんでした。

「イテ クルル カ。」(行つてくれるか?)

役場の人こう言います。さあ、しぜんこの言いかたに、二段活用が出ました。——「くれる」が「クルル」とあります。マサ一さんは、

「ベント タカンナラン ナダヨー。」(弁当をたかなくちやならないねえ。)

と言います。私はすぐに、「おひるは、どこかで無理をお願いして作ってもらいましょう。」と言いました。じつさい、この方言あるきでは、行つた所しだいで、その時刻の食事をどこかにお願いするのが、なにより趣が深く、かつ、えものも多いことです。(方言の旅としては、機会を、このようにしてとらえるべきでもあります。)

「ホンナ、イカ ヨー。」(ほんなら、行くとしようよ。)

山下さんは、自宅に帰つて、地下たびにきやはんがけで出て来てくれました。

「イマカラ イタラー、ヒーン クルル ズ。」(今から行つたら、日が暮れるぞ。)

元氣よく歩き出します。お気のどくだけれど、荷物を背おってもらいます。こちらは、カードとえんぴつを持って、書きつけつつ歩きます。

「ソレカテ カンバアタシー ヤドヤ アリヤセンシ ナイ。」（かといって、神場あたりに、宿屋はありはしないね。）

と、方言のものを実現してくれます。心得たものです。万事のみこんで、この変な旅人を、怪しまないでつれて行きます。

こちらは、この人と歩くことが、この川上村のことばの中で暮らすのと同じことになるようにと心がけます。心のひまは、すこしもあります。よもやまのことを話しつつ行きます。ときれば、そこらあたりの家のようすや、人の働いているありさまを、こちらから、話題にします。一木一草も話題にして、話しをつなぎます。先方は、こちらがいちいち書きつけることに、すぐ無関心になりました。おもしろい話題になると、みずから興にのって、くりかえし話してくれます。私は、ポケットのキャラメルを出してすすめ、自分もほおばり、親しみは、いよいよ増します。冗談も言いあうようになりました。四月の山みちですが、へびが一匹、横ぎって、ふたりをびっくりさせました。

「イツプク ショー ラヨー。カナワン ナー。」（いっぶくしようよ。えらくてかなわないなあ。）

こう言って、休息です。右のあと半分は、冗談です。むろん、休むのも、私のために休んでくれるのでしよう。

「。チャーレー。キッタ ナー。」（あれまあ。伐ったなあ。）

前の山の伐られているのを見て、山下さんは、本気でこう言いました。ここらのアクセントは、いかにも近畿アクセントのようですが、

○ソガナ コトー シタラ テンニヤワナ。ヤメサツシヤレ。

そんなことをしたらだめだ。おやめよ。

などというのは、かならずしも近畿的なアクセントではありません。これまでのことばにも、近畿アクセントと考えられるものからはそれたものが、しばしば聞かれました。紀州は、問題の土地です。大和南部十津川郷のアクセントが反近畿的であることは、吉町義雄氏のご発表以来、広く注意されていますが、おそらくは、十津川郷だけが孤立的なものではありませんまい。十津川から紀州にかけて、広く言えば、南近畿地方に、その「十津川のなもの」は、精査されなくてはならないのではないかと思います。一度、熊野路から十津川にはいって、北にぬけた時も、その感を深くしました。近畿と一口に言いますけれど、京阪神の内郭部から外に出ると、だんだんに、違ったおもむきのものが見えてきます。——アクセントにかぎったことではありません。

ことに、紀州方面のように、はるかに九州ともあい応じたりして、方言の古脈を示しているところになると、なかなか、ひととおりの観察では、ことはすまないように思われるのです。

それにしても、紀州で、北部方面にとくに二段活用の著しいのは、どうしたことでしょうか。さきの「いっぶくしようラヨー。」に見えた「ラ」は、「オマイモ イコ ラー。」など、北紀にも南紀にもおこなわれています。

天氣があやしくなりました。山下さんが、道ぞいの人に、

「ナツトダロー ニ。キズカイ ナカロー カ。」（どんなもんだらう。気づかないなからうか。）

と言います。その返事は、

「フ|ラ|ントモ イ|エン| ナー。」（降らないとも言えないなあ。）

でした。（やはり、アクセントがいちいち問題になります。）

山下さんは、

○ガケカラ オチャンニモ カギラン。

がけから落ちないにもかぎらない。

と、「オチャン」の言いかたもします。「オチャン」は、「落ちらん」の転でしょう。大阪府下などと同じ現象です。「大阪サカイ」などと言われる「サカイ」は、この山下さんでは、「サカ」です。

神場の手まえ、上初湯川（カミオブイ）に着きました。神場は特別の所とすれば、ここが、もう、川上村のいちばん奥の部落です。製材がさかんなようです。区長の前田実之助さんのお宅に案内されました。前田さんは、製材所の主人でした。四十三、四歳の剛腹そうな人で、ひもじかつたろうと、さっそく、おうちの人に、私どもの昼食の用意をさせてくれました。もう三時をまわっています。大きなおひつが出たのには驚きました。私どもふたりは、おひつを囲んですわります。

神場へは、これから九十九ヒジ（まがり）の山越しです。＂そろそろ出かけないと、暮れましょう。＂と、前田さんが立って、お米のしたくなどをしてくれます。そのことばに、

○モツテカンセ。

持ってお行きなさい。

○一回や二回 タブルダケナラ（食べるだけなら）。

というのが出てきます。かさも、

＂サーサー。モツテカンセ ヨ。＂（さあさあ。持ってお行きなさいよ。）

でありました。案内の山下さんは、「神場のばあさんが待っていますよ。」と言いながら出かけます。「おばあさんを知っていらっしやるんですか。」「ええ。なかなかしつかりとした、昔かたぎのおばあさんですよ。」

神場への九十九ヒジ、さすがに山奥のおもむきです。「サルスベリ」という木があります。この木は、こういう奥山にしかないのだそうです。すこぶる印象ぶかくて、帰りには、この「サルスベリ」で、みやげのつえを作ってもらいました。（調査の旅をすると、記念につえを作ってもらうのが、私のならわしです。九州肥後の五家荘以来のことです。その時は、案内してくれた初老のおじさんが、持っていた竹づえを、記念にと私にくれたのでした。私とても、ふたりで二日、しゃべりとおし、歩きとおした山みちの思い出に、なにか、このおじさんの身についたものももらいたかったのです。おじさんは、私にその竹づえをくれると、そのへんの木で、まにあわせのつえを作りました。）

九十九ヒジをくねくねとあがって、山の頂上まで来ると、むこうへくだります。しいたけづくりの「ホタ」が、そこここにたくさん組んであります。「ホタ」にするのは、「シデ」と「ホソ」（檜）で、こういう材に富んでいる山を、ホタ山と言うそうです。山下さんに、神場のおばあさんのうちのようすを聞きながら、山を、谷あいにおりました。

家があります！ まさに二軒だけあります。本家と分家なのだそうです。

発電設備のそばを通ります。この山ざとにこんなものがと驚かされましたが、これが、本家の、若死にしたむすさんのやりかけた仕事なのだそうです。本家の表に出ました。

「ごめん。」とはいると、七十八歳とのちにわかったおばあさんが、こたつにすわって、椿の葉で巻いたたばこをすっています。案内の山下さんは、かけたままで、くだけたあいさつをします。所も神場、この家の姓も神場姓です。

山下さんの紹介にまかせていると、おばあさんは、「ジチメナ」（満足な）ことはしてあげられぬが、

「ことばの クサタゲナ コトナラ、キケテ アグル ヨ。」（ことばの、変なことなら、聞かせてあげるよ。）

と、受けいれてくれました。さつそくあがらせてもらつて、おばあさんとさし向かいに、こたつにはいらせてもらいます。——目だたぬようにカード書きをするのには、ちょうどよいぐあいです。山下さんは、ご苦労なことに、すぐ引き返すことになりました。

このおばあさんは、じつにしっかりとしたおばあさんでした。話していると、嫁さんも帰つてき、二十歳たらずの長男さんも、小学校がよいの弟妹も帰つてきます。やがて、鶏も土間の天井にぶらさげられたとや（鳥舎）について、お夕飯となりました。

みんなで、いろいろを囲んで、山のおかゆをいただきます。ごはんを（おひやでした）、まず、いくらかちやわんに入れてもらつて、その上に、おかゆを入れます。思い思いにおかゆをよそつてはたべるのです。みな、いくどもおかわりをするので、こちらもつりこまれて、おいしく、いく杯も食べました。私のために、とくに作ってくれたおらずに、あゆの干したのを煮つけたものがありました。私にだけではもつたいたいと遠慮すると、いや、うちの兄もたべるからと、おばあさんが言います。あととりの孫むすこにおばあさんが思いをかけ、望みをかけていることは、なみたいていではありません。おばあさんの話しです。

「五年や六年、生キリタイ モンジャガ、イキレル カシラン。」

おばあさんの、この世にかける願いです。さつきの発電設備、あの発電のしかけこそ、おばあさんの、悲しみにた

えない思い出ぐさです。当家のむすこさんは、よくできた人だったそうです。器用な人で、発電のしかけも、自分のくふうで、あんなにやりかけたのだそうです。おばあさんは、むすこさんを惜しむ心を、今や、この孫むすこさんにかけています。なかなかの氣じょうぶさで、

「アマリ ヒトニ メンド ミセマイ ヨラ。」（あんまり、人にめんどろをかけまいよね。）  
と、うちの人びとに号令もしているようです。

「こうこう オモテ アルンジャ。」  
と、いろいろな、世に生きていくうえの、老とじ（刀自）の心がまえを語ってくれます。

「ユドモ ダマイテカラ ポチポチ ヤリヨリリマスラー。」（子どもたちをだまして、ぼちぼちやっていますよ。）

私は、食事中も、幾度となく、はしをおいて、おばあさんのことばを書きつけ、また、ほかの人のことばも書きつけました。小さい人たちも、だんだん私に慣れて、学校の話しをしてくれます。毎日、上初湯川の分校まで通学しているのだそうです。私はおもわず、この幼い弟妹が、手をとりあつて山みちを通う姿を、まぶたにうかべました。

いろいろばたの長い食事がおわると、おふるです。ここのおふるが、名もある神場温泉でした。冷泉で、湯はわかしますが。

「ユバモ モツレテ シモテ、イルトバカリジャ。」（ふる場もいたんでしまつて、ただ、はいられるというだけだ。）

おばあさんの、このあいさつに送られて、湯殿に行きます。おも屋の隣に、別むねで、温泉場が小さく建ててあり

ました。木で造った大きな湯ぶねにひたります。はだの感じで、あ、あ、温泉。と、すぐにわかりました。人ざと離れた神場の温泉で、ろうそくのあかりに黒く光る部屋の大きな湯ぶねに、ひとり、ゆっくりひたっていると、なんとなく、仙郷にでも来たような気分になりました。木のふろの湯は、たださえおんぼりとやわらかいの、これは温泉の湯なので、はだへのこちのよいことは、ひととおりではありません。嫁さんが、静かな声で、かげんはと聞いてくれます。おとなしい嫁さんでした。

標高、幾メートルというのでしょうか。そんなことにうとい私にも、ここは、かなり高みになった山奥らしく感じられました。その一つの谷あいの、その名もいわれ深そうな神場の宿に、一夜をめぐまれて、私は、身も心もほかほかとなります。迷惑をかけないようにと、私は、早くやすませてもらいました。寝床の中で、隣部屋に寝ているおばあさんと話します。おばあさんのことばを聞いては、暗やみの寝どこで、心おぼえを書きつけます。この時、私はふと、中等学校時代のことを思い出しました。ある冬の夜、その学校の講堂で、めい、めい、(盲)のおじいさんが講演しました。お話しにつれて、ときどき板書します。塗板に向かって、大きい字をいせよく書きました。話しのきりがひとつつくと、紫のはかまをはいた、かいぞえの娘さんが、塗板の字を消すのでした。

おばあさんの寝ものがたりには、こんなことがありました。

□ 土地は土地としてのことばだから、よいもわるいもない。しかし、時世だから、おたがいにハナシを通ずることがデクルように手順をしようと、おまえはほねおるのだと思っている。

□ 私は、どこへも行かぬけれども、孫らは、どこへ行って人に会うかもしれぬ。その時、話しができぬから、そんなことのないようにしようと思つて、おまえは勉強しているのだろう。

□ “山奥の子どもでも、ポチポチニ、人の言うことを聞きわけるようにしようとての、おまえのほねおりだと思  
う。”

□ “世も進んでくるのだから、子どもも、広い土地のことばに、……………”

□ “こうして調べて、日本のスマンゴ（すみっこ）のほうまでも、きれいなことばを広めようとするのか。”

□ “こんなすみのほうで、年寄りがこんなことばを話しているのを、なおすようにするのかと思うておる。”

□ “三年四年のちには、晴れやかな日本にしようとのほねおり。”

聞くほどに、ほどに、教えられ、むち打たれました。ほんとうに、ことばの、晴れやかな日本’にしなくてはなりません。方言調査の意義、方言調査者の使命、これらを、おばあさんにしみじみと教えてもらいました。おばあさんは、また、こんなことも話してくれたのです。

□ “このごろの若いもの言うことはわからぬ。わからぬので、年寄りには、若いものと話しをするのをきらうよう  
になった。”

□ “あんばいように聞こうと思うて聞くのに、ちっともわからぬ。しかし、嫁や孫としては、わかるように話して  
くれるべきだ。”

切実な言語問題です。人が、自由にものが言えて、かつ、だれの言うこともよくわかるというように、はやくならな  
くてはなりません。まったく、ことばの晴れやかな国にならなくてはなりません。

山がのスマンゴ’にも、こんなおばあさんがいることに、私どもは、目を見ひらかなくてはなりません。この夜の私  
は、ただただ、おばあさんに頭をさげるばかりでした。

おばあさんの意見は、なお、こうです。

□「ほうも、しかし、ヤマガノ コトバワ イヤシナイ ヨノ！。アツサリ セン。」

□「学校の先生はほねをおつてくれるが、なかなかおらぬ。うちへ帰れば、もう、土地のことばで、……………」

右には、卑下の意識もありましょう。

「しいたけがハユル」とか、「オツル」（落ちる）、「オクル」（起きる）、「ワスルル」（忘れる）、「ナガル」（流れる）とかの、二段活用のことを問に出したときも、

「シタ マワリトロインジャ ナイ カナ。」（舌がまわりトロイのじゃないかな？）

と、考えを述べてくれたりしたのです。「おこらルル」「しからルル」とも、「使に行かスル」とも言います。これらの二段活用では、舌は、マワリトロイどころか、まわりさといのかもしれない。おばあさんは、ここでもやはり、卑下の意識をおこしていたのでしょいか。

つぎの朝、さんさんと輝く朝日を受けて、門さきに立ちます。家の下はすぐがけで、谷あいには下に細く開けています。そのむこうのほうに、山田がいくらか段々に並んでいるのが、美しく見えます。ほっと、この二軒のうちの豊かさが、胸に感じられるのでした。

孫むすこさんにつれられて、しいたけ山の見学に行きました。じつにみごとなしいたけ山でした。大きなのをいくつもいくつも取ってみます。うまれてはじめてのしいたけがりです。谷川をのぼると、それこそ生き生きとした緑の葉っぱの群れ続くのが見えてきました。野生のわさびだそうです。どっさりと青葉を見せているのには驚かされませんでした。「これがわさびですか。」と、いくたびも問うたことです。ここで、「サルスベリ」のつえを作ってもらいま

た。

家に帰ると、温泉の朝ぶろにはいれとのことでした。思いもかけないことでした。湯殿の戸をあけて、朝日をま受けに受けながら、ずっぶり湯ぶねにひたります。黒ずんだ木の、大きなふちに囲まれた、ほんとにきれいな湯から、湯気がゆらゆらと立ちのぼります。まことにすがすがしい感じでした。ひとり、「カンパオンセン！」と口ずさんでみます。湯気が、私の幻想をかきたてます。

朝食前後、家の人たちのかわすことばを、ひとしきり書きつけました。小さな子どもさんたちは、雨具の用意をして、学校に出かけます。山みちをのぼって行く、あね・おとうとの姿が、いじらしく見えました。ふたりの子がホタ山に消えて行ったあと、私は、十時ごろまで、また、こたつでの会談にめぐまれました。予定の調査項目についての聞きとりは、一般の話しあいの記録とは別に書きとめることに努めてきたのですが、そのほうの仕事もおわりました。もはやそろそろ、おいとまごいをしなくてはなりません。しかし、おばあさんの話しはつきません。

□ “土地のことばを笑うのはホンマ カイ。笑うのはチツト アヤマツトンヤ ナイ カイナ。これだけの日本全国があつたら、土地土地で違うのがほんまじゃないか。”

□ “孫らは、いつ、広い土地のよい所へ行って暮さねばならぬやらわからぬのだから、よいことばを、習うておいたよりけっこうなことはない。”

おばあさんから、言語教育論を聞く思いがします。

トカイノ ハナシモ ナ。シテ キケテ モラワニヤ。“（都会の話しもね。して聞かせてもらわなくちゃ。）とも言います。おばあさんは、

□「奥の方の人も、よその方の人とまじわらねば「コンジヨガ ヒラケヌ」。」  
 ことを知っていました。

おばあさんの意見には、頭がさがります。こうした話しを聞かせてもらいうちにも、方言の大事なことばづかいが、つぎつぎにとらえられたのですから、私は、聞き手として、まったく果報なことでした。「オル」と「アル」とのことは違いなども、しぜんのうちに、受けとめることができたのです。

○タカサン オルカイ。

たかさんは、いるかい？

○ウチニ イマ アル カイ。

うちに、今、いられるかい？

このように、「オル」も「アル」も両方つかいますが、「アル」のほうがよいかと思っておる。「とのことでした。紀州に、この「アル」「オル」のつかい分けが、だんだん見いだされます。おばあさんから出た、もう一例、

○アノ ヒトワ ヨー コエテ ヤラ ヨー。

あの人は、よく肥えているわねえ。

では、「オル」「アル」の「アラ」が、「ヤラ」となっています。

いよいよお別れします。なくなられた若主人のお位はい、(位牌)にお参りして、外に出ます。むすこさんが、上初湯川まで送ってくれます。なましいだけのおみやげの包みを、嫁さんがこしらえてくれる時、おばあさんが、

「アレ ナニー イレマシタラ エー ワダ。」(あれを、なにへ「かご」をさす。Vお入れしたらよいわな。)

と言いました。ここに、「マシ」の敬語が出ており、「ダ」という特別の文末詞が出ています。

「ツイ オカンセ。」(そのまま、そこへ置いときなさい。)というようにことも、おばあさんは言っていました。家庭内での、ややていねいな言いかたとして、おばあさんは、よく、「サンス・ンス」ことばをつかっています。けさのご飯のときも、おばあさんは、学校行きの子どもさんたちに、

「オマイラ ハヨ タベサンセ。」

と言っていました。——私に対しては、

「ゾノ サカナ タベテ ミテ オクンナハレ。」

と、「ナハル」ことばだったのであります。

おいとましながらも、つきつぎに、耳にはいつてくることばを書きつけていると、おなごりに、おばあさんが、

「ワタシノ ハナシワ ホン ハクマイデスサカイニ。」(私の話しは、ほんに白米へまっ正直でかけねのないところVですから。)

などと言います。「ハクマイ」というのは、この時、おばあさんが思いついたしゃれのようなではありませんでした。

以前から、このような言いかたをしてきているらしく思われました。なお、

○ホン キキガクデ。

ほんに聞き学問入耳学問Vで。

とか、

○ガクニ スケナサッタラ、…………。

学問に通じなかつたら、……………。

とかの言いかたを、おばあさんがしたのも、ここに書きとめておかなくてはなりません。

おとなしい嫁さんが、たった一つ教えてくれたのも、珍重して、ここに書きつけておきましょう。『こちらは、「オセワデ オリマシタ。」（お世話でございました。）のように、年の多い人は、たいがい「オリマシタ」と言います。若いものの「ございました」と言うところを、昔の人は、「オリマシタ」と言います。』

カードとえんぴつとを左右の手に持ったまま、さよならをします。むすこさんについて坂道をのぼります。むすこさんが持ってくれたしいたけの、新鮮なおいが、うしろの私に伝わってくるようです。その、新鮮な色あいも思われて、おのずと、山の中に、澄みきった気を感じます。

神場は、ほんとに、うきよ離れた、清らかな住み里です。分家のむすこさんのタカさんは、本家のおばあさんの次男で、養子に行ったものだそうです。一軒の家みたいなこの二家庭で、お正月が来たら、どんなに言って年頭のあいさつをかわすのでしょうか。秋のお祭りといつては、どんなごちそうを作り、また、どんな着物を着て休むのでしょうか。

むすこさんと私と、ふたりの間には、話しはあまりはずみません。九十九ヒジの話を出したら、

『ダイブン、ボカー、ガツコイ カヨー タケンド、コノ ヒジャー マダ ヨンダ コトー ナイ ワ。』（だいぶん、ぼくは、学校へ通ったけれど、このヒジは、まだ、数えたことがない。）

とのことでした。上初湯川、前田さんの家に着きます。

神場をあとにして、案内人を頼みながら、つぎつぎと、方言の部落をたどります。

### 片串へ

こんどは、片串かたくしという部落を通って、山峡づたいに日高川のほりまで出、それから、川ぞいに、もとの川上村の役場までもどることにしました。(川上村の部落は、みんな歩いてみることにしたのです。)前田さんが、案内のおばさんをやってくれます。こちらの注文がかなって、五十四歳のおばさんが来てくれました。このおばさんは、どことなく超然としたところがあり、ふいとおもしろいことを言います。前田さんのあっせんには、頭がさがります。

おばさんにこしらえをしてもらう間に、私は、ちよつと上初湯川の小学校を訪ねました。御坊町出身の校長さんがいられました。奥さんもその先生で、コーヒーをはこんでくれます。ここで、さいわい、日高郡の概観調査に、しばしの時をうつすことができました。めぼしい土地ことばというものを、校長先生が三十ばかりも書いてくださいました。二段活用のことをたずねたら、先生が、

ヒダカのウマは、コクル(こける)ほどカクル(駆ける)。

との言いぐさを教えてくださいました。「アル」と「オル」とについては、

〃しものほうでは、すべて、「アル、アル」と言つて、「オル」は、ほとんどつかわなかった。こちらへ来て習つたほどである。「アル・オル」の尊卑は感じない。〃

とのことでした。

いよいよ、おばさんと、片串へ歩きます。

「イーヤ。ナカナカ。ムガクデ、ナーニモ シリマセン。」

これが、おばさんのことばのはじめです。私は、おばさんから出てくることばを、書きつけ書きつけ、進みます。話しかければ、いくらでも応じてくれるおばさんです。

まったくの谷の底を歩きます。両がわの山林が、そうとうに深そうです。家は、たまにぽつんと、一軒、二軒が見つかるばかりです。

○ソノ カイヨ。

これが、おばさんの受け引きのことばです。そして、なにかを説明してくれる時は、

「ココタシワ、（ここあたしは、）（ここらあたりは、）」

ということばで始めます。

「コノ ウエガ ノー。カタクシデスラー。」

というわけで、片串に着きました。山はだの丘に、片串部落があります。

ここで、一つの経験をしました。かねて、案内のおばさんに聞き聞き来たことですが、この片串部落に、鹿児島のほうから嫁いつて来ている人があります。私は、その人に会いたいと思いました。会って、「この土地にはいられて、こちらのことばをどうお感じになりましたか？」とか、「鹿児島ことばをどんなに思いかえますか？」とか、「違ったことばのくにに来て、鹿児島ことばのあなたは、どんなふうに苦しい思いをなさいましたか？」とかいうようなことを、尋ねてみたかったです。

さいわいなことに、その人が谷あいの川原の仕事に出ているのに、めぐりあうことができました。案内のおばさん

に、私の気もちを話してもらおうと、その嫁さんは、じゃあ、すこしというので、仕事を休んでくれて、私ども三人は、一軒の家の縁さきに腰をおろしました。嫁さんは、小がらな人で、三十四歳とのことでした。問わず語りに話してくれるのを聞いて、私どもは、涙をもよおすことも多かったです。あの南九州地方から、ここまで、よくまあ嫁いって来てくれたものだと思います。なんでも、片串町上本町六丁目というようなことも言われて来たのだそうです。どんなに里が恋しいことでしょうか。嫁さんの話しには、その気もちがにじみ出ていました。いつか、この人のおかあさんが見に来てくれたそうです。その時は、この嫁さんは、おかあさんの鹿児島ことばを、聞きとることはできなかったけれど、*「十くちのうち二くちも」*、鹿児島ことばで返事をするのができなかったということでした。おかあさんは、あとで手紙をよこして、おまえのことばは「ナマイキナ」と言われたそうです。嫁さんは、じょうずなこの土地ことばで、「ミナ ユーテ クルル」（みな、言ってくれる）などと、二段活用も自由につかっています。この人の主人さんは、鹿児島のおかあさんを、岸和田まで送って行き、帰って、この嫁さんに、*「しかられたのやら、ほめてもらうたのやら、ちつとも、味、わからずにすんだ。ただ、おかゆがおいしくなかった話しをしたのがわかった。」*と言ったそうです。

### 片串から滝頭まで

片串から、日高川ぞいの滝頭まで、また、別の案内人のおばさんにつれて行ってもらいます。こんどは、五十五、六歳の人です。片串の区長さんに世話をしてもらいました。

おばさんのことばを聞きながら歩きます。はきはきともの言う人でした。地名なども、つきつきに、さきだつて

言つて聞かせてくれます。おどけたもの言いもし、また、ときに、むつつりともします。日も暮れかけたせいか、さつさと歩きます。——さつぱりとしていて、かつ、よほどいいねいなどころもある人です。片串ことばは、まず、この人に代表してもらふことにしました。

「あのウメさんの来たころは、ワタシラ ヨー ワケナンダ デ。」（わたしらは、よう聞きわけなかつたよ。）

これは、さつきの嫁さんの鹿兒島弁に対する批評の一ふしです。

学校からもどつて来る子どもたちが、見ず知らずの私に、

「タダイマデ オリマシタ。」（ただいま帰りました。）

と、ていねいにあいさつをしてくれます。

その学校の所まで来ると、案内のおばさんが、校舎の新築されたのをさして、

「コレ キョネン タツテ（建つて） シュツタイ（出来） シタンデス。」

と言います。

日高川にかかった滝頭橋まで出ました。つり橋です。

「センセ サキー ワタツテ オクレ。」

とおばさんが言います。元氣を出して渡ります。ほどなく、村長さんのお宅に行き着きました。

「ヤーマー。イテ オイデタ ノカ。」

これが、おばさんの、村長さんのうちの人に対する第一声でした。ここで、おばさんと別れます。

「オシズカニ オカエリナサイマセ。」

「おばさん、用心してね。」

「アナタモ アナタモ。」

この最後のことが身にしみました。おばさんは、こう応答して、手が足もとに届くほどに深くおじぎをしてくれたのでした。

### 河原川まで

ここから、あの役場のある河原川までは、道を急がなくてはならないし、かつては変化を求めることにして、案内人は若い男の人を頼むことにしました。ただし、結婚して子もある人と、希望を申しました。案内の人は、つねに、ことばの問題を提供してくれる人であってほしいのです。

自転車を用意した好男子が来てくれました。この人と、二時間ばかりをかけて、日高川ぞいの道をくだりました。この若い人からは、動きつつあるはずの、川上村のことばの状況を聞くことにしました。ことばは、古い世代の人から若い世代の人へ、受け継がれていきます。それが、この村では、どのようになっていますか。青年たちは、老年者の変わったことばを、どう見ているでしょうか。また、若い人たちは、他地方の、とくに都会地のことばを、どのように取り入れているでしょうか。どの地方のことばに同化されつつあるでしょうか。自分らの言語生活を、広い社会に適應させることについて、若い人は、なにか考えているでしょうか。さらにはまた、この人たちは、小学校児童の、より新しい言語生活のようすを、なんと見ているでしょうか。こういったことを、さまざまに話題にしたのです。

### 河原川の夜

河原川に着くと、役場の老書記さんの案内で、竜神村出身の人のところへ行きました。その人は、三十歳たらずの人で、この地にとついで来ています。赤ちゃんを抱いて、里ことばの竜神ことばを語ってくれました。その地に行つてのことではないので、ある程度のことしか期待することはできませんが、ともかく、質問要項を順序にたどつての問い聞きもしました。

帰りに、書記さんにたしかめると、「まあ、あんなものでしょう。」とのことでした。この夜は、宿へ、助役さんと、もうひとり、小学校の先生で、この村の人である西川好次郎さんが来てくれました。

西川先生には、とくに、子どもの方言生活の指導についてお聞きしました。この子どもたちは、一般に、四年生ごろから、方言を自覚するということです。

つきには、近隣の方言状態についての、ふたりの人の観察を聞かせてもらいました。私としては、これを、川上村調査の、一つのしめくりにしたいです。

最後に、あす、有田郡へ山越しをする事について、いろいろの手はずしてもらいました。

#### 有田郡へ

翌朝になります。約束の七時より三、四十分も早いのに、もう案内の人が来てくれます。見るからにきちょうめんらしい、五十四、五歳のおばさんです。山越しじたくのかいがいしいでたちで、しよ、うぎ、(床几)に腰かけています。聞けば、助役さんの家の畑を手伝ってくれるおばさんだそうです。きょうは、半日がけで、ここから、北の有田郡へ、私をつれて山越ししてくれます。

川上村のことばも、このおばさんで、いよいよおしまいです。今までの仕事では知られなかったことが、このおば

さんから聞かれるとよいのです。

「マチラエ デタラ、マワツテ ユーガ、イナカワ モー ジーノ トーリ、マツスグ ユー。」（町なんかへ出たら、まわった言いかたをするが、いなかは、もう、字のとおり、まっすぐなものの言いかたをする。）

と、このおばさんは、まず、いなかのもの言いのまっすぐなことを言ってくれます。じっさいそうなので、人にももの言う言いかたは、たとえば、その人の目の前に、棒のようなものをばんとほうりだすのに近いありさまです。もってまわった言いかたなどはしないで、いかにも直接的に、あっさりと言ってしまう。おばさんは、このことを、まっすぐな述べかたで、「ジーノ トーリ」などと、おもしろく言ってくれました。

まっすぐな言いかたは、本質的に明朗です。おばさんのことばにも、なんら、裏というものがありません。かげがありません。こんなのが、じっさい、野の中の生きたことばでありましょう。おばさんのことばは、学問が求めることばです。

方言を聞くことは、じっさい、だいたいな学問だと思えます。方言を聞いて、ただちに、生きた学問を見いだすことができます。——（こうして、話しながら山みちを踏みわけていくことも、図書館の中で、文献と組みうちして努力することも、まったく似たようなことではないでしょうか。）私は、都から遠ざかり、ことさらに、ひな（鄙）の中にはいつて行つても、すこしもさびしさを感じないばかりか、かえって、大きな喜びを覚えます。生きがいを覚えるのです。

ですから、方言の山野に、沈潜しうるだけ沈潜してみたいと思えます。じっさいにそうすることができた時こそ、私どもが日本語にとり組んだ時だと思うのです。

おばさんと並んで歩きながら、心の眼をかつと見ひらいたのでした。坂にかかつて、おばさんと前後しながら歩いた時も、その道が、そのまま、厳肅な方言の道のように思われました。

楽しかった、おばさんとの会話は、ここでは割愛します。

山むこうの有田郡内におりきったのが、午後の一時ごろです。宇井という部落の、とある一軒のうちに落ち着きました。おばさんの案内です。腰かけて、弁当をつかわせてもらおうとすると、その家の主人が、まあまあこちらへと、土間のへっついそばに招いてくれます。おいしそうな粟がゆを出してくれました。ものめずらしがる私に、案内のおばさんが、遠慮しないで、遠慮しないで言ってくれるのです。

おばさんは、ここから、また、あの山を越して、ひとりで帰ってくれるのです。気のどくでしかたがありませんでしたが、おばさんは、かえって、私のことを案じて、なごりを惜しみながら、たち去って行きました。見おくりながら、私は、山で、中やすみの時、いっしょにたべたくだものことを思いかえました。

#### 兵次郎さん

さて、こんどは、この家の主人さんのはからいで、四十歳ぐらいの兵次郎さんという人が、金屋という所まで案内にたつてくれます。——宇井ことばの話し手となつてくれるわけです。

「キシナオ アンズルサケニ ノー。」（帰り道を案じるからね。）

と、この主人さんが、男の案内人さんを見たててくれました。

それではと出かけます。万事、言いふくめられている兵次郎さんは、土地ことばまる出しでしゃべろうとして、かえって、ややぎごちないところを見せます。この段階を早くぬけてくれるように、こちらは努めなくてはなりません。

ん。

すぐに、へいぜいの兵次郎さんのことばが出はじめました。

さて、この人の道みち出してくれた質問と意見に、つぎのようなものがあります。

□ 〃土地のことばを聞き聞き、タビ― シヤン ノカイ。〃

□ 〃いろいろな土地のことばは、山奥へあがればあがるほど、かんたんなことばでしょう ノー。〃

□ 〃ヨヤス― ヤッテ クルル ヒトデ ナケリヤ。〃（気がするにやってくる人でなくちや。）

□ 〃じっさいの、じっさいの学問ですなあ。実地に当たったんじやによつて。〃

□ 〃きょうびは、学校で習う本では、まにあわぬほど、学問がかわつてくるで ノー。〃

□ 〃おまえのは、新しい、日本の学問だ。そのために、なまの材料を集めておる。そのことがよくわかる。〃

はじめて会つた山の人に、方言の学問を教えられます。北紀州の幾日かの間、求めて多くのことを聞き、いろいろのことを調べもして、まずはこの地方の土地ことばに親しみ得たかと思いつつ帰る道すがら、案内の人の、このようなことばに激励されたのは、なによりのさいわいでした。自分は無力です。方言調査をしながら諸地方を歩くにしても、力のおよばないことが多いのです。ただ一つ、体力だけがあります。とすれば、今は、この体力を唯一のたよりとして、根かぎりの努力を重ねていかなるはなりません。

## ○ 十津川ひとり旅

昭和十五年の夏です。紀州の新宮から、例の、プロペラ船に乗って、熊野川をさかのぼりました。たしか、十津川村の大津呂という所で下船したように思っています。時は、もう日の暮れでしたが、ひとり行く娘さんに、つれにしてもらって、十津川村の那智なち合あひまで歩きます。

といつても、べつに、きまった行き先があるわけではありませんでした。この娘さんが、あそこなら泊めてくれるだろうと言ってくれた話しを一つのたよりにして行くのです。今から思えば、冒険じみたことですが、当時は、若気のいたりで、山の中で困ってみてもおもしろいなあというくらいの気もちだったようです。

さすがに十津川村で、まったくの山ぐにです。かねがね、歩いてみたいと念願してきた、その十津川郷です。

どこでだったか、ひとりのおじさん（五十四、五歳ぐらいの人か）が、つれに加わって、話しながら歩いてくれます。いかにもがんじょうそうな、山のおじさんでした。

「オレン トコイ キテ クレン カ。」（おれのところへ来てくれないか。）

「オレン イコー カ。」（おれのうちへ行こうか。）

とすすめてくれます。ずいぶんありがたいことだったのに、その時は、どうした気分だったでしょうか、遠慮しながら



らことわりました。おれのうちは、この山のずっと上だ。" というような話を聞きますと、はじめて会った人に誘われて、そんな高い所の一軒屋へ行って、と、不安もよおしたのかもしれない。日も暮れて、木立ちも深い山みちで、見ず知らずの人が親切にすすめてくれるのが、かえって、いくらかのおじけをもよおさせたのかもしれない。おじさんが、いかにも残念だといった面もちで別れて行きます。やがて、那智合の、めざす小川さんのうちが見えた時、やれ、うれしやと思うとともに、はたして無事に泊めてもらえるだろうか、不安にも思ったのでした。

山はだの小川さんのうちにたどり着くと、四十歳くらいの主人さんが、さいわい、広島に行ったこともある人で、さつそくに、宿泊の願いを聞き入れてくれました。

この夜、十津川那智合の一軒屋で、小川さん夫妻から、たつぷりと、十津川弁を聞かせてもらいました。

「ハ夫↓妻↓イマ アロートカンニヤ イカン ガイ。」（今、洗っておかなくちやいけなないよ。）

「ハ妻↓夫↓アラウ マモ ナー ジャ。シゴトバーカリデ。」（洗うまもないよ。仕事ばかりで。）

これは、夫婦の会話の一コマです。「アラウ マモ ナー ジャ。」の「ジャ」の言いかたが注意されます。近畿地方は、全般に、「ジャ」よりも「ヤ」をつかいますから。夫君は、妻君に、「枕かけにあかがついて、さつぱりだめ

だ。"と言います。——"アカン ツイテ ラツシャ アリヤ セン ワ。"

この妻君が、カミウノカワ(神湯川)のことばとして教えてくれたのに、つぎのようながあります。

○ココノ オトワ ヨルノメ ヨー トリニ イタ(イタンジャ) シー。

うちのおやじさんは、「ヨルノメ」(夜の目)を取りに行った(行ったんだ)よ。

"「ヨルノメ」というのは何ですか。"と尋ねると、"赤松の中の肥えたところ"だとのことです。なるほど、私などが「コエマツ」(肥え松)などと言っているものです。子どもころ、この肥え松に火をつけて遊びました。この十津川でも、肥え松が、「夜の目」の役わりを演じたのでしょうか。

翌朝、目をさますと、かなり下の方から、せんせんと流れる谷川の音が聞こえてきました。起きて出ますと、主人さんが、あそこへ行つて顔を洗つてきてはと、すすめてくれます。喜んで駆けおりました。

朝食をおえたころには、この山はだいつぱいに朝日がさして、けさは、ゆうべのさびしさとはうってかわつた、十津川の晴れやかさです。きようは、かなりの道のりをふんで、十津川を北にはずれた大塔村辻堂まで歩かなくてはなりません。——辻堂からバスで奈良県の五条まで出ます。

朝、宿の人が、通りがかりの学校先生に、私をつれて行つてくれと頼んでくれました。一時間くらいは、その人と歩いたでしょうか、やがて、ひとりになろうとする時、さいわいにも、母子づれの人に出会いました。このおかあさんは、奈良から帰つて来る娘さんを迎えに、バスの終点の辻堂まで行くのだそうです。土地の人でも、やはり、山みちはさびしいのでもありましょう、男の子を道づれにしています。さいわいなことに、私は、その親子づれに従つて、辻堂まで出ることができました。

おかあさんがせっかく出むかえたのに、娘さんは、帰ってきませんでした。ご主人が帰って来たふうです。親子三人は、やがて、もと来た道をひき返すのでしよう。娘を旅に出すのも、十津川では、容易なことではありません。

## ○ 吉野川をさかのぼって

昭和三十八年の七月には、十津川の東にあたる谷を、吉野川ぞいにさかのぼって、とうだこ上多古という所に行きました。ここで、一週間の調査をしました。

とうだこ上多古というところ

土地の人が教えてくれたうたの文句に、つぎのようながあります。

シヨ|ガツ| キタラ

ナニ| ウレシ

ゴイシ|ミタヨナ| モチ| ツイテ

オユキ|ミタヨナ| ママ| タベテ

ワレキ|ミタヨナ| トト| ソエテ

コタツ|エ| ハイツテ| ネンネ|コシヨ|

正月来たら 何うれし

碁石みたよな もちついて

お雪みたよな まま食べて

割木みたよな 魚をそえて

こたつへはいつて 寝よう

これは、五、六十年まえのうただということでした。(魚のことを、「ワレキミ|タヨナ」などと言っているのは、なにか、吉野山林の歴史の一こまを物語るようで、興味ぶかく思われます。)このころは、主食は、「アワ」(粟)、  
「ヘー」(ひえ)、  
「ムギ|オカイ」(麦おかゆ)だったそうです。

昔の人は、「シオ|サバ」を、  
、いつべんはナガメ、いつべんはナメテ、三べんめに食べた。  
、そうです。

吉野杉の産地であるだけに、いろいろの山ことばがあるらしく、一つ、

○ホツ|ポー。ホツ|ポー。

というのも聞くことができました。これは、  
、まわり一丈からの大木を伐って、思いどおりの所へ、まともにその木  
が倒れた時に、喜びの表現として言うことばだ。  
、そうです。

この地方のことばの特色

土地っ子のNさんが教えてくれました。兵隊に行った時、つぎの三つを、いつも笑われたということです。

○オ|マイ|ラ

○ヤ|レ キョ|ータ ヨ|ー。

へおそろしい時やたまげた時につかうことば。ばあいによつては、「ヤレ キョータ ヨー。」と発音し、また、「ヤレ キョータ ヨー。」と発音します。▽

○イノ | ラー。

帰ろうよ。

奈良の兵舎で笑われたというのですから、吉野ことばが変わつていたということでしょうか。

右の「イノ | ラー」の「ラー」は、紀州にさかんなことばでもあります。この吉野川の川かみになると、南紀州方面との、ことばの似かよいを、だんだん見せるようです。ほかに私の気づいたものをあげますと、まず、受け答えの返事の、「ジャー。」「ジャージャー。」というのがあります。この「ジャー」は、おそろく、「そうぢや。」の「ジャ」でしょう。遠く西に離れて、大分県下にも、この「ジャー」ことばがありますが、南紀州でも、まだ、かなりよくこれがつかわれています。それが、この吉野、上多古にも、「昔の人は、よく言った。」と、今の人が話す程度にはありますが、存しています。もう一つ、「イワ | ナンダ」(言わなかつた)を、「イワ | ンダ」と言うのも、上多古で聞かれましたが、これまた、南紀州方面にかなりさかんな言いかたです。

上多古では、

○ナ | ラ | ワ | エ | je | ン | ヤ | サ | ー。

檜というのは、あれでいいんだ(方言ではないんだ)よ。

などと、対話のしめくくりの「サー」ことばをつかっています。これは、どちらかというと、三重県下によく聞かれるものです。

アクセントはというと、この上多古方面は、だいたい近畿アクセントの調子です。人の姓の「川口」というのも、「カワグチ」です。「それまでに」というのも、「ソレマデニ」です。「いいえ、どうしてどうして。」と打ち消すことばに、「ナカナカ。」というのがありますが、これも、近畿調と言えましょう。こういう調子ですから、十津川郷のアクセントのおもむきとは違うと言えます。

### 川口音吉翁

上多古に着いた日、宿に荷物を置くと、教えられて、すぐに、宿のうしろ上のほうに、川口音吉翁を訪ねました。当時八十七歳のおじいさんです。

音吉翁は、私が旅さきで出会った多くのおじいさんの中でも、一風、変わったおじいさんでした。「ガクワナ」イ。(学はない。)などと、おじいさんは、謙そん(謙遜)しながらも、私の方言聴録を見て、

「クチブリデ ハンダン デケルノワ ケイケンノ タマモノヤ。」(口ぶりで判断できるのは、経験のたまものだ。)

などと言ってくれるのでした。一週間の間に、音吉翁のうちをたびたび訪ねたのですが、ある時、

「おじいさん、はじめて私がおうかがいした時、何をすることが来たのかなと、あやしまれはしませんでしたか。」

と聞きますと、おじいさんは

「すぐにわかったよ。」

と笑ったのでした。

おじいさんの表現法には、いろいろ、注意すべきものがありました。たとえば、こうです。

○マー ジダイヤ フルイ ユータラ ヒトコトヤ。

まあ、時代が古いと言ったら、そのひとことでおしまいだ。

まことに、たくみな表現法だと思います。私どもには、こういう言いかたができていません。つぎに、おじいさんのことばにはかぎりませんが、「心得なさい」というのがあります。おじいさんから聞いた例はこれです。

○心臓がわるいから、ココロエナハレと、お医者さんに言われて、……………。

「ココロエナハレ」は、「からだに用心しなさい」ということだそうです。もう一つ例をあげましょう。ある日のこと、おじいさんのところへ、よそに嫁いている三十四、五歳のむすめさんが来ました。その帰りがけのことばが、つぎのとおりでした。

○オジサン、マー ココロエテ クダサイ ヤー。

「からだに気をつけてください」ということだったのだそうです。ついでながら、この帰って行くむすめさんのあいさつに答えた、おじいさんのことばは、〃おお、しっかりやれよ。〃でした。

### 俳句と歌

音吉さんに出会った初日のことです。会談が始まってしばらくすると、「アケビ」が話題になりました。「フユアケビ」は、「ムベ」と言うそうです。こんな話しの中で、おじいさんが、たちどころに、

〃クチ アケテ

ハラマデ アカス

アケビ カナ

と口ずさみます。「あれ、おじいさんは俳句をなさるんですか。」と言うと、「俳句も歌も、昔からやっている。」とのことです。「いいことですねえ。」と、ことばをそえますと、「お寺の坊さんが、わしらの作ったのを集めて、本にしてくれるんだ。」とのことです。「あ、この村に、そういう坊さんがいらっしやるんですか。」と、私は、驚きの声をあげました。おじいさんは、奥から、騰写版ずりの薄いとじ物を、幾冊か持って来て、見せてくれました。なるほどこれは、趣味の同人雑誌です。私は、村びとたちのために、こういう世話をする坊さんに、会ってみたいくなりました。——この坊さんこそ、私がのちのち、吉野の禅僧さん、と仰ぐ、すぐれた坊さんです。

その坊さんのことを述べる前に、川口音吉さんから、お別れの日にもらった扇子のことを、書きとめておきました。う。その扇子の裏がわには、「川口音吉 明治十年生八十七才 昭和三十八年盛夏」とあり、表に、私への十六首の歌が書かれています。そのいくらかを、ここに出してみましよう。

大峯の高根の青葉生茂り

涼しき風や盛夏忘れる

世の中は科学は進み恐ろしや

核の力で自滅するかな

真心の愛となさけで手をつなぎ

あかるい道を進みましよう

世の中で楽しきものは健康や

早ね早おき過食慎しめ

何事も明日とは言わず今日の日に

まとめておけや明日は雨降り

世渡りは下見て暮せ何事も

自分に過ぎた業は慎しめ

今までにかたりあいたる道知得

思いうかべて別れを惜む

### 吉野の禅僧さん

、この村で、歌や俳句の騰写版ずりを作る坊さんで、どんな坊さんだろう。、と、お会いしたくは思うし、反面、それが禅坊さんとあれば、にわかには、お会いしにくいようにも思いました。お会いする前から、もはや、私は、気おされていたのです。

幾日めかに、子どもたちのあとについて、ついに、お寺を訪ねました。お寺といっても、公会堂兼お寺です。（こんなしくみも、珍しいのではないのでしょうか。）お習字を習う子どもたちが、門きまで、口ぐちに、

「オシヨサーン。」

と、大声で呼ばわります。「オー。」と返事するのは和尚さんです。見れば、私などよりはずっと若い坊さんです。お年は、四十くらいに見えたでしょうか。和尚さんは、子どもたちのお習字のけいこ場に、古新聞紙を敷きならべていました。

「オシヨサーン。」、子どもたちの、この呼びかけのはりはりとした声を聞いた時に、私は、まいったという気になりました。こんな呼び声で、和尚さんにすっかりなついているのには驚かされます。やっばり、えらい坊さんだな。と、私は、心から頭をさげたのです。この日のことは、さておきます。つぎに、一夜、和尚さんと楽しく話しあったことを書きましょう。

和尚さんは、複雑な前歴をへてきたかたのようでした。いったい、このかたが、この山ざとの寺で、ひとりを守つていられることそのことが、すでに、多くの過去を暗示しているかのように思われたのですが、はたして、和尚さんは、青年期以来、人間のやることはみんなやってきたということですか。私は、自分の未熟を告白して、〃なんの修業もありません。ことに、禅は「ぜ」の字もわかっていません。じつを申しますと、私は、今まで、座禅を組んでみたりすることはきらいでした。うしろからたたかれたりするのはいやでしたから。〃と申しました。和尚さんは、それでよいのだというような意味のことを言ってくれて、ご自分の、禅修業で経験したさまざまのことや、出会われた禅の人びとのことを語ってくれました。

村びとからも聞いたことなのですが、和尚さんは、ときには、一文無しで過ごしていられることもあるそうです。〃なんにも無いときは、近所へたべさせてもらいに行くのです。〃とのことでした。良寛さんのようなかたかなあ。と、良寛のことも知らないままで、私は、考えたりしました。公民館らしくしている部屋を見せてもらおうと、そこには、多くの書物が置かれてあって、まさに、村びとのための文庫です。和尚さんが自力で集めた書物だそうです。中には、左翼関係のものもたくさんありました。和尚さんは、村の子どもや青年たちのために、遠大なことを考えていられるらしいのです。

寺の名は、心月院です。そのち毎年、和尚さんからは、年賀状にかえて、四月八日のお釈迦さんの日のあいさつ状が来ます。

心月院！

私は、この心月院の三字を口ずさむたびに、あの吉野川奥の上多古の、高い杉山の上をいった月を思いおこします。

## ○ ボタンなべ

こんどは、近畿も西北の但馬の話です。昭和三十三年一月そうそうに、私は、ゴム長をはいて、但馬南部の山奥の、旧西谷村に出むきました。ここでの一週間調査の一日、いちばん奥の部落の横行よこぎをたずねて、はじめてボタンなべを経験しました。

横行というのは、横になってはいらなくてははれないなどと言われている、行きづまりの部落です。冬には、雪が一メートルあまりも積もるそうです。

その夜は、小学校分校の宿直室に、本校の校長さんといっしょに泊まりましたが、夕食が「ボタンなべ」でした。いのししの肉が、まさに、ぼたんの花びらのようでした。ボタンなべをつつきながら、寄ってくれた村の人たちの方

言ばなしを聞くことができたのですから、これは、まったくのごちそうです。楽しい思い出は、ちっとも薄れることがありません。その席で、文字どおりしぜんのうちにとらえることができた、土地ことばのいくつかを、つきにかか  
げてみましょう。

一つ。道などの坂になっているのを、形容詞で、「サガエー」と言います。この「坂い」という造語は、山陰に、  
やや広く見られるものです。但馬のこの南部奥地にも、こうして、山陰ことばがあざやかです。

二つ。「どどこで」の「で」を、「カラ」と言っています。

○モー　バンニ　ヤマカラ　クロー　ナツタ。

もう晩に山で暗くなった。

この「カラ」も、じつは、因幡にさかんな言いかたです。

三つ。「買って」を、「カーテ」と言っています。この「アー」と流す言いかたも、山陰の全般に根づよい言いか  
たです。

四つ。「そうじゃ。」「そうだ。」などの「じゃ」「だ」にあたる場所は、「ダ」と言っています。これは、旧  
西谷村でも、とくに、この横行の特色らしく、小学校長さんも、この「ダ」について、横行特有のことばだと説明し  
てくれました。「ヨコンダ」（横行のダ）との言いかたもあるそうです。「ダ」は、これまた、山陰一般におこなわ  
れていることばですが、但馬も南部（——養父郡）となりますと、「ダ」の勢力がよわいらしく、但馬の東部では、  
「ソージャ。」などと、「ジャ」と言う所もあり、南部では、阪神流の、「ソーヤ。」の「ヤ」の言いかたも、せまっ  
て来ています。奥まってへんびな横行では、古来の、山陰の「ダ」が、よく温存されているというわけでしょうか。

○ヨコユキューー イナカダトモツテ、……………。

横行をいなかだと思つて、……………。

この例についても、小学校長さんは、横行特有の言いかたと教えてくれました。(「イナカダ」の言いかたが見られます。) ついでに言いますと、「ダ」の上に、「ン」があります。この、鼻音をここにうみ出しているのがまた、はなはだ山陰的です。「それでも」というのは、「ソレンデモ」と発音します。

五つ。横行では、つぎのように、「チャッタ」ことばをつかっています。

○ソリヤーー ヤケツチャッタンデス。

それは焼けてしまったんです。

この「チャッタ」ことばがまた、因幡のそれと同様です。関西地方に、関東地方のと同じ「チャッタ」ことばがあるのは、ちよつと奇異にも思われることです。けれども、関西にだって、こういうことばが、できてよかったのに相違ありません。ただ、関西とはいいながら、これが、ほとんど因幡、但馬の地域にとどまるかのように見られるのは、またしても興味ぶかいことです。

横行は、このような土地からですから、いろいろと、古語めいたものもあります。「なだめすかして」、「なだめて」は、「タラカエーテ」です。

○ハヨ イテ タラカエーテ ヤレー。

早く行って、なだめてやれ。

「タラカエーテ」はまた、説得することにもつかうそうです。

横行ことばに、つぎのような言いかたがあるのは、ことに注目に値しましょう。

○タダ モラオー オモウンダスケー ナー。

ただ、もらおうと思うんだサカイなあ。

「ダ」が出ているところは、横行特有です。それでいて、「しだから」の「から」が、「サカイ」となっています。大阪サカイの「サカイ」です。さきにもふれたように、この但馬南部には、だんだん、阪神中心のことばが押し寄せて来ています。「サカイ」はついに、横行の名を持つ、奥まったこのむら(邑)にも、はいつて来ました。

## ○ 伊賀の子どもたち

昭和の三十四年九月、三重県の伊賀名張市に属する滝之原という所で、一週間調査をおえた日のことです。かねて仲よくなっていた六、七人の子どもさんたちと遊びまして、いよいよ、さよならする時に、私は、〃記念に帰りますから、つえを作ってください。〃と頼みました。そうすると、五、六人の男の子たちが、いっさんに山に駆けあがりまして、驚いたことに、めいめい一本ずつ、つえを作つて来たのです。小学校の運動場の片すみで、そのつえを並べてくれました。私に、どれでも取れと言います。

さあ、これには困りました。見ますと、どの子どもさんも、みんな、しんけんな表情をしていて、自分のつえを取

つてくれればいいがなあといったようなようです。私はすっかり感激し、また、申しわけないことをしたと、困り  
 いていました。すると、ひとりふたりの子どもさんが、

「どれでも取るとき。取るとき。」

と言ってくれました。私はやむをえず、いちばん端っこのを、そっともらったのでした。

この子たちは、バスの停留所まで来てくれて、私の乗ったバスを追っかけながら、しきりに手を振ってくれまし  
 た。

## ○ 先生、去ネー！

志摩半島に、二度めに出かけたのは、昭和四十三年の四月のことでした。志摩半島の東海岸にある国崎（クザキ）  
 という所で、一週間の調査をしたのでした。

泊めてもらった宿の亭主が、当時五十五歳の、まことに気つぷのいい人で、その「オトコギ」（男気）には、すっ  
 かり感服させられました。宿についてまもなく、昼食になったのですが、料理を持って来てくれた主人が、

「ウチト オナジ ゴツツオヤデ ン。」（うちのと同じごちそうだからね。）

と言います。言うことに、すこしも飾り気がありません。

「あんたたちが、あんまり早く来たので、あわててしまったので、オツユモ スクナイワ。」  
 と言いながら、吸い物を持って来てくれます。

ここは、さかななどで、おまけに、この亭主の気つぶときていますから、お刺身の一皿が、まるで、刺身一鉢と  
 言いたいくらいです。

この人は、その荒っぽいことばにも似ず、情の人でした。調査に来た私どもを、よく世話をしてくれました。こう  
 こうしたうちを訪ねたいなどと注文しますと、なにをしていますが、それをほっておいて、すぐに、適当なうちへつれ  
 て行ってくれるのです。八十九歳になるおじいさんの家につれて行ってくれた時のことでした。この亭主が、

「オハヨー ゴザリマス。」

とあいさつするのです。ぶつきらぼうなこの人に、こういうあいさつのことばがありました。途上では、「オハヨ  
 ー。」と言いつばなしてさつさと行くひとが、老翁を訪ねては、右のようにかしまったあいさつをするのです。

この国崎は、あわび取りの漁のさかんな所です。私どものたずねた四月の上旬は、ちょうど、仕事のまっさいちゅ  
 うという時期でした。毎朝、港から、あわび取りの船が群れをなして出かけます。主人の世話で、私どもは、ひとあ  
 さ、主人の娘さんがついでにいるうちの船に乗せてもらいました。その乗る前ですが、浜べの小屋に、あま（海女）  
 さんたちが、だんだん集まってきました。小屋の中で、仕事着に着かえるのでした。

たき火がどんどん燃えています。あまさんたちは、談笑しながら、巻貝のようなものを焼いてたべたりしていま  
 す。

あまさんたちの出発まえのようすをじかに見たのさえ、この上もなく、もの珍しいことだったのに、いよいよ船に乗せてもらって、海でのありさまを見学します。

あまさんに乗せた、家いえの船が、出発の用意を整えて、今しもかかってくるはずの発進の合図を待ち構えています。どこからか、合図がかかってきました。すわつとばかり、船がばく進みます。幾十隻ものあわび取り船が、エンジンの音を立て、白波をけたてて目的地へ進むさまは、まるで、大艦隊の進撃のようでした。

六十を過ぎたおばあさんも、若い人にひけをとるところか、むしろ、若いもの以上に、あわび取りの腕のさえを見せます。ひとしきりの作業がおわつたところに、とりしまりの人が、ほらの貝を吹きました。これで、作業は、いっせいに「やめよ。」です。

ここで、国崎のことを、いくらか出しておきましょう。

○ハチジュークニモ ナルツテユート サー。

八十九歳にもなるとうとき。

○だれだれに言わせると、ヘータイワ ミソクソヤ サー。

○ホー サー。

そうさ。

このように、ここでは、「サ」をよくつかっています。伊勢でも聞かれることです。

○ヒコーフク ヨー キヤン。

飛行服をよう着ない。

「キヤン」は、「着ラン」で、「着ラ」は、「着る」の五段動詞化未然形です。「着ラ」が「着ヤ」になるというような、「ラ」√「ヤ」の変化は、近畿の大阪府が特にさかんなことです。

この土地に、変わったことばづかいもいろいろありまして、たとえば、「オジャレ」（来なさい）などということばも、昔ふうの人はつかっています。「キヤサレ」（来なさい）などということばもあるようです。

○アンタモ キヤサレ。

あなたも来なさい。

親しい人に、こう言っているそうです。その「アンタモ」のことですが、「ワガミモ」とも言っています。『年をとったおじいさんらに言うことば』とのことです。「アニキ」にだと、

○アジヨモ コイ ノー。

と言うそうです。

「おとうさん」のことは、「アンチ」だとのことです。「女の子」は、「アマー」です。ただし、これは、『かわいがることば』だそうです。

毎日、力づよい世話をしてくれた亭主は、なにかのついでには、

「センセーヨ。わしは コーユー オトコヤデ。」

と自己を語るのでした。滞在期間、一週間のおわりが近づきますと、主人は、幾度となく、

「シエンシエー モー イネー。」

と言うのでした。これが、私どもへの哀惜の表現だったのです。

# 中部地方

— 人生模様 —

## ○ 夫婦の縁

これは、中仙道の谷あいでの経験したことです。

泊めてもらったうちは、土地の大きな雑貨屋でした。でっぶりふとったおばあさんに、やせ型のおじいさん、その老夫婦のもとで、かいがいしく働く若よめさんには、ふたりの子がいました。主人さんらしい人が見あたりません。目を過ごすうちに、おばあさんがぼつぼつ語って聞かせました。おじいさんがその主人さんを勘当したことを。

(——養子なのだそうです。)

おばあさんがしみじみ語ってくれたのによると、じつは、おじいさんがかたいのだけでも、できることなら、一日も早く、むこを家にもどしたいのだそうです。そういうことについての世話を、おまえがしてくれればいいのだがとの意向でした。

ある昼すぎ、お嫁さんに、ちょっとお話しをと言いますと、嫁さんは心得て、二階の部屋に来てくれました。暑い夏の午後、私は、嫁さんと対座したものの、なにをどうきり出してよいものやら、すっかり困ってしまいました。夫婦のかんじんな問題を、はじめての私が、どうとりあげようもありません。私は、軽率を恥じながら、胸中で、しきりに、最初のことばをさがしました。

とどのつまり、

「奥さんは、ご主人を、今も愛していらっしやいましょうか。」

と言ってしまったのです。と、お嫁さんは、静かにうなずきました。私は、その無言のうなずきを見たあなたに、この人の、夫への思慕の情が、どのようなものであるかを、じゅうぶんに観察することができたように思いました。無言のうなずきを見て私は、どんなことがあっても、私なりにできるだけのことをして、この人たちの幸福のためにつくさなくてはならないと覚悟したのでした。

× × ×

翌年の正月あげく、私は、東海道線のある駅に降りたちます。そのおむこさんに会うためでした。私は、お嫁さんのはからいで、きめられたとおりに、駅の荷物の一時あずけの前で、私に近づいて名を呼んでくれる人を待ったのでした。

が、待てども、待てども、その人は、ついに現われませんでした。のちにわかったことですが、その人は、恥ずかしくて出むけなかったとのことだったそうです。

それから幾年後のことでしょうか、その家から来た年賀状に、おむこさんの名まえが刷りこまれてありました。すべては落着です。その賀状に、いつかぜひ遊びに来てくれと書きそえてくれたのは、お嫁さんです。それから今日まで、同様の書きこみのある年賀状が、毎年、届きます。

## ○ 二度目の出会い

ひと夏、青森県の「南部」と津軽との調査をおえて、羽越線を南下していた時のことです。例によって汽車は大混雑でした。——私は、調査の手だすけに来てくれた末娘をつれていきます。乗りこんだものの、身動きもできないほどです。通路に、団体客が新聞を敷いてすわっています。

団体のおじさんたちは、北海道旅行の帰りだそうで、北陸弁での大きわざです。中に、とりわけこっけいなおじさんがいて、この人は、通路にすわっていました。ふとしたひょうしに、私の娘に目をとめてくれて、こっちへ来いと呼んでくれます。おじさんは、腰かけている団体客のひとりに、席を譲らせて、私の娘をそこへすわらせてくれました。まったく思いがけない、もったいないことでした。それからの車中のことは省くしまして、後年のことです。

ある夏、高松で、一週間を過ごしまして、そのおしまいの日、栗林公園に遊びますと、手ぬぐいを肩にかけたおじさんたちが、そろそろとやってくるではありませんか。むこうに行くその人たちの、大きなしゃべり声を聞くうちに、私は、はっとなりました。中のひとりの声が、たしかに聞き覚えのある声です。私は、いそいでその方に近づきました。見ると、その声のおじさんは、まぎれもなく、羽越線で席をめぐんでくれたおじさんなのです。

「あ、またお会いしましたね。私は、あの羽越線で……。」と話しかけますと、先方もよく覚えていてくれて、

「あ、また会ったなあ。」「と、しきりになつかしがつてくれます。おじさんは、みやげに買っていたらしいものを、私にくれて、」「よくまあ、こうして会うものだなあ。」「と、親しみの情を吐露してくれます。

おじさんは、富山県の人です。

「ぜひ、うちへ来い。」「

「ぎつとお訪ねします。」「

のちに、富山県にこのおじさんのうちを訪ねたのは、田んぼの稲のそよぐころおいでした。

## ○ 男まえにほれぼれ

こんどは、北陸越前で経験した、楽しい話です。

私どもが、調査地に到着して、宿につきますと、魚屋も兼ねているこの宿の嫁さんが、いかにもさばさばともてなしてくれます。部屋に案内されたところで、私は、さつそくに、調査に来た用向きを話して、お世話を頼みました。ついて上がって来た小さな女の子は、孫さんだそうです。」「あ、もうおばあさんですか。」「と聞くようなしまつてした。そのひょうしに、この嫁さんのひと話しが始まります。

「私は、亭主の顔も知らないでとついで来たんですよ。結婚式がおわっても、まだ、亭主の顔がわかりませんで

した。相手をつかまえて、「もし。」と呼びかけると、「おれじゃない、兄貴や。」と仰うのです。それは主人の弟だったんです。これが亭主だとわかってみると、なんと男まえではありませんか。私は、ほれぼれと亭主を見あげました。そして、<sup>、</sup>ああ、うれしや。<sup>、</sup>と思いました。それから、きょうまで、毎日、亭主の顔を見て暮らしているんです。”

私どもは、晩には帰って来るから亭主を見てくれと言われて、晩を楽しみにしました。

七時ごろ、主人さんと思われる人の話し声が、下から聞こえてきます。私どもは、おもわず顔を見あわせて笑いしました。

調査がおわって、ここを発った時は、その男まえの、大がらの主人さんが、私どもの荷物を、軽がると両手にさげて、駅まで持ってきてくれました。

## ○ 身のうえばなし

夏に、東海道の渥美半島に行った時のことです。

ある日の夕がた、にわか雨にあつてたち寄せてもらったうちが、母子ふたりという家庭でした。おかあさんは、どこかに勤めていて、今のことばでいえば、ひとり子の娘さんが「かぎっ子」です。小学生のかぎっ子でした。よう

やく反抗期にもはいったらしくて、若いおかあさんは、悩んでいました。勤めには行かなくてはならないし、子ども  
のことは頭にいっぱいだしというところでした。そういう人にとっては、私のような、旅のものでも、教員のひとり  
でもあるというわけで、話し相手になるらしいのです。

思いつくことをあれこれ述べて、子どもさんのあつかいを、おかあさんといっしょに相談しました。

この家での話しあいとは別のことですけれど、まえに、山陰の因幡に行った時も、ふとした縁から、道ばたの一軒  
の家で、ふたりの子どもをかかえて健闘する若いおかあさんの話しを聞いたことがあります。今も覚えている一つの  
話しはこれです。なんとしても、子どもたちと心を通わさなくてはなりません。そのため、いろいろなもおし  
を企てます。ときには、茶話会をやったりもするというのです。茶菓子を買ってきておいて、ひよいとそれを出し、  
「さあ、きょうは茶話会よ。」と、平素の飯台にきれをかけたたりして、その場をつくるというような話でした。昼  
は、山に、くずの根を掘りに行って、男まさりの働きをするおかあさんが、雨ふりなどに、親子座談会を茶の間でし  
ます。生活につとめる母のすがたとも言えるものが、ここにありましょう。

さて、渥美半島でのことですが、もう一組の母子像にも、行きあいました。この母子は、戦争のあと、母びとの実  
家に身を寄せていたのでした。この母おやが、家のみなどの生活の調和に心をくだしていることを、こまごまと語っ  
てくれました。聞いていて、私も、たいへんだなあ、と、つくづく思ったことです。このおかあさんは、家の中で  
も畑でも、人びとの先頭に立って働いています。当主はこの人の弟にあたり、したがって当主夫人はこの人よりもか  
なり若いのですが、その人によく気をつかって、なにかと、実弟夫人をもちたてているのでした。けなげというこ  
とは、このさい、不適當かもしれません。が、じつに見あげた心がけの人だと、私は敬意を表したのです。つとめれ

ばつとめるほど、なにごとくもほどよくいくことを自覚した人の、努力精進の心境には、ただただ、頭がさがるのでした。今ごろは、この母おやのひとり娘さんが、どこかで、いいおかあさんになっていることかと思えます。

この渥美半島からは、ちょっと離れますけれども、尾張の知多半島で、私はまた、一つのありがたい経験をしています。訪ねたうちの人が、じつに心の美しい人たちでした。多少、前まえからの縁があつたので、私は、わりと気らくに、そこを訪ねたのですが、行ってみて、いかにも予想にたがわない、いい人たちを、そこに見いだすことができました。その若い主婦が、すぐにおいとましようとする私に、なごりを惜しみつつ述べてくれたことばが、

“わたしにも、おとうさんと呼ばせてください。”

というのでした。じつは、この人の夫君の実弟を、私は、前から世話をしているのです。彼らは、早く、父おやを戦争で失いました。その母おやは、私に、父おやがわりになってくれと言ってくれています。そのことを受けての、若い妻君のことばでした。“わたしにも、おとうさんと呼ばせてください。”

こういうことばがしげんに発せられた、その時の、その人の、心づかいの深さ、心ねの美しさを、私はくりかえし思うのです。

## ○ 甲州の宿

昭和二十九年の五月でした。山陽線の車中で、たまたま隣りあわせた山梨県の人と、仲よくなりました。かなりぬくいのに、この人は、何かたくさん着こんでいるようです。だんだん話しあっているうちに、コルセットをはめていることがわかりました。団体旅行で、九州へ行くのだとのことでした。

見るからにおだやかな中年男性でした。私の仕事が方言調査とわかると、「いつか、ぜひ山梨へも来てくれ。自分のうちに泊まってくれ。」と言ってくれます。この人は、清水さんという人でした。「私は、ぜひ寄せていただきませ。」と、感謝して、かたく約束したのでした。

その年の暮れ、十二月二十三日のことです。東京からの帰り、山梨県中巨摩郡なかこま荊沢はらぎさわに、清水さんを訪ねました。

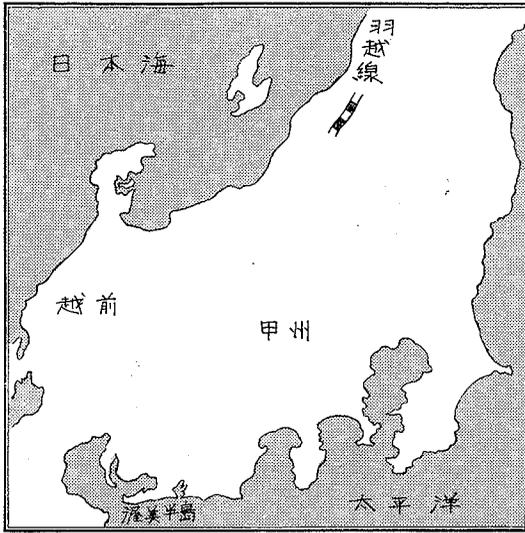
旅中で知りあった人をたずねて、そのお宅にまで寄せてもらうのは、無礼なことですけれど、つよくすすめられるばあいもすくなくなくて、この清水さんのお宅ばかりでなく、そちこちに、人のうちを訪ねさせてもらいました。そのどれもが、私にとって、楽しい思い出であることは言うまでもありません。

清水さんのうちには、当時七十四歳のおとうさんがいられました。清水さん夫婦の間には、男ふたり、女ひとりの三人の子どもさんがありました。

泊めてもらった翌朝のことです。清水さんも、おじいさんも、私に、

「ユーベワ ゴツツオサンデ ゴザイマシタ。」

とあいさつしてくれます。ごちそうになったのは私なのですが、その私がいえばいいようなことばを、先方が言ってくれます。これは、私がついてあがつたしるしばかりのものへの、謝礼のことばでした。主婦の、食後にお茶をすめてくれたあいさつは、こうです。



○サー オチャオ オアガンナスツテ クダスツテ。

さあ、お茶をおあがりなさってくださいませ。

小さな坊やが、すぐになついてくれます。

「デンシヤミチ アルズラ？」（電車みちがあるでしょう？）

などと言い寄ってきてくれます。

「オリガミ オシエテ ヤツ カー。」（折り紙を教えてくださいようか。）

ということになります。小さな子が、土地ことば「ズラ」を、じつによくつかうのが奇妙なくらいでした。長男の小学二年生の坊やも、

「ゴー モツテルラー。」（こう持つてるだろう。）

と、私に話しかけてくれます。ここでも、小学生の「ラー」という言いかたが、耳をうちました。なるほど、方言のもの言いというものは、こういうふうな、小さな人たちへもよく伝えられていくのだな。〆と思われました。女の子のひとりごとには、

「ヒン ネー」。(火がない。)

というのがありました。こたつに火がないことを、ひとりごとで言ったものです。この子にも、「ヒガ」を「ヒン」と言うことばづかいが、ちゃんと伝わっています。

私は、この日、清水さんのお世話で、荊沢から、西の山奥に、要地調査にはいるつもりでしたが、清水さんのお世話にもかかわらず、乗り物の便利がどうしても得られませんでした。家の人たちは、もうひと晩、泊まって翌日、行くようにと、しきりに言ってくれます。私は、かさねてやっかいになるのが心ぐるしかつたので、「このたびは、いったん広島に帰ることにしました。」とくりかえし申しました。その時、小さな坊やが言ったことばは、

「トマツテ イケ シー。」(泊まっておいきよ。)

です。みんなして、泊まるようにすすめてくれ、坊やも負けずに、こう言ってくれたのでした。さて、この「イケシー」の「シー」です。ひよっとすると、「もしもし」の「モシ」の「シ」かもしれませぬ。「シー」のつく言いかたを教えてくださいと頼んだところ、

○ドツチボール シロ シー。

というのを教えてくださいました。「シー」は、「モシ」の「シ」だと思われませぬ。思われぬ所で、こういう「シー」に接しました。ゆだんがなりません。

この日は、しいて気まますをさせてもらって、ここをおいとましましたのですが、翌年の十二月、およそ同じところに、ふたたびこの地をたずね、清水さんのお世話で、西の、十谷じゆくという、山あいの小村落に、一週間の調査をほどこすことができました。

甲州ことばの言いぐさ

ハンデ メタメタ イナヨ

ゴツチヨデ ゴイス

ハンデ||早く

メタメタ||いくどもいくども

イナヨ||気もちがわるい

ゴツチヨデ||めんどうくさい

ゴイス||ございます

○ハンデ コー。

いそいで来い。(「ハンデ」に、しばしばの意もある。)

○コン トコガ イナヨデ ダメダ。

このところが異なるようだめだ。

○ゴツチヨダカラ シナンデ イタ。

めんどろだからしないでいた。

△以上、みな、口授によるものです。▽

関東点描

## ○ 九十九里浜へ

終戦後、まもないころのことです。(昭和二十二年でした。)十一月の十五日、朝、国鉄の東金駅とうがねから、九十九里鉄道の一便に乗りました。この電車で、九十九里浜の片貝まで行きます。子どもころから、地図で見知っていた九十九里浜です。——一度、行ってみたいものだ、思いつづけてきたのでした。

東金駅を出てからというものの、線路はまっすぐにのびていて、電車は、田んぼの草みちを、東の浜さして走って行きます。「あったダヨ。」などと乗客が寒そうに話すのを聞きながら、片貝の終点に着きました。下車した時は、逆に乗りこむ人の群れに包まれて、とまどってしまいました。片貝町とはいうものの、町らしくはなくて、片貝ことばの中へはどうしたらはいっていきけるのか、見当がつきませんでした。そこらを歩いてみても、新開の家なみで、どうも不安です。町長さんのうちを訪ねてみましたが、あいにくと、町長さんはるすでした。奥さんに教えてもらって、小学校への道をたどります。

「ヨツカドカラ マツスグニ、ウエサ アガツテ イキマス。」

ということなので、教えられた道を行いました。しばらく町どおりをとおって、町らしくないところへ出ます。

ふと左がわを見ると、一軒のうちで、おじさんが火ばちにあたって、つくねんとしているではありませんか。まだ

朝のことです。おじさんも、やっとおちついたところかもしれませぬ。私はいったんそこを行き過ぎましたが、妙に、今のおじさんのおちついたようすが、心をひきます。近ごろひまな人のように思えてなりませんでした。ひき返してみることにします。

そのうちのぞくと、おじさんは、光る頭で、たばこをすっています。大きな火ばちと、そのはげた頭とのつりあいが、いかにもひまそうな感じをただよわせていました。意を決して、〃おはようございます。〃とガラス戸をあけます。ここは、「カタカイマチのニシノシタ」という所でした。おじさんは、つけもの商で、五十六、七歳のようでした。

私のやって来たことを、すぐに了解してくれました。私は、すすめられるままにあがつて、火ばちに寄せてもらいました。〃けさはまだ、弁当をたべていませんので。〃と、失礼をもちえりみず、ほんとうのことを述べて、火ばちでパンをあぶらせてもらいました。パンといつても、四、五日まえ、広島を発つ時に用意してきた自家製のパンです。麦の粉がまぜてあるので、黒いうえにパラパラします。それをあぶりながら、いりこのおかずもあぶりました。これらを、おじさんにもすすめました。もう、聞き書きは、さつきから始まっています。のどかな朝に、手弁当を出したのですから、さつそくに双方の間に親和感がわいて、まことに調子がよいことです。この老主人のおかあさんが、やがて出てきてくれました。八十二歳のおばあさんです。若よめさんが、おみおつけをあたためて出してくれます。家の人たちの、朝の家庭の言語生活が、そっくりそのまま、私の耳にはいつてきます。

〇 おみおつけがさめるから。〃とかわれては、それを一口いただき、また、おわんを置いて、書きつけを始めます。家の人みんなに黙ってもらわないかぎり、記録をやめることができません。——とはいふものの、なにかと話して

くれるようにしむけているのはこちらです。書くのをやめることは、当然、できないわけです。こんな調子での会話と書きとめと、これほどこちよいことはありません。

このおじさんの発音では、「ふつうに」は、「フチーニ」と聞こえます。「物を縛る」の「しばる」は、「スバル」と聞こえます。「おとなしく」の「シ」は、きれいな音でした。このあたりは、東北方言の系統を受けて、中舌母音の発音を示しがちです。

古いおばあさんはおもしろい人で、持って来て見せたのが、白いもめんぶろしきの古めかしいので包んだ、ひと包みのものです。

“あの世へ行くときの身じたくを、いろいろしているんです。”

と言いながら、やおら、その包みを開いてくれます。中の紙包みの一つが、なんと、今までに抜けたおばあさん自身の歯をみんな包んだものでした。どういうわけで、こういう歯を、と聞くまでもなく、おばあさんが、

“めいどへ歯を持って行って、ナニカ タベツペーと 思って。”

と説明してくれました。驚きいったことです。おじさんも、私も、おばあさんも、みんな笑いました。

「タバツペー」などという「ペー」、これは、例の「ベーペー」ことばの一変形でしょう。おじさんも、「ペー」を言います。

○イチゴー、マスガ、アツペー。

一合ますがあるだろう。

これは、嫁さんに言ったことばです。おじさんのことばには、

○ツケモンノ クミアイデ ソーカイ ヤルベーと 言つて、……………。

など、「ベー」も出てきました。まさに、「ベー」ことばです。

おじさんのことばで、注目されたものに、なお、つぎのようなものがあります。

○ケンカゴシノヨーナ ハナシモヨーニ ナル。

「ハナシモヨー」という言いかたがありました。

○コ|ニ|ニ ナツテ、アサツク ヤル 人は、「オハヨー。」と言います。

懇意になつて、浅くやる(ざつとあいさつする)人は、「おはよう。」と言います。

○ただ「おはよう。」と言つて、トリスガツチャイマス。

「トリスガツチャウ」という言いかたがありました。

○ヤツパリ クナンギ シマシタカラ ネー。

やっぱり苦難儀をしましたからねえ。

「クナンギ」も、珍しいことばでした。

おじさんは、私の調査をねぎらつて、

「オーボネデス ナー。」(たいへんなほねおりですねえ。)

と言ってくれました。

おばあさんのことばの二、三をあげてみますなら、

○ウチニバカリ モグツテ イルダカラ、アンモ シラネーデス ヨ。

うちにばかりもぐっているから、なんにも知らないですよ。

○ヤス|デバカリ イルデツ|サ。

休んでばかりいますよ。

○ドーユー フーニ シタ|バネー。

どういうふうにしたらばねえ。

などがあります。

おばあさんは、

〃ヒロシママデ ヨツボド カカルダツペ ネー。〃

と、はるばるとくだつて行く私の身を案じてくれました。

おじさんといっしょに浜に出てみることにになりました。また、もとの道をもどり、さらにつつきって行って、干し魚のおいのするあたりから海へに出ます。ちょうど、網を引きあげるところでした。おじさんが、いちいち解説をしてくれます。勇ましいことに、網を引く人たちは、男も女も、十一月の海に半身をつけて、えいや、えいやの大でえです。ふんどし一つの男衆も、ちつとも寒そうにしています。見ているほうが、はだ寒くなりました。

〃来年、夏に、ひと月ばかり遊ぶつもりでいらつしやいよ。〃

と、おじさんは、親切に誘ってくれます。ほんとに、そうさせてもらいたいところです。このあたりから浜づたいに銚子のほうへ出ることも、早くから予定していることです。

ですが、私の貧弱な方言の旅では、同じ所へかきねて出かけることが容易ではありません。全国調査の目標のもとで、調査の目をしだいにつめていこうとすると、つきからつきへと、新しい所へは行って行かなくてはなりません。同じ谷あいにはいったとしても、寝とまりには、前とは違った集落を選ばなくてはなりません。

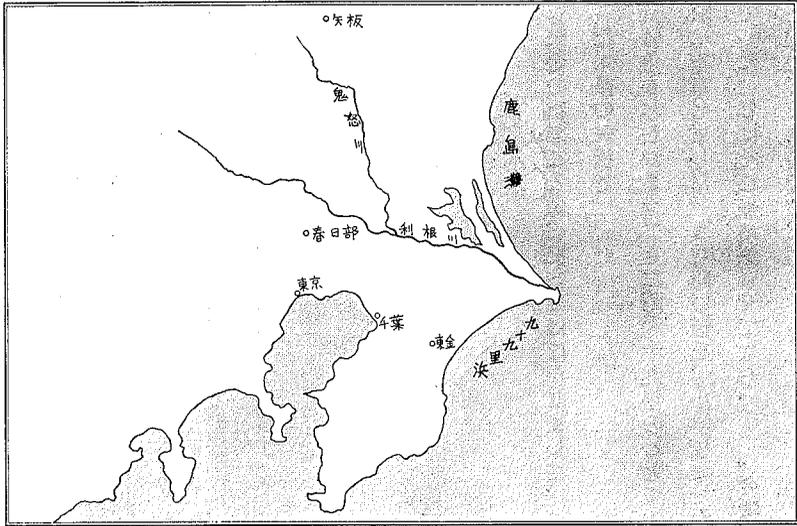
片貝のおじさんたちは、今、どうしていられることでしょう。片貝の前日のこと、夜おそく東金に着いて泊まった宿のことも、忘れられません。そこでの経験は、私には、空前絶後のものなのです。時はたちましたが、あらためて東金、片貝を訪ねてみたいここちがします。

## ○ 関東の宿

東金の宿のことは、発表をはばかりまして、つぎに、ほかで経験した宿のことを述べます。

### 栃木県の矢板で

戦争もおしつまつてきた昭和十九年のことです。九月の末に、東北地方からくだつてきて、夕がた、栃木県の矢板駅に下車しました。うす暗い道を、小学校までたどり着きますと、おりよく、二、三の男の先生がいられて、雑談中でした。私はそこへあがらせてもらって、*「今晚、方言調査の便利が得られるような宿屋はありませんでしょうか。」*と尋ねてみたのです。



中のひとりの若い先生が、「うちへ来て泊まりませんか。」  
 と言ってくれました。私は、そういうとっさの親切に、とまど  
 ってしまいました。びっくりするやら、うれしいやらで、とう  
 とう、その先生のおうちに寄せてもらいました。

行ってみますと、六十歳くらいのおとうさんが、ろばたでお  
 茶を飲んでいます。あがりますと、さっそく、茶わんで、「ま  
 あ、いっぱい。」とすすめてくれます。「では。」といただき  
 かけて驚きました。これは、酒だったのです。（——これこそ  
 は、私の大のなが手とするものです。）が、これがきつかけに  
 なって、すぐさま、みんなの歓談が始まりました。おとうさん  
 は、

「ほんの ツユシノギデ。」

というあんばいで、いたって気さくに私を受け入れてしてくれまし  
 た。

「スヨシ ヤンナクチャ。」（すこし飲まなくちゃ。）

と、酒をすすめてくれます。ろばたの酒の席が、かつこうの方  
 言調査の場になったことは、言うまでもありません。

夜もふけまして、おやすみということになりました。寝どこに案内されましたが、どうやら、部屋は、若い先生たちご夫婦もやすむ部屋の様子です。ともかく、恐縮しまして、私は、静かにやすみました。やがて、電灯も消されました。先生たちご夫婦も、やすんだようです。この若い先生が、ひじょうに熱心な人でした。

寝どこで、むこうのほうから、私にいろいろと学問の話しをします。国語の問題とか、国語教育の問題とかを、つぎつぎに質問します。そして、奥さんに、

「あなたも、よく聞きなさいよ。」

と言っています。まことに珍しい経験でした。

#### 埼玉県の春日部の宿

終戦後、まもなくのこと、東北から南下してきました、埼玉県の東の方の春日部という所に泊まりました。宿を見たのが、夜の八時ごろだったでしょうか。むろん、宿で夕飯をたべることなどは、当時、あまり考えようもない時節でした。寝るために宿を求めるといふようなところだったのです。

宿屋のおばさんが、くつは持ってあがりなさい。と言います。うっかりそのへんに置こうものなら、なくなってしまうというような時でした。

くつを提げて、へやにはいりますと、もう、先客がふたりもいて、寝ています。見ると、それぞれのまくらもとに、くつが置いてあります。くつの黒いのと、頭の黒いのが、並んでいます。

私は、あいた所に夜具をのべまして、寝るしたくにかかります。まくらもとには、同じくくつです。さて眠ろうと

しますが、心の中まで寒ざむとしてきて、なかなか寝つかれません。

そうこうするうちに、廊下に、男女ふたりのらしい足おとが聞こえてきます。おや、またお客さんだな。と思つていきますと、そのふたりが、私どもの部屋にはいつてきました。床の間の近くに、あいている所があります。そこが、この人たちの寝る場所になりました。

ひとつ家に遊女もねたり萩と月

さっきまで寒ざむとしていた私の心も、しぜんになごんできました。おかげで、安らかに眠りにつくことができました。

## ○ なになにしてッカラ

さきの矢板でのことです。ろばたのおとうさんのことばに、「考えながら行くと」の「行くと」が、「イグット」とありました。「イクト」でなくて、「イグット」と、音をつまらせています。

○ソリヤ モー イッテーシテッカラ。

それはもう一定しているから。

というような言いかたも、おとうさんの口から出ました。

○ホラン ナツ コトモ アル。

ほら(うそ)になることもある。

というような言いかたもありました。「なる」が、「ナツ」となっています。こうして、この地方では、つまらせてものを言う習慣がつよいありさまです。

時は移ります。今から幾年まえだったでしょうか。○○ちゃん事件というのがありました。いわゆる公開捜査にふみきられた晩のこと、放送は、

「マツテッカラ ネ。」(待っているからね。)

というのを伝えました。私はこれを聞いて、ははあ、北関東から南奥羽にかけての地方の人かな。ゝと思ったのでした。

## ○ 日本橋とうきょう弁

昭和四十六年十月八日

「日本橋」そだちの人たち 八横山さん(男性六十九歳)、野村兄さん(男性六十五歳)、野村弟さん(男性五十九歳)▽

会話の席 野村兄さん宅 (藤原も)

「？」は、不明音をあらわす。

横山

イヤ ソレワ ワタシモ オボエガ ゴザイマス。エー。アノ、ウツカリ ナンス ネー。アトニ ショー  
 いや それは わたしも 覚えが ございます。ええ。あの、うっかり なんです ね。あとに しょう  
 ト オモツタラ、ソノマンマ ツンドイテ。エー。エー ソーシテ セイリオ シナイ。ソイデ ナンデス  
 と 思っ たら、そのまんま 積んどいて。ええ。ええ そうして 整理を しない。そいで なんです  
 ネー。 ヒトニ アゲル ブンワデス ネー。ヤ？マス。ジブンノ ホーワ ネー。コレワ アトデ イッタラ  
 ね。 人 に あげる 分はです ね。 ます。自分の ほうは ね。これは あとでといったら  
 ソレツキリデシヨ。イチネン タツテモ セイリオ シナイ ト コー ナツチャウ。ネー。ソースルト  
 それつきりでしょ。一年 たっても 整理を しないと こう なっちゃう。ね。 そうすると

ツンドクトス ネー。"モー イラニンナラ ミンナ コレ ステル、ステマス ヨ。"ト コー イワレ  
 積んどくとです ね。 もう いらぬいんなら みんな これ すてる、すてます よ。"と こう 言われ

ル。エー。ジャマデ ショーガナイカラ。アータ ゴゾンジナンデ、アスコイ ツンデ アツタデシヨ。ア  
 る。ええ。じゃまで しょうがないから。あなた ご存じなんで、あそこへ 積んで あったでしょう。あ  
 レノ ウチデス ネー。アイダニ チョコツチョコツト ステラレチャヤ コマル モノガ ハサマツテル。  
 れの うちです ね。 あいだに ちよこつちよこつと すてられちゃあ こまる ものが はさまってる。

野村弟ズイーブン ツンデ アリマス ネー。

ずいぶん 積んで あります ね。

## 横山

ソ一カッテツテ ね一。イラナイ モノモ ソ一ト一 アルンデシヨ一。ソレオ ミンナ ???  
 そうかといつて ね。 いらぬい ものも そうとう あるんでしよう。 それを みんな ヒトリ  
 イレトクンデシヨ。 スルト??? アイダイ ハイツチャウ。ソイツオデス ね一。コレモシ ナンダツタ  
 入れとくんではよ。 すると あいだへ はいつちやう。 そいつをです ね。 これもし なんだつた

ラ オキヤクサンガ ミエテモ トツテモ コン ナカジヤ ミットモナクテ ショ一ガナイシ ね一。カタ  
 ら お客さんが 見えても とつても この 中 じゃ みつともなくて しょうがないし ね。 かつ  
 シチマイマスカラ。 “ア ダメ。テ一 ツケチャ ダメダ。ウツカリ テ一 ツケルト コマルンダカ  
 してしまいますから。 “あ だめ。 手を つけちゃ だめだ。 うっかり 手を つけると こまるんだか  
 ラ。 “ツテ。 “ソ? ツチャ イツマデデモ オイトクンダカラ ショ一ガナイ ヤ???。 “ト、 コ一 イワレテ  
 ら。 “つて。 “そう言つちや いつまでも 置いとくんだから しょうがない “。 “こう 言われて  
 ルノガ アレナンデス ワ。  
 るのが あれなんです わ。

## 野村弟

ズイブン ツンデ アリマス ね一。ワタシ ね一。 ナーnde アガ一、 ソンナ コト ユ一ト オコラレ  
 ずいぶん 積んで あります ね。 わたし ね。 なんて あんなに、 そんな こと 言うと おこられ  
 チャウ ワカンナイ、 ワ一 ワルイケド ね一。ゴジブンノ ソバエ サ一。  
 ちやうかわかんない、 わるいけど ね。 ご自分の そばへ さ。

## 横山

ア一 ヤツテ ね一。スワツテ ね一。ソイデ チヨット コ一 ヤットクデシヨ。タマツテ クルンデス  
 ああ やつて ね。 すわつて ね。 そいで ちよつと こう やつとくでしよ。 たまつて くるんです

ネ。エー。  
ね。ええ。

藤原 ナンデスツテ。カタシチャエ。  
なんですって。「カタシチャエ。」

野村弟 ウン、カタスツテ ……。  
うん、「カタス」って ……。

横山 カタズケチャエ。  
かたづけちゃえ。

野村弟 「カタズケル」ト？「カタシチャエ」ツテ ユーデスヨ。  
言うんですよ。

藤原 「カタス」ツテユーノワ、カタズケル ……。

野村弟 「カタス」ツテナ、「カタズケル」、コー ユーネー。ミジカク  
こう 言うね。みじかく こう なるんですよね。

野村兄 「ステチャエ」ナンテ イワナイ。「フテチャエ」デシヨ。  
なんて 言わない。 でしょ。

野村弟 フテチャエツテネ。  
「フテチャエ」って ね。

横山 トコロガ、エノゴロネー。オカシインデスネ。アノ、ウチノジムシヨニネ。アノー ナンス、キョー  
ところが、このごろ ね。おかしいんですね。あの、うちの 事務所 ね。あの なんです、京

トノ カタガ キテデス ね。  
都の かがたが 来てです ね。

野村弟アグラオ、ドース カ。クズシテ、……。  
あぐらを、どうですか。くずして、

横山 コレガ クセデ ネー。  
これが くせで ね。

野村弟クセデ。  
くせで。

横山 アグラノ ホーガ、アノ スケナインデス。  
あぐらの ほうが、あの すくないんです。

野村弟ウーン ソース カ。  
うん そうですか。

横山 ???? コー ナツチャウ。ソエカラ、ヤリマス。ヤルケド ネー。ソノ ホーガ ジミヨーガ ミジカイ。  
こう なつちやう。それから、<sup>あぐら</sup>やります。やるけど ね。その ほうが 寿命が みじかい。

野村弟オタクワ ????、ザイスイ ヨツカカツテカ?、ザイス、アレシタラ、……。  
お宅は 座いすへ よっかかかって 座いすを あれしたら、

## (中略)

藤原

イヤ キノーモ、チツトモ オクズシニナラナイデシヨ。  
 いや きのうちも ちつとも おくずしにならないでしよう。

野村第

ムカシ ヤツパリ スワツテ ショーバイ、ナスツタ カタデス ヨネー。  
 むかし やつぱり すわつて 商売を なすつた かたです よね。

横山

アー タタミデモツテ ネー。ムカシノ ショーテンノ ミセデシヨ。チヨバゴシツテ ヤツオ オイ  
 ああ たたみでもつてね。 むかしの 商店の 店でしよう。 帳場格子つて やつを 置い  
 タデシヨ。 ソン ナカエ スズリバコト ネー。ナガトジノ チョーメンオ オイデデス ネー。ソコニ  
 たでしよう。 その 中へ すずり箱とね。 長とじの 帳面 を置いてです ね。 そこに

コー ヤツテ スワリコンデ イテ、ソシテ イチイチ シナモンノ デハイリカラ ネー。ソノ、チホーノ  
 こう やつて すわりこんで いて、そして いちいち 品ものの 出はいりから ね。 その、地方の  
 カタガ カイモノニ クルト ネ。ソレニ タイスルデス ネー。モー、イチイチ ネー。スグ??? タイ  
 かが 買いたるもの 来ると ね。それに 対するです ね。 もう、いちいち ね。 すぐ たい  
 テー ネー。スグ、シラベテス ネー。ツマリ、イマノ セーキユーシヨデス ネー。ソレオ カキツケツ  
 てい ね。 すぐ、しらべてです ね。 つまり、今の 請求書です ね。 それを 書きつけつ  
 テ??:... カキツケオ カイテ、ズーツト シナモノオ コー カイテ、ソレ ミンナ、ナンデス ネー。マ  
 て 書きつけを 書いて、ずうっと 品ものを こう 書いて、それ みんな、なんです ね。 巻

キガミオデス ネー。コー ヤツテ テニ モツテ ネー。コー ヤツテ スミオ ツケチャー コー ヤツ  
 きがみをです ね。 こう やつて 手に 持つて ね。 こう やつて すみを つけちゃあ こう やつ  
 テ カク。ヒロゲナガラ カク。エー。ソーシテ、スツカリ カイチマツテ ムコーサマノ アテナオ カク  
 て書くんです。ひろげながら書くんです。ええ。そうして、すつかり 書いちまつて 向こうさまの あて名を 書く  
 ト、ソーツト チョット オツテデス ネー。ソイテ サーツト キツテ、ソイテ、コー ヤツテ マクデシ  
 と、そうすると ちよつと 折つてです ね。そして さあつと 切つて、そして、こう やつて 巻くでし  
 ヲ。チャツチャツト コー ヤルデシヨ。→  
 よう。ちやつちやつと こう やるでしよう。

藤原

アノ、キル トキワ ドー ヤツテ ……。  
 あの、切る 時は どう やつて

横山

エー ソノ、コー ヤツテ マキガミ マイテ、キュツト コー コツチー カエシマス ネー。カエスト  
 ええ その、こう やつて 巻きがみを 巻いて、きゅつと こう こつちへ かえします。ね。 かえすと  
 ソコン トコデ スーツト キルンデス ヨネー。  
 そのの ところで すうつと 切るんです よね。

藤原

ソノ トキニデス ネー。  
 その 時にです ね。

横山

エー、ナメマセン。ナメナクツタツテ、アノ、スーツト カミキリデ ヤリマス。  
 ええ、なめません。なめなくなつたつて、 あの、すうつと 紙きりで やります。

藤原

ア、カミキリデ。  
あ、紙きりで。

横山

エーッ。ソイデ アト、コー ヤツテ マクンデス ヨネー。エー。オーイソギデス ヨ。ミンナ。ドンドン  
 ええ。 そいで あと、こう やって 巻くんです よね。 ええ。 おおいそぎです よ。 みんな。 どんどん  
 ドンドン マイテ、トントン タタイテ、ソイデ、ソイツオデス ネー。コー チャツチャツ ト タイラニ  
 どんどん 巻いて、とんとんと たたいて、そいで、そいつをです ね。 こう ちゃつちゃつと たいらに  
 オルデシヨ。ソシテ アノ、フートン トコエ チョット イレテ ダス ワケデス ネー。エー。 チョッ  
 折るでしょう。そして あの、封筒の とこへ ちよつと 入れて 出す わけです ね。 ええ。 ちよつ  
 チョット オツタ トキデス ネー。ソノ、ハナノ オリメガデス ネー。ハナ カイタ トキニ ネー。スコシ  
 ちよつと 折った 時です ね。 その、はじめの 折り目がです ね。 はじめ書いた 時に ね。 すこし  
 グライ コー ノコシトイテ、ソイカラ カキマスカラ ネー。ソスト ソレガデス ネー。ジガ カイタ  
 ぐらい こう 残しといて、 それから 書きますから ね。 そうするとそれがです ね。 字が 書いた  
 ？？ガ コー オレルト モンク イワレル …。ソエカラ、ナカエ コー マイテツカラ、ナンスネ ムコ  
 とこが こう 折れると 文句を 言われる。 それから、中へ こう 巻いてるから、なんです ね 向こ  
 ーサマノ アテナガ コー デルデシヨ。コー ヤツテ ヤルデシヨ。ソノ トキニデス ネー。ジブノ  
 うさまの あて名が こう 出るでしょう。 こう やって やるでしょ。 その 時にです ね。 自分の  
 ナマエガデス ネー。ウラエ デテ オモテエ ムコーサマノ ナマエガ チャーント デテ、ソエカラ、ス  
 名まえがです ね。 裏へ 出て 表へ 向こうさまの 名まえが ちゃあんと 出て、それから、す

コシ コツチノ ホーエ チョット オレテデス ネー。 コー タイラニ コー ヤツテ、ソイツオデス  
 こし こっちの ほうへ ちよつと 折れてです ね。 こう たいらに こう やつて、そいつをです  
 ネー。 フートエ イレテ ダスト。ソーユ フーニ ネー。 オレナカッタラス ネー。ダメダツチュ……。  
 ね。 封筒へ 入れて 出すと。 そういうふうに ね。 折れなかつたらです ね。 だめだ わけね。  
 エー。 アテナナンゾ オッタラ トツテモ ケシカラナイシ、ジブンノ ナマエモ オレチャ イケナイ。  
 ええ。 あて名なんぞを 折ったら とつても けしからないし、 自分の 名まえも 折れちゃ いけない。

# 開拓の旅

—— 研究開拓の旅、無限につづく旅 ——

## ○ 小さくてしかも広い国

国は小さいようでも、これを日本語の方言の国として見たら、なかなか広い国です。ここには、じつにさまざまの方言があります。大陸の東の端に、長く弓のように横たわっている島々に日本は、南北にわたって、いわれも深い、方言の山野をくりひろげています。これを調べる旅の、なんと、限りもない、はるかな旅であることでしょうか。

しかし、このような「方言の山野」を歩いて、研究を開拓するのが、私どもの仕事です。上来、私は、そういう開拓の旅のことを、述べてみたつもりです。(まだ、一斑のことしか述べ得ていません。が、今は、これをもって他を想像していただくほかはありません。)

それにしても、以上で、調査の方法、研究の方法なり、成果の一端なりは、うち出すことができたとおもいます。私は、今、これだけの記録をとのえて自分をかえりみ、なお、多くの人たちとともに、今後の道を求めようとしています。——言うことがゆるされますならば、私は、この一冊の記録を、自己の人生の学問である「方言の学問」の、はしがきにしたいのです。

## ○ 北海道のはつ旅に思う

私にとつては、北海道もまた、自己の研究開拓の旅での、夢の対象でした。その北海道に、やっとのはつ旅の足を踏み入れることができたのは、昭和四十一年八月のことです。行ってみて、ああ、ここにもたしかに、研究を開拓すべき広い領野があるな。／＼と思わせられました。

函館に着いたのは、朝がたでした。函館駅の構内の歩道を歩いていると、老女から老男への、

○ハヤエイ コト。

おはよう。

というあいさつが聞こえてきます。歩きながらお聞いていますと、男女のことは差がないと言いたいありません。

この日、一日、聞き歩いたところでは、人びとが、いわゆる敬語をさほどつかっていませんでした。女の人も、「くだよ。」といった調子を見せて、荒っぽい感じでした。

後日、旭川で友人に会いましたが、この人の電話のことが、

“……………カイ。”

でした。（問いの「カイ」というのは、人びとがよくつかっています。）また、この人には、

「ドーダ イ。」（どうだい？）

というのもありました。相手は、学校の事務の人だったのです。聞いている私は、そぼくな言いかただなと思いましたが。

函館から半島部を北上する間じゅう思ったことは、やはり、東北弁のつづきだなということでした。中舌母音の発音があり、「そうだ。」は「ソダ」とあり、「ペーペー」ことが聞かれ、「サ」文末詞がつかわれています。

すでに、人びとに北海道方言研究があり、移住者の二世、三世で見られる言語変貌についての研究なども出ていますが、なお、北海道の方言の研究には、開拓の余地が大きいことが思われました。私がとくに問題にしないではいられなかったのは、文アクセントの研究です。南部の大沼公園あたりでの聞き書きですが、つぎのような抑揚が聞かれました。

○ドッコノ エキデス カー。

どこの駅ですか。

○オーヌマコーエンエキ。

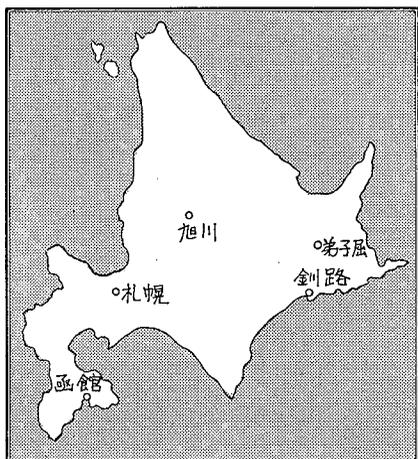
△相手の言を受けて、それをくりかえしたことば。▽

○イマ チョット オハナシチュエデ、チョット ワカリマセン。

今、ちよっとお話しちゅうで、ちよっとわかりません。

○チョット モー イッケン アタツテ ミマスカラ。

ちよっともう一軒あたってみますから。



○ココノ センタハイヤー アルンデスケド、マダ キテ ナインデス。

この「センター」ハイヤーがあるんですけれど、まだ、来ていないんです。

これらの抑揚を聞いて、私は、文アクセント調査の意欲を高めずにはいられませんでした。娘さんが、共通語をと心がけて話しても、その話しことばの抑揚には、なんとも根の深そうな地方色が出てくるのでした。

のちに、東の方の弟子屈温泉<sup>てしかが</sup>でも、二十四歳の娘さんから、つぎのような抑揚を聞きました。

○トーキョーマデシカ ナインデス。

△本州は、どこまで旅行しましたかと、私がたずねたのに対する返事。▽

○ターイシテ シナイ ネー。

△スキーをVたいしてしないね。

文アクセントばかりではありません。文の一般の表現法にも、たとえばあいさつことばに、つぎのような習慣があります。

○オハヨ ゴザイマシタ。

おはようございます。

これは釧路でのことでした。私が、「おはようございます。」とあいさつすると、相手は、右のように答えてくれたのです。抑揚もすぐに注意されましたが、「ゴザイマシタ」の「タ」のむすびが、耳を打ちました。旭川でも、私の知人が、電話をかけて、

〃モシモシ。オハヨー ゴザイマシタ。〃

と言いました。彼は、この「オハヨー ゴザイマシタ。」をくりかえしました。のちに、私がたしかめてみますと、彼は、もういっぺん、

○オハヨー ゴザイマシタ。

おはようございます。

と試演してくれたのです。そこで、私は、この「タ」について、彼に質問しました。それへの彼の答えは、こうです。

〃「マス」も「マシタ」も同じです。「オバンデ ゴザイマス。」も、「オバンデ ゴザイマシタ。」も、「オバンデス。」も、「オバンデシタ。」も、みんな同じです。〃

北海道での「ことばの世代変化」の研究も、単語でするのに加えて、文表現形で行っていくことが必要なのではないだろうか。語的には世代変化が言えても、文表現的には、世代変化がすぐには言いにくいことが多いかとも思います。文表現上では、その表現形式にしても、抑揚にしても、変移しにくいものがあるかのように思われます。——すくなくとも、このほうでは、世代変化ということをし、く、めい（克明）に言うことが、容易ではないように思われます。それだけに、北海道方言についても、文表現本位に見ていく研究の必要が大きいと言えそうに思うのです。

——研究開拓の必要が、ここにあるでしょう。

## ○ 愛の方言学

研究開拓の旅は、限りもない旅です。今すぐ私の胸にも、あのこと、このことと、やりたい調査がつきつきにうかんできます。辺境地帯といつてはことばがわるいかと思いますが、はしばしの、長く、交通不便なまままで今日におよんだ地域を、全国のそちこちに求めて、辺境本位の調査をまとめることも、一つの大きな課題です。それから、瀬戸内海という内海域に対する、中部地方の信州というような内陸域、——四方からの影響の、かくべつ複雑であったろう内陸域を調査することも、好ましい課題です。

私は、方言の学問を生活語の学問と考えていますが、右のような研究の開拓を、人びとが無限に進めていって、生活語の学問を開拓し、そこで産み出すことができた知識を、世の共有の知識にすることができれば、日本語の（国語の）生活の将来は、楽しい、みのりゆたかなものになると思います。そこをめざすのが、「愛の方言学」であります。

今日、国語の問題は、けっして単純ではありません。いろいろな方面に、さまざまな問題がおきています。これらの諸問題と対決し、日本語（国語）と日本文化との進展をはかるためには、日本語に生きる人びとが、めいめい、根本から、自己のことばの生活を考えなくてはなりません。そのさい、方言の研究は、人びとの座右に生き

るものになっていなくてはならないと思うのです。

私は、愛の方言学をめぐして、今日まで、この道を歩んできました。この歩みの記録、本書が、多くの人びとに理解されるならば、私にとって、これほどしあわせなことはありません。述べてきたのは、旅の話でもあったのですが、中の一つ、貫き通したつもりなのは、私どもの国語の生活をよいものにしていきたいという精神です。

ことばをかえりみて、おたがいの平素のもの言いの生活を、すこしでも、わかりやすい、とおりのよいものにしていきましよう。

このようなことを申し出てもみみたいのであります。

あ と が き

私には、旅に出ている時にも家にいる時にも、方言の山野を見はるかす思いがあります。方言の生きたすがたを求めていけばいくほど、「方言の山野」との思いが、深まってくるのです。

昭和二十三年の十一月十七日から、二十四年の一月十五日まで、いったん、『方言の山野——方言研究のために——』という原稿を書きあげました。（その時までの実地調査をかえりみて、将来のための脚をきたえようとしたのであります。）

探究に探究を重ねていっても、ついに果てしない、方言の実地研究のしごとは、まことに、方言の山野をふみわたるしごとです。山や野はらに、行脚の道の、なんと無限にひらけていることでしょうか。

「方言の山野」の思念が、一方で、自然科学的精神のきびしい導きを受けなくてはならないことは、もとよりであります。新たな勉強が、つぎつぎに課せられました。思えば、そういう勉強の世界も、無限につづく研学の山野です。

山野に行く私に、多くの恩恵の与えられたことを、今、私は、しずかに思いかえます。学の叱咤を拝受したことは、このさい、述べることを控えさせていただきます。

このたびは、日ごろ、心の底で、深く謝しあげてきたかたがたのお名をかかげて、お礼を申します。倉敷の故片岡元一先生、故原澄治先生、ありがとうございました。加古川市平岡町の荒木智夫先生、おかげさまで、坐骨神経痛はすっかりよくなりました。

調査現地のみなさんには、どんなにお礼を申しあげてよいやら、ことばありません。じつは、この書の全体が、みなさんへの、お礼の微意の表現ともなるならばと、ひとり思うのであります。

この一冊の本を、私は、自己の研究の旅の一記念標ともして、今後、さらに、自身の道を尋ね歩んで行きます。思いを、方言の山野の雲に馳す、です。

この稿の作成の時は、広島大学教育学部大学院の中洩正堯君が助けて下さいました。また、校正では、広島大学助手佐々木峻君が助けて下さいました。お二人に、心からお礼を申しあげます。

本書を出版して下さる文化評論出版に感謝し、かつ、担当の木村逸司編集長に、かくべつのおほねおりを謝します。

著者略歴

藤原与一 (ふじわら よいち)

明治42年 愛媛県に生まれる。

昭和12年 広島文理科大学文学科卒業。国語学専攻。広島大学文学部教授を昭和47年退官。文学博士。

著書。「日本語方言文法の研究」、「方言学」、「方言研究法」、「国語教育の技術と精神」、「日本語方言の方言地理学的研究」、「日本語方言文法の世界」、「方言研究の回顧と展望」(方言研究叢書第1巻)、ほか。

方言の山野

—ことばのさとをたずねて—

昭和48年4月11日初版発行

定価 一二〇〇円  
一四〇〇円

著者 藤原与一  
装幀 志賀啓二  
発行者 荒木妙子  
印刷所 明邦印刷(株)

文化評論出版(株)

106 東京都港区六本木三―六―九

(電) 〇三―五八四―七六六八

(振替) 東京 一四八、三九三

733 広島市観音本町二―九―一一

(電) 〇八二二―三三―六二八二

(振替) 広島 九六七